

IS～駆け抜ける嵐

BD3

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

コウ・ウラキをISの世界にぶちこんだ話

初投稿作品

完結

目次

2 2話	2 1話	2 0話	1 9話	1 8話	1 7話	1 6話	1 5話	1 4話	1 3話	1 2話	1 1話 後編	1 1話 前編	1 0話	9話	8話	7話	6話 後編	5話 中編	4話 前編	3話	2話	1話	0話
86	81	78	73	70	66	61	57	53	48	45	42	38	33	28	25	22	18	15	13	9	7	4	1

4 3 話	4 2 話	4 1 話	4 0 話	3 9 話	3 8 話	3 7 話	3 6 話	140	IS 紹介？ いいえガンダムと登場人物の紹介です。その2人物編	編	IS 紹介？ いいえガンダムと登場人物の紹介です。その1ガンダム	3 5 話	3 4 話	3 3 話	3 2 話	3 1 話	3 0 話	2 9 話	2 8 話	2 7 話	2 6 話	2 5 話	2 4 話	2 3 話
																			後編	前編				
174	171	168	164	158	155	152	149			134		131	129	125	122	119	116	113	111	107	103	100	96	91

S T A R D U S T  M E M O R Y	4 7 話	M E N  O F  D E S T I N Y	4 6 話	4 5 話	4 4 話
196	191	185	181	177	

## 0話

『ウラキ中尉、聞こえますか！こちらアルビオン！』

ウラキ中尉、聞こえますか!?!』

「こちらウラキ、今コロニーを出た...」

『ウラキ中尉無事だったんですね！今アルビオンは...』

「なっ... なに?」

通信士の声を妨げかのようにコウを待っていたのは緑色のMAノイエ・ジールを駆るパイロット、アナベル・ガトーであった。

「フッフ、腐った連邦に属さねば、苦しむことはなかっただろうに」

『どうしました?ウラキ中尉?ウラキ中...』

通信を切り、目の前のMAを見て驚いた。

「待っていたのか、俺の為に...!」

自らの退却の機会まで捨て、コウとの決着をつける為に待っていたのだ。

そしてノイエ・ジールからビームサーベルが展開され

同じくコウの駆る試作3号機デンドロビウムからもクロー・アームの奥から射出された大型ビームサーベルを展開した。

先に動いたのはノイエ・ジールで、ビームサーベルを振りかざし斬りかかろうとしたがデンドロビウムに防がれ

両者の鏖迫り合いが始まった。

「でえええええやああああ!!!」

「せえええええやああああ!!!」

「ぬえああああああ!!!」

「ぬおおおおああああ!!!」

二人は叫んだ、決着を着けるために。

sideサミラス級「マダガスカル」

二人が戦っている中、バスク・オムが私怨に駆られていた、バスク

はノイエ・ジールに向けてソーラ・システムを放つよう指示した。

しかし、その射線には味方艦隊が残っておりバスクはそれすら関係なく放とうとする。

「お待ちください！我が連邦の艦も前に・・・大佐!!」

男は止めようとしたが聞く耳すら持たず、バスクから出たのは凶悪な笑みであった。

その頃、コウとガトーは格闘戦を繰り広げていた。

「くううう!!」

「ぬううう!!」

二人の機体に側面同士がぶつかり合い、そのまま通り過ぎたが、ガトーのノイエ・ジールがすぐさま機体を反転させ、肩部からメガ粒子砲を撃った。

コウも機体を反転させるが、ガトーの撃ったメガ粒子砲がクロール・アームに直撃、もう一つのクロール・アームからビームサーベルを展開するも、ノイエ・ジールの有線式クロール・アームによって握り潰すと同時にデンドロビウムの背後に回った。

「後ろかあ!!」

「遅い!!」

ノイエ・ジールのサブ・アームでデンドロビウムの背後に取りつき、分離出来ないようにした。

「どうだ!!分離も出来まい!!・・・ん?」

ガトーが見たのはソーラ・システムの照準がこっちに向いているとこだった。

そして、光が放たれた。



# 1話

side???

(ここは…どこだ…ガトーにトドメを刺され俺は死んだのか…いや違うトドメを刺される前にソーラ・システムの光でやられたんだ…)

コウは、自分まとめて撃った連邦に対して、怒りが込み上げてきたが突然、光が見えてきたがなぜか体が引つ張られているように感じたのを同時に、光が段々と大きくなっていった。

そして…

「ジュンコさん、生まれましたよ！元気の男の子です！」

「ば？(え?)」

コウの体が赤ん坊になっており、状況が追いつかず思いっきり叫んだ。

「おぎやああああああ!!!(うああああああ!!)」

この産声が、コウ・ウラキの第二の人生が始まった。

-----

side アナハイム・エレクトロニクス社(AE社)

東京にあるAE社の通路を歩く男がいた、その男の名はコウスケ・ウラキ、ジュンコ・ウラキの夫である。

本来なら、妻の出産を病院で待ち一緒に喜びを分かち合う予定だったが、直前に社長から呼び出しを受けたため、その予定が無くなってしまった。

(社長が自ら呼び出すなんて、私なにかしてしまったのか…?いや

呼び出されたという事はひよっとしてまさか、クビ宣言かあ!?)

などネガティブに考えてしまうコウスケなのだが、技術面に関しては、後の篠ノ之束と張り合う位の技術を持っている。

(一応、ジュンコには連絡したけど怒ってるだろうなあ…。 ああ、社長の部屋まで来てしまったよお…)。

恐る恐るコウスケはノックをした。

『入りましたえ』

「失礼します社長」

ドアを開けた先には、実にエレガントな佇まいで二度見するぐらいの美男子であった、その美男子の名はトレーズ・クシユリーダで別名「エレガント閣下」である。

この男は昔、腐敗したAE社を立て直す為に、不正など関わった人物を追い出し、赤字経営だったのを黒字経営にするなど鮮やかな手腕で立て直した。しかも、入社してからたった半年のことである。

「すまないね、君の奥さんが頑張っている時に呼び出したりしてしまつて、ああ適当に座つてくれたまえ」

そうトレーズは座るよう促しコウスケは座つた。

「あの、社長ご用件と言うのは…。？」

「これを見たまえ」

そう言いながらパソコンの画面を見せた。

「…。これは!？」

コウスケが見たのは、この世界で見たことのない機体であった、だが所々ボロボロであったためあまり分からなかったが、コウスケが分かったのは頭部にアンテナやメインカメラが集約されており、ぱつと見ると人間の顔を想起させるものであった。

「これを一体どこで見つけたんですか!？」

「この地下で私が発見したものだ正直、最初に見たときは驚いたものだ、このボロボロは恐らく戦闘にできた傷だろうね…。」

「この機体に名前はあったんですか?」

「残念ながら名前は無かった…。なので私が不本意ながら名前をつけた、「ガンダム」と…。」



## 2話

「ガンダム……？それがこの機体の名前……」

「私が勝手につけた名だから君がつけてもいいのだよ？」

「いえ、不思議なことになぜかそちらの方が呼びやすい気がします、でもこの機体は一体どこで作られたんですか？」

「実はそれが分からないのだよ、いつ、どこで、作られたさえすら分からない……この記録を調べたがそのような情報は全く無かったの  
でね……」

トレーズはそう言い、しばらく考えていた。

（いつ、どこで、作られたのが全く分からない……暗部に調査依頼はしたが、めぼしき情報はなかった……手のつけようがないね）

流石のトレーズもお手上げだったが、コウスケは発想力を活かしてこう言った。

「もしかしたらこの「ガンダム」は、地上や宇宙で活動するために作られたのではないでしょうか？目的はおそらく、なにかと戦う為に」

コウスケはトレーズにそう言った。

「その「なに」かとは、どうゆうことかな？」

「「ガンダム」と同じく位の兵器じゃないでしょうか？そっちの方が納得しませんか？」

トレーズはコウスケのぶっ飛んだ発想を聞いて、それはあり得ると考えた。だが「なに」かと戦う。つまり、それは「戦争」があったことを指していた。

トレーズは考えた、この先もしかしたら戦争が起きるのではないかと考えてしまった。

（ならこの、「ガンダム」を使った計画をたてなければならぬ……しかしそれは最後の手段として置いとかねばなるまいね……）

「コウスケ」

「社長？どうしたんですか？」

「この「ガンダム」のコンセプトを引き継いだ兵器を君に作って欲しい」

「え?でも・・・」

「君の言いたいことは分かる、これを作るということは我々は禁忌に触れ、戦争を引き起こす犯罪者となるだろうね、だから「計画」を立てたいと思うその計画の名は・・・「ガンダム開発計画」だ」

「ガンダム開発計画・・・一体どんな計画なんですか?」

「さつき言ったとおりガンダムのコンセプトを引き継ぎ「最強」のガンダムを君に作って欲しいのだが、今はその時ではない・・・だから時が来たらまた君を呼ぶさ」

トレーズはそう言い、時計を見た。

「ああもうこんな時間か、長話をしてすまないね気をつけて帰りたい」

「ありがとうございます、それではお先に失礼します」

そう言つてコウスケは社長室を後にした。

「さて、この先はいつたいどうなるのか神のみぞ知るだね」

その後、トレーズはガンダム開発計画の準備に取り掛かった。

会社を出たコウスケはこのあと、ジュンコのいる病院に急いで向かい、赤ん坊を見たときコウスケは、とても嬉泣きをしていたようだ。

### 3話

コウがこの世界に生まれ落ちてから時が経った。

ある日、コウはコウスケにA E社に連れてこられた、その理由は「コウに見せたいものがある」からだだった。

—————

side A E社

「父さあん、こんな朝早く見せたいものってなんなんですかあ・・・休日なのに・・・」

「お前が見ればきつと驚く！ほら早く行くぞ！」

コウスケはその急かし、元気に走っていた。対するコウは嫌々ながらもゆっくり走っていた。

「ここだ、ほら中に入りなさい」

そう言い、格納庫にコウを入れ後に続くようにコウスケも入ったが、格納庫が暗くてまったく左右前後すら分かった。

「電気つけるぞ、前を見てないなさい・・・」

コウスケは格納庫の電気をつけ、コウに前を見るように言った。

そこでコウが見たものは・・・

「なっ・・・なに？」

「声が出ないほど驚いているのか、確かに最初は皆そうだったからな・・・コウ？どうした？」

コウは言葉が出なかった何故ならば、

そこに置かれていたのはG Pシリーズの

ガンダム試作0号機ブロッサム

ガンダム試作1号機ゼファイランサス

ガンダム試作2号機サイサリス

ガンダム試作3号機ステイメン・デンドロビウム  
ガンダム試作4号機ガーベラ  
の5機体のガンダムが作られていたからだ。

見覚えがあるとすれば、試作1号機ゼファイランサス、試作2号機サイサリス、試作3号機ステイメン・デンドロビウムだったが、試作0号機、試作4号機はコウは初めて見た。

(なんでこんなところにガンダムがあるんだ!?この世界はガンダムとは無縁だったのに・・・なぜなんだ!?)

驚きつつも、コウは試作1号機に歩みより機体に触れたれたその瞬間、記憶がコウに流れ出した。

その記憶は、コウがヒヨツ子の時に搭乗していたもので、ガンダム試作2号機がガトーによって奪われた際、近くにあったのが、この試作1号機であったためそれに乗り込み、ガトーの行く手を阻んだ時の記憶だ。

『この先に行かせはしない!!』

コウはそう言いつつも体が震えていた、訓練とは違い、初めての实战であったからだ。

ガトーが先に動き、試作1号機に斬りかかるがコウがギリギリで防いだが、背後に回られキックを食らった。

『意気込みは良し、だが私を敵に回すには君はまだ・・・未熟!!』

場面は変わり、燃え盛る炎の中に試作2号機が現れた

『おのれえ、このアナベル・ガトーは3年待ったのだ!貴様達のような分別のない者どもに、我々の理想を邪魔されてたまるか!!』

『我々の理想?』

『我々はスペースノイドの真の解放を掴みとるのだ、地球からの悪しき呪縛を我が正義の剣によってな!!』

『解放?何を・・・?』

コウはガトーに対して口出しをした。

『こんな戦術レベルの最中に何を・・・』

『君も将校だろう！只の兵でないのなら、大局的にものを見る!!』

『はっ… はい!!』

ガトーは思わずコウに説教をしてしまった。

『あっ… 私に敵だぞ！ふざけているのか!!』

そして場面は変わり、3度目の接近戦が繰り広げられていた。

『何故、2号機を盗んだ!!』

『貴様などに話す舌を持たん！戦う意味さえ介せぬ男に…！』

『それでも… それでも僕は、連邦の士官だ!』

『それは一人前の男のセリフだ!!』

ガトーは1号機を押し倒しトドメを刺そうとした。

『2号機の冷却システムを狙って!』

女の声が通信に響き、コウはビームサーベルで2号機の冷却システムを貫いた。

『ちい…！抜かったか!』

ガトーはそのまま退却し、コウはガトーを逃してしまった。

記憶はそこまでしか流れなかったが、コウは、昔のようにとても懐かしく思えたのだった。

『コウ?どうしたんだ?そのガンダムが気になるか?』

『父さん、このガンダムは動かせるのか?』

『いや、まだまだ先だ、このガンダム達を「IS」化にしなければならぬ作業があるからな、やることは山積みだな、コウも見ただろ?あの発表を…』

そうガンダム開発計画が開始されたのは、篠ノ之束がISを発表されてからすぐの事だった。

トレーズはISの発表から一か月後に、篠ノ之束がISを使った事件を引き起こすのではないかと予想していたからだ。トレーズ曰く、

篠ノ之束は恐らくISの力を使って、全世界に脅威を知らしめ、いつでも世界を乗っ取ることが出来るというものではないかと考えていた。

『このガンダム達をコンパクト化にするってことかあ… じゃあ完成



に近い機体はどれなんだ？」

「完成に近い機体？今完成に近い機体はあれだな」

コウスケは試作0号機を指差した。

「なんだ？もしかしてお前ガンダムに乗りたいのか？先に言っておくがそれはできないぞ」

「別に乗るつもりなんかないさ、ただ気になっただけさ」

コウは気になっているだけでなく、乗ってみたいという気持ちが多かつたのだ。

「さて、そろそろ時間だな。コウ！今から従業員とかが入ってくるから今日の見学はここまでだ！」

「ええ？もうちよつとだけ見たいよ・・・」

「お前が機械好きなのは分かるが、今日はもう終わりだ！俺はここに残って指示しなきゃならないのでな、すまないが一人で家に帰ってくれるか？母さんも家にいるんだ」

コウはガンダムをもつと見てみたい気持ちを押しさえ、そのまま家に帰ったのだった。そして部屋で緑色の球型のロボット作りに励んでいたそうなの。

そして一か月、白騎士事件と呼ばれる事件が発生した。

## 4話 前編

白騎士事件発生前

あるところに二人の女がいた。

一人はISの開発者である篠ノ之束と、後にISの世界大会に優勝し「ブリュンヒルデ」と呼ばれる織斑千冬であった。

「ちーちゃん、白騎士の調整は終わったよー」

「ああ、助かる」

「さあーで、今回の作戦はね、とても簡単！私が全世界の軍事施設をハッキング、ミサイルを私達がいるところに座標をポチッと、あとはちーちゃんが白騎士でバツサバツサと全て落とせば成功だよー」

束はこのように発言しているが、もし千冬が一つでも落とせなかつたら、被害は免れない作戦であった。

「さあー早速だけど作戦開始だよーちーちゃん頑張つてね！」

千冬は領き白騎士を装着し、この場を後にした。

(まあ、ちーちゃんが全て落せなくて誰かが犠牲になつてもどうでもいいんだけどね。私の目的はISの力を見せつけただけだし)

しかし作戦というのは予想外の展開もあるのだ。束がそれに気付くのは先の事である。

side AE社

「社長！失礼します！全世界の軍事施設がハッキングされ、ミサイルが発射されました！」

(遂に、動いたか・・・篠ノ之束)

「ミサイルの数は？」

「発射されたミサイルの数は・・・2000発以上です!!」

「2000発以上か・・・落下地点はどこだ？」

男はモニターを映し出してトレーズに見せた、そこに映し出されたのは、白きISであった。

(このIS・・・見た感じ、射撃武装が見当たらないがもしかして、格闘に特化したISなのか？IS的にはエレガントだが、それをミサイル迎撃に使っていることに関しては、あまりエレガントではないね・・・)

トレーズがそんなことを考えていると、コウスケから連絡があった。

「どうした？コウスケ？」

『大変です！うちの息子がガンダム試作0号機をパクっていきました！！』

「何？」

『今止めないと大変な事に・・・あ、コウ！止まれえ!!止まれえ!!すみません社長！すぐ止めます!!』

「待ちまたえ。0号機は出せるのかい？」

『はい、出せますがあれはパイロットの負担を無視してます・・・まさか!?!うちの息子を出すんですか!?!』

「そうだ、息子さんには危険な思いをさせるが、今は緊急事態だから致し方ない・・・。だから私が全責任を背負う!!」

『分かりました・・・0号機を出すんだ!』

通信は切れ、トレーズは窓の外を見た。

(死なないでくれたまえよコウスケの息子・・・コウ・ウラキ)

そしてトレーズはある人間に電話をかけたのだった。

## 5話 中編

### 白騎士事件発生前

コウは、あの日からガンダムをもう一度見たい気持ちを押さえきれず、コウスケに見せて欲しいといった。

しかし、忙しいから無理だと断られてしまった。

粘り強く見せて欲しいとい何回も言い、コウスケは折れた。

「分かった分かった、ただし条件として10分の時間制限をもうけさせてもらうからな」

「本当!?!ありがとうございます!」

(まったく困った息子だ・・・だが、そこが子供らしさだけだな)

そして、AE社に着きコウはすぐさまガンダムがいる格納庫に走った。

「10分だけだからな、そこでおとなしく待っているんだぞ」

コウスケはその場から離れ、現場の指揮に入った。

コウがガンダムを見ている時、どこともなく緑色の球型

「ハロ」がコウの足元に転がり込んできた。

「ハロ?なんでこんな所に?」

「ウラキ、ミテ!ウラキ、ミテ!」

ハロから映し出されたのは、男がトレースにミサイルが日本に飛んできていることを報告していたものだった。

コウはハロをその場に置いて、全面装甲の試作0号機に駆けた。

「くそ!どうしたら起動できるんだ?・・・うわっ!?!」

コウは0号機に吸い込まれるように装着した。

「なんとか装着できたか・・・武装はなんだ?」

試作0号機の武装一覧

バルカン砲

ビームサーベル

大型ビームライフル

ビームスプレーガン

特殊装備：ミノフスキー粒子干渉波検索装置

変形・・・コア・ブースターⅡ

であつたが、コウはこの武装でミサイルを落とせるのかと不安になつた。

回りを見渡すと武装した警備員に囲まれていたが、無理やり押し通した。

コウスケは何か叫んでいたが、コウはそのまま通りすぎた。

そして格納庫の扉が開き通信が入った。

『コウ聞こえるか？ たつた今社長から出撃命令が出た・・・本当ならこうゆうことは駄目なんだか緊急事態だからな・・・だから、コウ！ 絶対に死ぬんじゃないぞ！ 絶対だからな！』

「分かったよ父さん・・・」

『家に帰ってきたら母さんと一緒に説教してやるからな！』

そうしてコウスケの通信は切られた。

その次にトレーズからの通信が入った。

『コウだったね？ 今から君に作戦を伝えるからよく聞いてほしい。本機は今からミサイル迎撃に当たつてほしい。座標を今送つたがそこは住宅街の付近であり、誰も避難をしていない。このミサイル発射を知っているのは我々と全世界の軍事施設の人間そして、篠ノ之束である。』

彼女の目的はISの力を全世界に知らしめる為である。我々が座標を送った地点は彼女が作ったISがミサイル迎撃に待ち構えているだろう。

もし交戦したとしても最優先はミサイルを撃ち落とすことだけでありISと戦う事ではない。それだけは念に置いてくれたまえ。

『それでは、健闘を』

トレーズの通信は切れ、コウは0号機の操作レバーを握った。

「コウ・ウラキ！ガンダム試作0号機、出ます！」

コウ・ウラキの戦いは、今火蓋を落とされた。

## 6話 後編

コウは試作0号機のスピードを全開にしていた。

試作0号機は高性能な機体ではあるが、ロクなテストをしていないため、操縦性がとても劣悪であり、パイロットの負担が大きすぎるものであった。

更に、ミノフスキー粒子干渉波検索装置はミノフスキーがあるのさえ分からないこの世界に必要なのかとコウは思った。

もしあったとしても使えるかがどうか分からなかった。

だが高性能な機体ではあるため、例え操縦性が劣悪でもやらなければならなかった。

コウは同じ様な体験を二度している。

一度目は、ガトーが強奪したガンダム試作2号機に取り付けられた戦術核、MK-82核弾頭を奪い返すために行動していたが、ガトーが単機で観艦式を襲撃。核が放たれたこと。

二度目は、コロニーの阻止限界点を防ぐ為に戦っていたが、阻止限界点を越え失敗したこと。

コウはあのような悲劇を繰り返してはならない、絶対に阻止しなければならないと誓っていた。

「間に合え…間に合え…間に合えええええ!!」

コウの叫びは空に響き渡った。

### side ミサイル迎撃地点

その頃、千冬はミサイル迎撃に当たっていたが数が多いため取りこぼしが多かった。その為何発かのミサイルが日本の街に落下していた。

しかしどこからともなく、ビームの光が現れミサイルを破壊していった。

それをモニターで見っていた東が衛星をハッキングし光を放った方向に注目した。その先には、ガンダム試作0号機であった。

「間に合った！よし、今からミサイルを破壊する！」

コウはそう言いながら大型ビームライフルを撃った、オーバーヒートすればスプレーガンで対応し、接近してビームサーベルで切り落としたりしていた。

だが、それを見ていた東は気に入らず、0号機をハッキングし、動きを止めようとするがハッキングが出来なかった。

(チツ、誰かが私の邪魔をしているのかなあ?)

何度も何度もハッキングをするもブロックされ、東の苛立ちは、段々積もっていった。

ブロックをしているのはコウスケであり、先を読んで防御をしていた。ここでも、技術者同士の戦いが始まっていたのだった。

「ああもう、鬱陶しいなあ！」

(ハッキングをしている相手は篠ノ之東…… ISを作るほどの天才…… だが！俺も老いぼれぢやない！)

コウスケは三手先を読んでブロックするなど人並み外れた能力を見せた。これを見ていた同期の仲間は、味方なら頼もしいが敵なら恐ろしいと、感じていた。

一方コウは、千冬が斬り損ねたミサイルを破壊していった。

(あのIS…… 格闘に特化した機体か？よくあそこまでやれるもんだな……)

コウは驚きながら誉め、ミサイルを破壊するなど器用にやっていた。

それは千冬も同じであった。

(あの機体…… ロクな武装もないのによくやれる…… 操縦者の腕がいいのだろうか)

ミサイルの数は着実に減っていった。そして……

「これで終わりだあ!!」



コウのビームサーベルで最後のミサイルを落とす、すべてが終わり通信が入った。それはトレーズからであった。

『よくやってくれた、お陰で被害はまったく無かった後の事は私達に任せて君は速やかにこちらに戻っ…』

「社長?…うわっ!?!」

通信が途切れ、何者かがコウに襲い掛かった。それは千冬の白騎士であった。

コウが一部のミサイルを破壊していったため、それを見た束はそれに怒った。

『ちーちゃん、あれ破壊できる? 将来、私達の邪魔になるかもしれないから』

この時の束は、冷静では無かった。ハッキングしたらブロックされるわ、ミサイルの一部は破壊されるわ等、怒りの要因があった。将来、ISを脅かすものであれば排除しようと考えていたほどであり、千冬も同じであった。

「くっ… 何故こんなことをする!!」

『それは… 貴様の存在が許されないからだ!』

「じよ、女性の声? まさか女性が乗っているのか!?!」

『それがなんだ!! バカにしているのかあ!!』

白騎士は格闘連撃を繰り返して、0号機のシールドを削っていった。コウも反撃をするがなかなか隙が見当たらなかった。

(くっ、激しさが段々増していく… それでも!)

「この戦い! 負けられないんだああああ!!」

コウは叫びながら、0号機のスラストを全開にして、白騎士の格闘連撃を逃れ、距離を離しビームサーベルを展開して一気に懐に飛び込んだ。

『チィ!!』

白騎士の翼にビームサーベルが食い込みコウの0号機のレーダも同じ様なものであった。

(フルバーニアンのように胸部のスラスタはついていない……ならバルカンで!!)

バルカンを発射するが白騎士は近距離から回避し、コウを驚かせた。だが白騎士のシールドエネルギーは一桁であり、絶対防御が発動する寸前だった。

(くっ！これ以上は持たないか！)

『束これ以上やるとISが持たない！離脱する！』

『……分かった……回収地点はここだから急いで離脱して……』

束の声はとても小さかったが、千冬は気にせずそのまま離脱した。

「離脱したのか……よく持ったな0号機……」

コウは白騎士が離脱したのを確認し同じ様に離脱した。

この事を「白騎士事件」と呼ばれる様になるが、その時、ミサイル迎撃にいた「ガンダム試作0号機」の事は一切触れられる事は無く、永遠の闇と消えた。

## 7話

離脱した白騎士は東に言われた回収地点に到着した。そこに待っていたのは、作戦前の勢いはどこにいったのやらという状態の束であった。

「ちーちゃん… 怪我は大丈夫だった…？」

「ああ、火傷程度で済んだが暫く動かせそうにないな」

そう言いながら肩の火傷を見ていた。普通なら絶叫するほどの熱量であったが、超ギリギリの位置でサーベルを避け翼を斬らせていたのだ。それでも、火傷の傷は長くは消えないだろう。

初めて敗北を味わった二人は、何も言えなかったのであった。

その後、篠ノ之束は白騎士解体後、企業に技術提供される形で公開し、第一世代型の開発基盤となった。そして千冬の専用機、暮桜を開発。467個目となる最後のコアを作り失踪した。

織斑千冬は、事件後家で休養。

そして第1回I S世界大会「モンド・グロツソ」で優勝。

さらに、公式戦で無敗を保持するが第2回I S世界大会では優勝目前であったが、ある事件により大会を放棄、解決することになった。

—————

side AE社

帰還したコウを待っていたのは、AE社の職員やトレーズ、そしてコウスケであった。格納庫は歓喜に包まれておりその中には感謝する人達も含まれていた。

「コウ… よくやってくれた！父さんは嬉しいぞ！」

「コウ君、よくやってくれた。君に感謝しなければならぬな」

「いえ… 俺は大したことはしてないですよ。当然のことをしたまですよ… それで社長と父さんに話さなければならぬことがある

んだ・・・ここではちよつと・・・」

コウの顔は少し戸惑った表情を浮かべながらそう言った。

「・・・分かった、案内するから着いてきたまえ」

コウ、トレーズ、コウスケは社長室で話す事になった。

「それで・・・話したいことは？」

「・・・今のガンダムの火力は異常です。今回、ISと戦って分かったんです。ガンダムの力はいつか人を殺すんだって・・・」

コウは白騎士との接近戦でビームサーベルで肩の装甲をギリギリ貫いたが、もし本当に肩に当たれば切断どころか腕そのものが無くなる位のものであった。ガンダムは本来、ジオンの二足歩行兵器に対抗するために作られたものであり対ISではない。

絶対防御があるからといってビームサーベルやビームライフル等をISに使えば簡単に絶対防御は破られ、搭乗者は確実に死ぬだろう。

だからコウはあることを提案した。

それは、GPシリーズに対してリミッターを設けることでり、緊急事態の場合は搭乗者の判断でリミッターを解除出来るようにするものである。リミッターの中身としてはまず、ビーム系や実弾等の威力を人が死なない程度に威力を抑え、ビームの熱量を最大限に抑え被害がないようにすることが、コウの提案であった。

機体の性能に関してはリミッターを設けず、武装だけリミッターを設けるというものである。

「そうか・・・私達はガンダムの力を甘く見ていたようだね・・・。了解した今すぐそれを行うとしよう。コウスケ出来るかな？」

「ええ、いつでも出来ます」

「頼もしい限りだが、今日は君も頑張ったから暫く休みたまえ。後の事は私に全て任せたまえ」

「分かりました。それじゃお先に失礼します！」

コウとコウスケは社長室から退室し、残ったのはトレーズであった。

（さて・・・この事件で世界は大きく動くだろうね・・・彼女のような女

性達が増えるだろうが、いずれそれは女性が力をつける事になりそうだね……)

トレーズは窓の外を見ながらそう呟いた。

白騎士事件後、アラスカ条約が結ばれ世界が大きく変わろうとしていた。男から女へと、その力の均衡は女性へと移り変わろうとしてたのだった。

## 8話

「・・・はっ!!」

女は悪夢を見ていた。それはスペースコロニーでGGガスを使いコロニーに住む人間を虐殺する夢だった。しかし女は知らなかったのだ、上層部から催涙ガスと説明されていたのだから。

「この世界に来て、まだこんな悪夢を見なきやならないのかい・・・困ったものだねえ本当・・・」

そう呟きながらふと時間を見た。

「さて・・・そろそろ準備するのでしょうかねえ・・・」

女は今日からIS学園の教師となるのだ。それだけでなくクラスも持つことになったのだ。その女の名は・・・

「宇宙の蜉蝣」・・・シーマ・ガラハウ

という話を作りたいなあ…

「そんなふざけた事を言いやがって！修正してやる!!」

バゴオ!!

「お前を殺す」デデン!!

「止まるんじゃねえぞ…」キボウノハナア

本編行きます

季節は春である。コウは19歳という歳でAE社のパイロットになつていた。子供の時に緊急事態でガンダム試作0号機に乗っていたが0号機は白騎士事件で動かなくなり、その後、ガンダム試作1号機のパイロットになったのだ。

「ああ〜暇だなあ〜パイロットはやることが限られてるからすることがないやあ」

「おいコウ！暇なら3号機のオーキスの武装調整を手伝ってくれ！それぐらいなら出来るだろー！」

（3号機のオーキスの武装調整やIS化…いつでも召還出来るように調整…よく考えたらむちやくちやだよなあ）

オーキスはコストの関係で作るか作らないかが大きな問題になったのである。しかも形態が二つあるのだ。

一つは、デンドロビウムである。しかしこれは、宇宙でしか使えな

いのが欠点である。二つは、デンドロビウムを簡易的にしたものである。これなら、ギリギリ使えるだろうが簡易的とはいえ、機体や武装の重量を合わせるととんでもない重量になり的になってしまうのが欠点である。

なら、一瞬でもいいので、召還式にすればいいのではないかという発想がでたのだ。もちろんこれは、不可能に近いがコウスケは考えがあると発言し採用されたのだ。

「父さん・・・本当に召還なんか出来るの？魔法みたいじゃあるまいし・・・」

「まあ・・・任せてくれ、一応天才だから」

（天才で片付く問題なのか？）

コウスケはそう心の中で呟いた。

「もう・・・今女性の時代ではあるとはいえ、やり方が過激なんだよなあ・・・ A E社に対して結構圧力かけてくるし・・・はあ・・・困ったもんだ」

「ISは女性にしか乗れない・・・その力があるからそんな事が出来るんだろ？」

篠ノ之束失踪後、ISが全世界で作られた。しかし男がISに乗れず、女性しか乗れなかったのだ。それがISの欠点である。

「はあ・・・どっかの男がISに乗ってくればなあ・・・この世界に風穴が空くんだがなあ」

「父さん・・・ため息ばかりついてると幸運が逃げるよ・・・てかラジオ止めなよ・・・五月蠅くて集中出来ないよ」

「ちえ・・・けちんぼがあ・・・」

そう言いながらラジオを消そうとするが消せない内容が流れた。

『たった今、藍越学園にて男で初めてISを起動した人物が現れました！その名は織斑一夏君です！』

どうやら嵐が訪れたらしい



## 9話

そのラジオを聞いた二人はとても驚いた。だが一番驚いたのはコウスケであった。

「・・・当たってしまったな」

「言った矢先に当たるって・・・父さんもしかして未来見てたのか？」

コウスケは違うと言うが、そのあとに社長からの呼び出しがあった。二人はすぐさま向かった。

「来たね・・・二人は知ってるだろうが、今日の藍越学園にて織斑一夏という男がISを起動させたのを知っているね？」

「ええ・・・正直驚きましたよ、男がIS起動・・・俺もあり得ないと思いましたよ」

「コウスケ・・・私はね。これには裏があるんじゃないかと思うのだよ」  
「裏・・・ですか？」

「そうだ・・・私の予想では失踪した篠ノ之束が糸を引いているのではないかと予想している」

「予想ですか？」

「だからこれは、あくまで私の予想だからね。鵜呑みにしてはいけないよ」

（社長の予想は大体当たるからなあ・・・鵜呑みするなって言われても）

「じゃあ本題に入ろうか。君達にしてほしい事をこれから言う。現在織斑一夏の身柄はこのAE社に到着予定である。しばらく彼の面倒を見てほしいのだ」

「そ、それだけですか？」

「いや、もつと簡単に言えば織斑一夏を鍛えあげてほしいのだ」  
「鍛えあげる？」

「そうだね、彼はISを起動させたのだから入学する場所が変わる。その場所が「IS学園」と呼ばれる学園…」

「IS学園といえば女子ばかりの学園じゃないですか!!あんな所に彼を放り込んだら大変な目にあうんじゃない?」

「コウスケ落ち着きたまえ。だから彼を鍛え上げてほしいと言ってるのだよ…。もっとも彼がしなければならぬことは、ISの知識、ISの操縦等だね。ISの知識についてはコウスケに任せる。ISの操縦等についてはコウに任せようと思うのだから…。やってくれるかね?」

「分かりました。知識は任せて下さい」

「分かりました。操縦は懇切丁寧に教えます!」

「…二人には感謝しきれないね」

トレースはそう言い時間を見た。もうすぐ一夏の身柄がこちらに着く時間が近づいていたのだ。

「さて…。そろそろ出迎えの準備をしようか。彼の顔を見なければならぬ」

三人は部屋を出て、出迎えの準備しようとする。だがトレースは「織斑」という名前に嫌な予感を感じさせたのだ。それに気づくのは会ってからの事である。

---

織斑一夏は驚きと困惑の狭間にいた。

本来なら藍越学園で入学試験を受けようとしたが、間違ってIS学園の試験会場に入ってしまったのだ。そこにあつたのは受験者用ISであった。そして好奇心でISを触れ、偶然にも起動させてしまったのだ。

本来なら一夏の身柄は政府によって保護をするが、AE社が一夏の身柄の保護を申し入れたのだ。

当然、政府は拒否するがA E社は政府に対して、「ある」情報で脅したのだ。

その「ある」情報とは政府の信頼を大きく揺るがすものであり、最悪失脚するほどのものであったため、それを恐れた政府は仕方無く、一夏の身柄をA E社に預けたのだ。

当然、一夏はその事は知らないのであった。一夏は何処に連れていかれるのかを、その場にいた人間に聞いた。

「あ、あのお…俺は一体何処に連れていかれるんですか…?」

「少なくとも研究施設ではないから安心しろ。行先はA E社だ」

「A E社…ですか?」

「そうだな。スプーンから兵器まで作っている会社だからな。その社長はエレガントで優秀で更に有名人ときた」

勿論、一夏はその事は知っていたのだ。A E社は日本の企業の中でトップクラスであり、憧れの場所であった。一夏もその一人であり、藍越学園を卒業すれば、そこに就職するつもりであった。

「到着だ。後ろ開けるから待つてろ」

男は言い、車の後ろのドアを開けた。開いた先にあったのは、A E社の格納庫の中であり、そこに待つていたのは、三人の男とその後ろに全身装甲のI Sが鎮座されていた。

「ようこそ、A E社へ。君な事を待つていたよ」

「エ、エレガント…」

心の声が出てしまった一夏は思わず口を手で塞ぎこんだ。

「フフツ…構わないよ。よく初対面の人間に言われているからね。自己紹介が遅れたね…私はトレース・クシユリーダだ。後ろにいる二人は…」

「コウスケ・ウラキだ。よろしく頼むよ織斑一夏君」

「コウ・ウラキです。よろしくな一夏君」

「もしかして親子で仕事をしてるんですか?」

「ああそうだね。俺は開発エンジニアとしてやってる。コウはガンダムパイロットとしてやってるな」

「ガンダム…? I Sじゃなくてですか?」

「ISは女性しか乗れないだろ？だからガンダムというモノを作ったのさ。あれがそうだ」

コウスケは後ろにあるガンダム達を指で指した。

「あれは、男女関係なく乗れるやつでな…ハッキリいえば今の世界に風穴を開ける代物だよ。だがあれは、力が強すぎてリミッターが掛かっていて危険でもあるんだな」

「コウスケさん…まるでもう一人の束さんですね…」

トレーズは一夏が言った「束さん」という名前に疑問を持った。

「束さん…もしかして篠ノ之束氏の事かな？彼女とはどうゆう関係かな？」

「そうですね…どうゆう関係で言われてもなあ…まあ、簡単に言えば姉の幼なじみの関係ですかね？」

「姉の名前は？」

「織斑千冬ですけど…？どうかしたんですか？」

(やはり…そうか…これで合点がいった…)

「すまないね…こんなつまらない事を聞いて。さて、話を変えようか。いきなりですまないが君にはたくさんやつてもらわないことがあるんだ」

「やつてもらいたい事？」

「ISの勉強そして操縦などしてもらおうよ。これは重要だからね、しっかりやつてもらわないと入学先で苦労する羽目になるからね」

「勉強…操縦…」

「勉強はコウスケが優しく教えてくれるから安心したまえ。操縦はコウが懇切丁寧に教えてくれるからこれも安心したまえ」

「それってもしかして…今からですか？」

トレーズは首を横に振った。

「今日は色々あっただろうから、休んでくれたまえ。勉強と操縦は明日から始めたいと思う。心して掛かってくれたまえよ？」

「は…はい」

「今から施設の案内はコウがするから、着いていつてくれるかな？」

「分かりました」

「それでは私は仕事が残っているので先に戻るよ。コウ後は頼んだよ」

コウは頷き、トレーズは社長室に帰った。

トレーズは「織斑」という名前でやっと思い出したのだ。

過去に汚職した人間の中には権力者がいたのだ。その人間は「ある計画」に関わった人物であり幹部だったのだ。

その計画の名は・・・

織斑計画（プロジェクト・モザイカ）

俗物どもが考えた計画である

## 10話

### 織斑計画（プロジェクト・モザイカ）

その計画は権力者たちが究極の人類を人工的に作り出そうとした狂気の計画。

内容的には、傷ついた肉体の驚異的修復速度、異常を越えた五感増幅、ISを使えば使うほど肉体に調和していく等、普通の人間として驚異的なスペックを持っている。

しかし、天然規格外の天災と呼ばれた篠ノ之束により計画は中止・凍結された。

その計画で成功し産まれたのが、織斑千冬と織斑一夏であったのだ。失敗作の処遇は書かれてはいなかったが、もうこの世にはいないだろう。

だがトレーズはこの計画を知ってから、失敗作たちを密かに保護、一般常識を覚えてもらい、そして顔を変え、社会に送り出したのだ。そのなかで一人の少女を保護した。その名は織斑マドカである。彼女は千冬と瓜二つの素顔をしていたのだ。

トレーズは彼女の瞳を見た。瞳の中は、憎悪、怒り、殺意等が映ったのだ。

『君は何故そんな瞳をしているのかな？』

『私は…自分が自分であるために…だから成功作のアイツを今すぐこの手で殺す…絶対に…殺す』

『殺したい…か。それは出来ないものだね。何故なら私が止めるからだ』

『止めるならお前を殺す』

マドカはトレーズに飛びかかり首を噛みちぎろうとするが、トレーズは当て身を食らわせ気絶させた。

トレーズがマドカを止める理由が一つあるのだ。

それは亡国機業（フアントム・タクス）の存在があったからだ。

亡国機業が誕生したのは、第二次世界大戦中の事であり

50年前から活動しているのだ。世界を戦場にするために。亡国機業はマドカの感情を利用、従わせて様々な裏工作をさせるつもりだろう。そんなことはさせないためにトレーズは、気絶したマドカを自宅に運び込んだ。

『うっ…』

『起きたかな？おっとそんな怖い目で見ないでくれたまえ』

気絶から起きてなお、瞳にはまだ殺意が湧き出ていたのだ。ならこの殺意を利用しトレーズはマドカにある提案をした。

『そんなに成功作を殺したいのなら、先に私を殺してみてはどうかかな？』

『…は？』

いきなりそんな事を言われると誰だって困惑するだろうがトレーズは少し煽り言葉を入れた。

『私を殺せなければ成功作には勝てないと言ってるのだよ』

そう言いマドカはキレて再び飛びかかったが、またトレーズの当て身を食らったが、マドカは耐えていたのだ。

『君は本当に危ないね… ああ聞き忘れていたが、今話した提案は受けるかな？』

『受けてやる… お前を殺さないと前に進めないからな…』

マドカは痛み耐えながらもそう答えたのだった。

思い出しながら社長室戻っていたが、部屋に入ると強烈な殺意が部屋を包み込んだ。そして刃物がトレーズの懐に迫ったのだ。しかしトレーズは簡単に避けたのだ。

「ふむ… 急所を突くのはいい。だが、殺意を隠しきれないとは… 君もまだまだだね」

「… チィ」

舌打ちしながらもトレーズの前に現れたのは、マドカ・クシユリィダであった。

本名は「織斑マドカ」ではあるが、戸籍上では「マドカ・クシユリィダ」として名乗らせている。

「珍しいな… 今日でここで殺る気とはね…」

「お前を殺したついでに、今ここに来ているアイツを殺したかったが… お前が避けたから無理だな」

「そうかね。それといきなりですまないが君にはIS学園に入学してもらおうよ」

「… は？」

いきなりIS学園に入学しろと言われたマドカはそれしか言葉が出なかった。

「君は青春を過ごしてないからね。だから行って貰うよ」

「ちよつと待て私は…」

その言葉を遮るかのように、このように言った。

「IS学園の学園長には話をつけているよ。やはり友は持つべきだね… フフフツツ」

マドカは白目になり、考える事をやめた。

-----

案内を終えたコウは、一夏を連れて全身装甲のISを見せていた。

「なんていうかスゴいですね… 今のISとは全然違うんですね…」

「そうだな、まず違うのはISコアを使ってないことだからなあ」



「I Sコア?」

「簡単に言えばI Sの心臓に当てはまるもので、あれが無きやI Sは動かせない物だな。まあ後は親父が教えてくれるだろ」

「じゃあ、目の前にあるI Sの心臓は何ですか?」

「そ、それはなあ...」

コウがこの事を言うか言わないか悩んだが後ろからコウスケが来ながらこう言った。

「熱核融合炉だ」

「熱核融合炉... ですか?」

「ああ、原子核を融合させる際に生じるエネルギーの事だな。簡単に言えばジエネレータのような物だな」

「核つて事は危険なんじゃ...?」

「危険だな。もし熱核融合炉に直撃したらここら一带消し飛ばすだろうな」

一夏は戸惑いながら質問した。

「何でそんな物を作ったんですか...?」

「I Sが発表されてから1ヶ月後にI Sを使った事件が発生。それに対抗するために作られたのが「ガンダム」だという訳だ」

「ガン...ダム」

全身装甲のI Sの正体はガンダムだと分かった一夏は、こんなことを聞いた。

「ガンダムは誰でも乗れるんですか?」

「誰でも乗れるが、セキュリティ上で搭乗者の登録が無いと無理だな。もしかして乗りたいのか?」

「いや... そうゆうわけじゃ...」

一夏は断ったがコウスケが笑いながらこう言った。

「明日コウが教えてくれる際にガンダムを乗せてくれるからその時に乗ればいいんだ」

実はA E社は、他社が作ったI Sを導入していないのだ。

例えば日本製の打鉄やフランスのデュノア社製のラファール・リヴァイヴである。導入しない理由は、管理するところが無いだけであ

る。

「ガンダムがあるから導入しないって理由もあるが、置くスペースが格納庫には無いんだ。これも理由の一つなんだな」

「な、なるほど…」

聞き慣れないものを聴いて困惑していた一夏であった。

「まあ明日から教えるから安心しなさい。ISに必要な知識覚えてもらうだけだからさ。」

そう言いながらふと腕時計を見ると既に夕方になっていた。

「時間が過ぎるのは早いものだ… 老けたかな俺… じゃあ明日の事があるから先に帰らしてもらおうとするか」

「今日は早く帰るって珍しいなあ…」

「今日の所はな、明日から徹夜作業だ。それじゃお先に失礼」

コウスケはそう言い退社した。

「俺もそろそろ帰るよ、明日からよろしくな一夏君それじゃ」

コウも続いて退社した。その場に残った一夏はコウに案内された部屋に戻って行ったのだった。

## 11話 前編

今日は2人によるIS講座が始まった。先にIS知識を一夏に叩き込むこと。その次に操縦を教え、慣れたら実戦させるつもりであった。

だが、2人はあることに驚いた。それは、ISの知識・操縦の飲み込みの早さである。その早さは水をスポンジにつける様な驚異的なものであり、たった3日での事であったのだ。これも、織斑計画の一つの要因なのかもしれない。

4日後には、コウによる実戦シミュレーションが始まった。コウは試作1号機、一夏は試作2号機である。

実は、2号機に乗るのはコウであったが、一夏が2号機でやりたいと懇願したため、一夏が2号機を選んだのだ。

2号機の特徴としては、核の使用を想定した機体であり、全ての装甲に耐熱・耐衝撃処理が施されている。

バックパックの代わりに両肩には「フレキシブル・スラスタ・バインダー」(FTB)と呼ばれるものであり、2号機の最大の特徴である。

機動性を確保するために特化されたもう1対の「腕」とも言える装備であり、行動が制限されることもなく機体を稼働させる事が出来るのである。

ちなみに2号機の武装は

バルカン砲

ビームサーベル×2

サイサリス専用ビームバズーカ

MLRS (多連装ロケットシステム)

携帯ビームライフル

ラジエーターシールド

武装に関してはまあまあではあるが、威力の高いビームバズーカとMLRSは封印しており、リミッター解除時は使用出来るようにしているのだ。

なので低火力のビームライフルを持たせて、ある程度射撃戦が出来るようにしているが、遠距離だとビームが届かないのであまり意味が無い。

残る武装はバルカンとビームサーベル×2となる。バルカンは牽制として使えるがこれも上記と同じである。

これだけの武装となると、2号機は格闘戦しか残らないのだが、2号機は格闘がメインであり、1号機より優先されているのだ。

ラジエーターシールドに関しては冷却装置は付いているが、破壊されても行動に制限がかからない様になっている他、シールドを外せば2号機の機動性は更に上がり、その巨体とは思えないほどの機動力で相手の懐に飛び込めるのである。もちろん相手の攻撃を防ぐのにも使えたりする。

格闘しか無いこの機体を選んだ一夏は思った。

(千冬姉も確か接近戦得意じゃなかったけなあ…。あんまり昔の事なんか覚えてないからなあ俺…。)

そう心の中で呟きながらも、コウとの実践の準備にはいった。

『両者準備完了。開始しますか?』

『ああ、開始させてくれ』

その声で実戦開始のブザーが鳴り響いた。

先に動いたのはコウの1号機である。1号機はビームライフルを撃ち2号機のシールドエネルギーを減らした。

「ちよ、直撃!?!...ってうわ!?!」

「遅い!!」

コウは容赦なくビームサーベルで斬りつけ2号機のシールドエネルギーがガリガリ削られていく。

「ちよっと待って下さいよ!?!容赦無くないですか!?!」

「実戦に容赦なんか必要ない!!体で覚えるんだ!!」

そんな無茶苦茶な事を出来る訳がないと一夏が言う前にコウが2号機をおもいつき蹴飛ばした。まだ2号機のシールドエネルギーは3桁ではあるがもうすぐ2桁になりかけているのだ。

一夏はバルカンを撃ちながら後退し、ビームライフルを構えた。

(2号機は格闘がメインとはいえ、使用する武装が限られているからキツイ...!)

ビームライフルを撃ち、1号機のシールドエネルギーを減らそうとするが、余裕で避けられ逆にカウンタースナイプを食らった。残りシールドエネルギーは2桁に突入しているがそれでも一夏は諦めなかった。

「俺は...俺は諦めない!!」

「その意気だ!来い一夏!!」

2号機はラジエーターシールドを構えながら真正面に突入した。

1号機はビームライフルで迎撃するが2号機ラジエーターシールドに当たってしまいタックルをモロに受けコウの意識が飛びかけたが、ギリギリ耐えビームサーベルを展開し構えた。

対する2号機はラジエーターシールドを地面にパージ、機動力を上げ、ビームサーベルを最大出力で出し回転するように投げたのだ。

このやり方はガトーがコウにやって見せたもので、ビームサーベルはデコイみたいなものであり、同時に相手の背後に回りこむ技である。

だかこの技は、距離がとても離れていないと相手を欺く事が出来ないものだが一夏は違った。

地面にパージしたラジエーターシールドを1号機に向けておもいつきり投げたのだ。

(サーベルを投げ、同時にシールドを投げてどうするつもりだ?)

2号機が投げた回転ビームサーベルを避け、ラジエーターシールドも避けたがその先に2号機の姿は無かった。

「いない?...まさか!」

横を見ると2号機がビームサーベルを展開し、1号機に迫ってきたのだ。

「うおおおおおおつ!!」

「でえやあああああつ!!」

2号機がビームサーベルを振りかざすがライフルからビームジュツテを展開させ防いだが、2号機のパワーが勝りライフルが落とされた。1号機はビームサーベルを腰に構え、素早い動きで迫ってくる2号機を待ち構えた。

そして2号機がサーベルを振りかざして1号機を斬り、同時に1号機は腰に構えたサーベルを鞘から抜く様に2号機を斬ったのだった。

## 11話 後編

勝ったのはコウである。

しかしコウのシールドエネルギーは3桁あったのに、2桁になっていたのだ。その原因は一夏が最大出力のビームサーベルで1号機を斬ったからだ。

最大出力の欠点は、最大出力で斬るとサーベルが破損しやすいのが欠点である。

その欠点を直す為に、様々な事が行われているがそれでも破損するのだ。いわば諸刃の剣である。

この一撃を当てれば相手のシールドエネルギーは半分以下になり、勝機はこちらに傾くので使い所を間違えないようにしなければならぬ。

負けた一夏はとても悔しがっていたが、自分の力を最大限に出せたので満足していたようだ。

実戦終了後にて、コウと一夏が使ったガンダムの実戦データを見た人間は驚いた。

何故なら、コウが使ったガンダム試作1号機と一夏が使ったガンダム試作2号機の数値が尋常じゃないほど高かったのだ。

コウはあの「ブリュンヒルデ」を越える数値であり、一夏に関しては、全世界の代表候補生を越える実力を叩き出していたからだ。

それは直ぐ様報告されトレースは喜んでいたが、その裏には一夏に對して申し訳ないという気持ちがあつたのだった。

そして一週間後、二人はトレースに呼び出された。

「明日、IS学園の入学式なのだか一夏君は大丈夫かい？」

「大丈夫なんですけど、やっぱ不安なんですよねハハハ…」

「誰だって最初は不安を持つているものだよ、君ならやれるさ」

そう安心させ、コウに顔を向けた。

「コウ、君はよくやってくれた。感謝する」

「いえ、父のお陰でもあるんです。だから一夏は強くなれたんです」  
「もちろん、君達二人が居なければ一夏君は成長できなかったからね。本当にありがとう」

そう感謝を述べ、頭を下げた。

「さて、今回ここに来てもらった訳は、君達二人に関しての事だ」

最初に一夏に関しての事であった。

「一夏君が今使用しているガンダム試作2号機はI S学園に持ち込めなくてね…。すまない」

「えっと、どうゆうことですか？」

それは、一夏専用のI Sが倉持技研で開発されているからだ。この情報は倉持技研に潜入している、A E社の人間による情報である。

実は、実験でI Sとガンダムを両方持つとどうなるかの実験が行われていたのだ。

結果は、互いが反発しており拒絶反応を起こしているのだ。

「もし、君の体に害が発生したらこちらが責任を取らなければならぬいからね」

「それはそうなんですけど、ガンダムとI Sの操縦系統って全然違うんですよね？」

一夏の言う通りである。両方の操縦系統は根本的違うのだ。I Sは一心同体と言うべきものであり、ガンダムはレバー等々と使い操縦するのである。

「だから君がI Sに搭乗したとしても、実戦でしたあの動きをすれば君の思うがままに操る事が出来るよ」

そう一夏を納得させたのだった。次はコウに関する事であった。

「コウ、君にはI S学園に入学してもらおうよ」

「・・・へ？」

コウが間抜けた声を出して驚いた。

「理由は簡単さ。君にはI Sの実戦経験をたくさん積んでも貰わないと、ガンダムのデータが取れなくてね…。だから入学してもらおうだよ」



白騎士事件の時、あれだけのデータでは不足なのだ。だからコウにはIS学園に入学してもらいデータを多くとってほしいのだった。「ちなみにこの事は、IS学園の学園長には話をつけているから安心したまえ」

コウの目は真っ白になり意識が飛んだのだった。

どっかの人とは違い考える事はやめておらず寧ろ、一瞬飛んだのだった。

## 12話

(視線が痛い……)

その心の声は偶然にも一致した二人である。

今、二人がいる場所は「IS学園」で回りには女子ばかりであり、男二人がここにいるのは違和感でなく、場違いというしかない。

視線としては興味津々の者も居れば、敵対心剥き出しの者もいる。

一夏は堪らず横を向くと、見覚えのある顔がいたのだ。だかその人物は目があった瞬間に窓の方にそっぽ向いたのだ。

コウは周りの視線が嫌になり、眉間にシワをよせ腕を組んだまま寝てしまったのだ。

コウが寝て2分後に、教室の扉が開いた。入ってきたのは、山田真耶である。

なにやらテンパっているようだがコウは全く気にせず寝ていた。

だが前の方から「パシンツ！」という強烈な音がコウの耳に響き目を覚ました。

「なにするんだよ千冬姉!」

千冬姉と呼ばれた女性は一夏をひっぱたいていたのだ。

「千冬姉ではない。織斑先生と呼べ!」

パシンツ!!

「痛てえ!二度もぶった!こんなことされたことないのに!」

どこぞの天パのニュータイプとは違い、頬ではなく頭なので強烈に痛いのだ。頬も痛いけど

「貴様の自己紹介がいけないだもつと真面目にやれ!」

「は、はい……」

なにも言えなかった一夏であった。だが次の瞬間、教室が震えたのだ。何故なら、クラスにいる女子達が大きな歓喜の声をあげたからだ。

やれ北九州まで来たとか、やれ姉になって欲しいだとか、やれ付け

上がらないように罵って欲しいだとか、普通では信じられないような事が起きていたのだ。

これも「ブリュンヒルデ」という名のお陰でもあるのだ。

本人はその名を嫌っているが

そんな歓喜の声を折り目に千冬はコウを見ていたのだ。

(あれがコウ・ウラキ… 第二のISS起動者…)

一夏がISSを起動すると日本中の男性に対して、ISSの起動できるかの実施を行った。

勿論、誰も起動することが出来なかったが、コウが起動させたのである。ただしガンダムで

これには裏があるのだ。簡単に言えば一夏と同じようにしたのである。※9話参照

表向きは第二のISS起動者であるが、裏向きにはISSの実戦データと経験を積んで貰う為である。

この事をISS学園で知っているのは学園長& a m p ; 経営者と一夏だけである。

休憩時間に入り一夏はため息をつき疲れきった表情でコウの方に向こうとするが、ある人物が一夏に寄ってきた。

「久しぶりだな、一夏」

「えつと… 箒だよな?」

「ああ、少し話をしないか?ここではちよつとな…」

箒が周りの視線に気にしながらそう言ったのでコウは気になり一夏の耳元に囁いた。

(もしかして彼女かい?)

「ええ!?!違いますよ!?!」

「?」

動揺した一夏は箒を連れて逃げるようにどこかに行ってしまった。「別に冗談で言ったつもりなんだかなあ」

教室に男性一人残され周囲の視線が強くなりコウは頭の中でガンダムのシユミレーション戦をしていたのだった。

しかしそれを見ていた金髪の縦ロール頭は気に食わないといわんばかりの目をしていたのは誰も気がつかなかった。

## 13話

「ちよつとよろしくて?」

「へ?」

授業が終わり次の準備に取りかかろうとするが、後ろから声を掛けられた。振り向けば、金髪の縦ロール髪の美少女が立っていたのだ。敵対心剥き出しではあるが

「まあ!なんですよ、その返事?わたくしに声を掛けられるだけ光栄なのですから、それ相応の態度があるんじゃないやなくて?それと貴方何故返事をしなかったのかしら?」

返事をしたのは一夏であり、コウはしてないのだ。

その答えがすぐ帰って来ず苛立ちが増したセシリアはコウの前に立った。

「貴方聞いてますの!」

「悪いが〃今〃は忙しい」

「〃今〃は忙しい?可笑しな事は言わないでくださいまし!〃今〃なにもしてないじゃないですか!」

セシリアの言う通りでありコウはなにもしていないのだ。ただ腕を組んで考えている様な仕草ではあるが

一夏を除けばこの仕草は誰だつて分からないものである。簡単に言えばガンダムのシュミレーション戦である。1号機のシュミレーション戦は終わり3号機のシュミレーション戦を頭の中で繰り広げているのだ。

ちなみに3号機が完成するのは夏らしい

「それで?えつと名前は確か...セシリア・チヨロコットだったけな?」

一夏はそう言いセシリアの血管が切れた音が聞こえたが、コウは腹から出る笑いを押さえながら言った。

「ち、違う...な、名前はセシリア・オルコットさんだよ...一夏名前間違えたらし、失礼だぞ...」

セシリアは二人がふざけているのをを敢えて無視し、高らかに言っ

た。

「そうですね！私はセシリア・オルコット！イギリス代表候補生ですわ！」

一夏はセシリアの顔に詰め寄り疑問を投げた。

「代表候補生……って何だ？」

一夏がそう言い、周りの人間はずっこけ、セシリアの動きが固まった。

一夏にはISの知識だけ覚えさせており、代表候補生等は覚えさせていないのだ。

「分かりやすく言えば、エリート、ってことだな」

「そう！私はエリートなのですわ！」

「そのエリート様が俺に何の用で？」

一夏の皮肉むいた声はセシリアの上機嫌でかき消された。

「最初にISを起動させた貴方にISというものをこの私が教えて差し上げねばならないと思いましたが？ただし、地面に這いつくばって泣きながら教えて下さいと言えば話は別ですわ」

一夏はその傲慢な物言いに腹を立てたが、丁度いいぐらいに始業のチャイムがなった。

その時、自分の席に戻るセシリアが二人を見て嘲笑っていたのだ。

一夏は我慢ならず立ち上がるがコウにより宥められたのは言うまでもない。

「さて、授業を始める前に再来週行われるクラス対抗戦の代表を決めなければならぬ」

ちなみにクラス代表になった時は、クラス対抗戦の他に生徒会の会議・委員会への出席など様々なものが含まれる。

「自薦他薦は問わないが…誰かいないか？」

「自薦他薦」と言う言葉にクラスがざわめきが広がった。つまり…

「はい！私は織斑君を推薦します！」

「私も織斑君で！」

「私も」

殆どが一夏ばかりであるがコウにも推薦が来たが一夏の方が多かった。

恐らく理由は「珍しい」という理由なのかも知れない。だがそれに対して苛立ちを隠せないエリートが机を叩き声を上げた。

「納得が行きませんわ！そのような選出は認められません！男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！このセシリアオルコットに、1年間そのような屈辱を味わえと言うのですか!？」

セシリアの言葉は段々ヒートアップしていく。

「大体！文化も何もかも後進的な国で暮らさなくてはいけない事が、私にとって耐え難い苦痛で…!！」

「…そんなに言うなら日本を出たらどうだ？」

セシリアの聴くに耐え難い国辱を聞いたコウは、立ち上がりセシリアの方に向いた。

「何の為にここに來てるんだか知らないが、あまり調子に乗るなよ小娘が…」

「なんですの、その口の聞き方は！私はエリートなのだから自分の立場を弁えたらどうです！」

コウはこの発言に対してため息が出てしまった。

何故なら今、立場的に悪いのはセシリアで、日本という国を侮辱したことによりクラス全体の空気がとても悪い他、この発言によりイギリスの質が落ちるのは間違いない。

本来なら、一夏がキレる場面であるが、コウがそれを制止。自分に任せろと言ったのである。もし一夏が立ち上がれば、セシリアの国を

侮辱するかもしれない予感があったのだ。

「後進的：それは教卓の前にいる先生にも同じことが言えるのか？」

教卓の前：つまり眉間にシワを寄せた千冬の事を指しているのだ。

セシリアは小さい悲鳴を上げ、自身の過ちを悟ったのだ。

だがしかし、彼女のつまらないプライドがそれを許さなかった。

「けっ、決闘ですわ!!」

彼女からの決闘が申し込まれたが、コウにとっては都合がよかったのだ。

「決闘：いいだろう受けて立つ。一夏もやるぞ」

「俺もですか!？」

「真っ先に立ち上がろうとしたのは一夏だけだ。お前も決闘を申し込まれたら受けるだろ？先生、どうですか？」

「いいだろう。では、対決は次の月曜、第三アリーナで行う。織斑、ウラキ、オルコットはそれぞれの準備をしておくように」

決闘の場所は第三アリーナそこでクラス代表が決まるのである。

全ての授業が終わり、教室には女子は居ないが男子2名がいた。

「織斑君、ウラキ君、いたんですね！よかったあ：実は二人に渡しておきたい物があつたんです！」

渡しておきたい物・・・それは数字の書かれた鍵であった。

一夏は1025室、コウは0083室であった。

「先生？どうゆうことですか？」

「えっと、それはですね・・・IS学園は寮制度なんです」



2人は山田が言うことに顔を青ざめた。つまり、2人は女子達の生活に放り込まれる事になるのだ。

だが、それに関してはIS学園というものなので仕方無い。

山田と教室で別れたあと、重い足で寮に向かっていった2人であった。この時に2人は別々の寮なのでここで別れることになったのだ。

コウは0083室の扉の前に着いた。コウの願いとしては誰も居ないということ祈るばかりであった。しかしそれはむなしくも壊される事になった。

扉を開けると…

「お帰りなさい??ご飯にする?お風呂にする?それとも…ワ・タ・シ??」

コウは全力で扉を閉めすぐさま110番（織斑先生召還）をした

## 14話

「……最後に言い残すことは？」

コウの目の前に修羅がいた。

説教をしている相手はコウにハニートラップを仕掛けた謎の女である。

「ええつと……私はですわね……」

ギロツ!!

「ヒツ……」

千冬は彼女に対して言い残す事を与える猶予もしなかった。

「あの織斑先生？彼女は？」

「ああ、コイツは『更識楯無』。このIS学園の生徒会会長であり……」

「『学園最強』ですわ」

手に持った扇子を口元を隠すかのように広げた。それに書かれていたのは『学園最強!!』という文字であった。

(その生徒会長が俺に一体何の用なんだ?)

その表情で分かったかのように楯無はコウと2人きりで話したいと真剣な表情で千冬に懇願。そして承諾したのだった。

「はあ……今回は不問にするが次は無いぞ……分かったな？」

殺気を飛ばすも楯無は簡単にいなしたのだった。

「それで俺に何の用だ？」

「そうね、貴方はあのブリュンヒルデを越えた者として会いたかったと言うべきかしらね」

「あれはデータ上での話だけだ。何故その事を知っている？」

「んーとそれは……裏情報としか言えないわあ」

裏情報というよりA E社に暗部の人間が働いているだけの話である。だがそれはガンダムを情報を知っている事になるのだ。

それ以前に暗部に対してガンダムを情報を探るよう指示したので

いずれにしても同じである。

さらに暗部の上層部は白騎士事件の真実を知っているのだ。

「貴方が10年前にガンダム試作0号機で白騎士事件に武力加入。ミサイルを白騎士と協力し全て撃沈させた。

しかし白騎士から戦闘を仕掛けられるが、相討ち寸前のまま勝敗は決まらず。

事件は政府により永遠の闇に葬られた……。これが事件の真実かしらね?」

手に持った扇子で「完璧!」と書かれていた。

「あれは勝手に体が動いただけの話だけで俺は何もしていない。社長や父さんのお陰さ……。話はそれだけか?」

「いいえ……。その貴方に決闘を申し込むわ」

「決闘……?」

「ええ……。でも今はクラス代表を決めなくちゃいけないでしょ?時間があれば申し込ませて貰うわね」

「あ、ああ……」

「言い忘れていたけど、ここの同室者は私だからよろしくね?」

楯無のこの言葉によりコウは頭を抱える様になったのだった。

次の朝、食堂に足を運んだコウはメニューを見ていた。

コウがこの時にする事は「ニンジン」がない物を選ぶのだ。

この世界に来ててもまだ「ニンジン」が食べられないのである。本人は克服しようとしても中々出来ないのである。

コウがメニューに目をつけたのは定食系であった。なのでコウは焼き魚定食を選ぶ事にしたのだった。

席に座ると、ここでも周りの視線がチラホラと湧いてくるのだ。そこに救いの手が差し伸べられた。

「コウさんおはようございます。隣いいですか?」

「一夏か、おはよう。よく寝れたか？」

「え、ええ一応・・・」

このときの一夏の反応がとても変だったので、同室者は誰だったのかを聞いた。

「もうすぐ来ますよ・・・ほら」

一夏が顔を向けた先には、篠ノ之箒であった。こちらに来た箒は一夏の隣に座り食事を始めた。一夏の隣に座るということはいい関係ではないかと心の中で思ったコウであった。

「一夏、昨日はすまなかった」

「昨日・・・ですか？ああ、あれですか。俺は大丈夫ですよ。もしかしたらコウさんと同じ事をしていたかも知れないですし」

一夏の言う通りである。いずれにしても、あの時一夏が立ち上がった話す内容が違うだけで、決闘に関しては結果は同じなのだ。

だが一夏は疑問に思った。

「決闘ってISを使つてのことですよね・・・」

「そうだな。一夏の専用機はもうすぐ出来るって話は聞いたんだけどなあ・・・。確か、早くて月曜だったような気が・・・。いやちよつと待てよ・・・それって間に合うのか？」

一夏の専用機は早くて月曜に来るのだ。しかしそれは決闘に間に合うのかが問題になった。もし間に合なければ最悪、学園側のISを借りるしかないのだ。しかし、専用機を持つセシリア相手だと借り物のISだと厳しいのだ。

ならどうすべきか、2人は考えこんだ。そこで箒の提案が上がった。

「なら一夏、私と付き合ってくれないか？」

「え？ええ!？」

箒が言いたいのは剣道のことである。少しでも体を動かしておかないと本番には勝てないぞと箒が言いたかった言葉だろう。この言葉の意味に気付くのは箒に道場に連れてこられてからの話である。

IS学園の道場にて激しい音が響き渡った。

今、打ち合いをしているのは一夏と箒である。しかし、一夏は押しきれ気味であり、箒が押しているのだ。一夏曰く、剣道をするのは小学以来であり、かなりのブランクである。

箒が一夏の胴に竹刀を当て勝ったのだった。

「ふう… やっぱ強いな箒」

「一夏。中学は何をしていた？」

「三連続帰宅部だな」

そのこの言葉を聞いた箒は可笑しいと思った。ブランクがあるにも関わらずその強さはあの時と変わらなかった。一夏本人は気が付いてはいないが、箒は一夏にはそれを敢えて言わなかった。言えば一夏が調子に乗る悪い癖が出るからである。

2人のやり取りを見ていたコウに連絡が入った。相手はAE社の技術開発からの人間だった。内容は、ガンダムの新しい装備についての事だった。この装備はレーザー系を弾き返す優れ物らしいのだ。それが完成し贈られて来るのは、来週月曜日である。その日は、セシリアとの決闘の日なのである。その時が来るようコウも準備に取り掛かったのだった。

## 15話

今日、第三アリーナでセシリア戦が行われる。そのせいか観客には大勢の生徒が集まっていたのだ。そしてアリーナのど真ん中には、二人を叩きのめすセシリアが待っていた。セシリアは自分の力を思い知らせ、見下すといった歪んだ考えを持っていた。だがその考えはすぐ打ち碎れるのだった。

(しかし、遅いですわね?まさか逃げたのかしら?)

そう思っていた次の瞬間、ゲートから何かが歩いてきた。

(来ましたわね...!...は?)

セシリアは呆気にとられた。歩いて出てきたのは、黒い布に覆われた機体であった。

それはセシリアと戦う前に遡る。

「まだ一夏の専用機は来てないのか?」

この日は決闘と専用機到着日であるが、肝心の専用機がまだ来ないのだ。このまま呑気に到着を待つと相手が痺れを切らし逃げたと考えてしまうだろう。

たとえ到着したとしてもISの「初期化」と「最適化」(合わせて一次移行)を行わないと専用機としての性能が発揮出来ないのだ。

そうなるとコウが出るしかないのだ。

丁度、コウはAE社から新装備が送られそれを試す機会を得たのだ。しかもぶっつけ本番で

その新装備の名は、ABCマント。正式名はアンチ・ビーム・コーティングマントである。

特殊繊維とビーム・コーティング材を織り込んだ対ビーム装備である。

この装備はビームを弾き返す他、機密性に優れているのだ。しかし残念な所もある。機密性を発揮するのは暗い宇宙空間しか出来ない他、マントとスラストターの干渉関係で使えないことだがスラストターを一切使わなければ問題無いのでは？という無茶苦茶な発想が出たのだ。

つまり、スラストターを使わず戦えと言っているのである。

しかも、これを作るのにコストが高いため一つしか作られていないのだ。

(スラストターを使わず戦えだど？しかも使える武装がビームライフルだけだなんて・・・機体の適性考えているのか!?)

だがそれでもやるのがコウ・ウラキという男である。

「コウ・ウラキ！ガンダム試作1号機行きます!!」

本来ならスラストターを吹かせゲートからカツコよく飛び出すのだが、歩きななのでなんとも言えなかった。

観客はざわめきが広がっていた。それはそうだ、一夏のISでは無く、黒い布に覆われた謎の機体が出てきたのだから。

だがコウはそれに構わずセシリアのISを見た。

(あれは・・・射撃特化のISか?)

コウは一目見て分かったが、まだあのISには自分を驚かせるものがあるのではないかと、戦闘前にも関わらず心の中で興味心が広がっていくのだ。

ガンダムも同じで、ISという機体にもこの世界に来てから興味を

示したからであった。

(まったく俺は・・・戦う前に何を考えているんだ・・・。この癖だけ治らないのか?)

『両者試合を開始してください』

試合開始のブザーがアリーナに鳴り響き、コウはガンマンのように素早くライフルを抜き撃った。

その前にセシリアはコウに「この場で土下座をすれば許してやる」と言いたかったが、運悪くブザーが鳴り先手を取られてしまったのだ。

「な、なんて腕ですよ!?!あの距離から当てるなんて!?!」

セシリアはビームをギリギリ避け、上空に止まり自身が得意とした「アレ」を1号機に向けて撃った。

「舞いなさい!!「ブルーティアーズ」!!」

これを見たコウは、避けようとするが2発マントに当たった。しかしそれはマントにより跳ね返された。

「ビームが跳ね返された!?!けど連続で当てれば!!」

(2発・・・!後何発耐える・・・!?!)

このABCマントはもう一つの問題がある。それは耐久性だ。ビームを無効化にしてもビームを連続で受ける耐久力に関しては、何発耐えるかは作った人間にも分からなかった。

だんだんブルーティアーズの猛攻は激しくなり、遂にマントは持たなくなった。

(マントがつ・・・!だがこれで戦える!)

コウにとつてはスラスターの制限をするマントは邪魔でしかなく、後で技術開発の人間に報告しようと考えたぐらいである。そしてマントをおもいつきり脱ぎ捨て、ガンダム姿が露になった。

「全身装甲!?!」

(あ、あの姿は・・・あの時の!?!まさか奴が!?!)

千冬は表情は表さなかったが心の中で驚いていたのだ。それもその筈、白騎士というISに乗り、初めて戦った相手なのだから。

「全身装甲だなんて・・・そんなの聞いてませんわ!!何故貴方が・・・」



そう言いながらもスターライトmkⅢを撃ち続けるも、難なく避けられる。

「無駄口が多い!!」

スラストで跳躍し、セシリアに攻撃をしようとする。それをさせまいといわんばかりにセシリアはブルーティアーズを展開、攻撃した。

「邪魔だあ!!」

コウはブルーティアーズを踏み台にして破壊し、セシリアに迫った。セシリアは実弾のミサイルを撃つもビームサーベルで切り落とされた。

セシリアの残された武装はスターライトmkⅠとインターセプターのみである。

ここまで接近されたらインターセプターを展開しなければならぬが、この武装は滅多に使わないのでそれが仇になった。

その隙にコウは背後に回りセシリアの翼部を掴んだ。

そして……

「沈めええええええええええ!!」

翼部を掴んだまま急降下。飯綱落としをセシリアに食らわしたのだった。

この時セシリアの絶対防御が発動し気絶。セシリアの敗北が決定した。

『試合終了。勝者コウ・ウラキ』

## 16話

試合に勝ったコウは、正座されていた。

その原因は、コウがセシリアに飯綱落としを食らわしたからである。

絶対防御が発動したからセシリアは助かったが、これが発動しなかったら無事ではすまなかっただろう。

だから千冬はコウに説教をし、正座までさせたのだった。

「貴様はやり過ぎだ…。後の事は考えていたのか？」

「……返す言葉もございません」

コウも必死とはいえ、このあとの予定を考えるとセシリアは試合に出ることは出来ない。なら試合に勝ったコウと、機体の調整で出れなかった一夏を出すしかなかった。

「織斑……出れるか？」

「は、はい出ます」

「決まりだ。ウラキ、先にアリーナに入ってくれ」

「わ、わかりました。うう足がっ…」

正座から解放されたコウは立ち上がり、両足が痺れながらもピットにゆつくりと歩いていった。

これでコウと一夏が戦うのはこれで二回目である。一回目はコウの勝ちであったが、二回目は誰が勝つのかは分からない。これでクラスの代表が決まることになるのだ。

両足の痺れがやっと取れ、コウは出撃準備に入った。

「コウ・ウラキ！試作1号機、出ます!!」

ABCマントとは違い、コウはまともに出撃することが出来たのだった。

コウに続き、一夏は専用機「白式」を展開。出撃準備に入った。

「行きますー！」

こうして、二回目の戦いは始まることになったのだ。

一夏が発進口から出てきた所を見たコウはISを見た。一瞬あの「白騎士」の姿がダブって見えたのだ。色は似ているがあれは白騎士ではなく、「白式」なのだ。しかしコウは、白式に対する違和感が拭えなかった。

『両者試合を開始してください』

試合開始のブザーが鳴り、先に先手を取ったのはコウである。

しかし、その場で撃つのではなく下がりがら撃っているのだ。コウは一夏のISを一瞬で見て理解した。

一夏のISの武装は2号機と同じように当たれば「一撃必殺」である。

一夏はビームに被弾するも立て直し、白式の主武装「雪片式型」を展開し一気にコウに接近する。

「はあああああっ!!」

そして懐に飛び込んだ一夏は1号機に斬りかかるが、ビームジュツテを展開され、逆に1号機のビームサーベルでカウンターを食らった。

コウが迎撃、一夏が攻撃するなどして、一見押しているのは一夏であるが、コウにより迎撃戦に持ち込まれており戦況的にはコウが押しているのである。この戦況を変えるために一夏は決めた。

(もう一度懐に飛び込むしかない!)

白式には大きな欠点がある。それは格闘武装はなく射撃武装が一切無く燃費がとても悪いのだ。ハッキリ言えば、短期決戦を強いら

れ初心者がまったく乗れない鬼畜仕様である。

これに乗るならせめてバルカンのある2号機に乗った方がまだマシの方なのだ。

スラスターを吹かし、また懷に飛び込もうとするがコウ相手にそのような事は二度通じないのである。だが予想外の事が起きた。

1号機はジユツテを展開し、またカウンターを食らわせるのだが、一夏の雪片式型がそれごと斬り落としたのだ。ライフルは誘爆し、1号機の唯一遠距離武装が無くなった。

(ライフルとジユツテに頼り過ぎたか。：！だがあのパワーは一体なんなんだ?)

ライフルが破壊されようがジユツテが無くなるうが、コウの冷静な判断力は失っていないかった。寧ろ、闘志が増した程である。だが、それはすぐに終わる事になったのだった。

コウはビームサーベルを構え、飛び込んでくる一夏を斬ろうとする。対する一夏はライフルの無くなった1号機に一気に接近し勝負を付けようとするが、試合終了のブザーが鳴った。

『試合終了、勝者コウ・ウラキ』

それを聞いた一夏は呆気にとられた次の瞬間、絶対防御が発動した。

(な、なんで絶対防御が……?……まさかっ!?)

そのまさかである。白式のシールドエネルギーは既に切れていたのだ。確かに先手を取られた事やカウンターを何度か食らったが、それを全て合わせてもここまでいかないのだ。ここまでシールドエネルギーが減った原因を探るべく戻りながら調べることにしたのだ。

「織斑、何故負けたのか解ったか？」

「それは・・・白式の「単一仕様能力」が原因だと・・・」

戻りながら原因を調べた結果、白式の「単一仕様能力」である「零落白夜」が原因だったのだ。

これを発動し、対象のISを斬れば対象のシールドは消滅するのだ。しかしこれをずっと発動したままだと、自身のシールドエネルギーも減っていくのだ。いわば諸刃の剣である。

これを見るだけで白式は鬼畜仕様であるが使いこなせばと言えるが、射撃武装はなく燃費も悪いなど作った人間は何を考えているのかまったく分からない仕様である。

（白式・・・昔の剣豪とか使えば強いだろうけど射撃武装が無いなんて・・・後で全部見とくしかないか）

そう考えている一夏を見て、成長したなど言わんばかりの目で見ていた千冬は少しニヤけていたのだったのだ。

そこにコウからの話があった。

「織斑先生、ちよつと話が・・・良いですか？」

「ああ、構わん。何だ？」

「俺、クラス代表辞退します。クラス代表に向いているのは一夏です」

「・・・え？」

ずっと考えていた思考から帰ってきた一夏は驚いた。

それはそうだ。イギリスの代表候補生に勝つ位の実力を持っているのだから。

「一夏、俺はクラスの全員を引っ張る事はできない。俺は「コイツ」の操縦しか出来ないからな」

そう言い、コウの指にはめられた指輪を指差した。

「俺は2回勝っているから、良いですよね？織斑先生」

「・・・いいだろう辞退を認めよう」

「・・・ありがとうございます」

そう言い、頭を下げその場を去ったのだった。  
後ろ姿を見た千冬は疑問が浮かび上がった。

（コウ・ウラキ・・・貴様は一体何者なんだ？）

## 17話

アリーナから帰ってきたコウは、試合で流れた汗を流す為にシャワーを浴びていた。

実は、シャワーを浴びる前にA E社からまた新装備が届いたのだ。その新装備を見た感じ、あのABCマントより優れており、尚且つ、使い捨てでは無く「換装可能」の装備で、さらにあらゆる爆弾を防ぐことが出来る他、臨界半透膜がコーティングされている。

もちろん、換装すれば起動力が下がりマトモに動けない装備なので使い道は選ばなければならない装備だとコウは思った。

その装備と一緒に届いた物がある。それは技術開発部からのメールであった。

内容はガンダム試作3号機の完成日に来てほしいというものであり完成するのは予定では今年の夏予定である。

だがそんな事を更けかえっているとところに魔の手が迫る。

浴室の扉がいきなり開き、そこに立っていたのはドヤ顔の楯無であった。しかも水着で

コウはシャワーを浴びているので誰も入って来ないと思っていたがまさかの楯無であった。

さらに下を巻いていないので「アレ」が完全に見えるのだ。さらにさらにコウの「アレ」を完全に見てしまった楯無はとても動揺した。

「ちよつとー前、前!!見えてるから!」

自分が入っているのにいきなり入ってきてそれは無いだろと思つたコウは、楯無に対してちよつとした悪ふざけをした。

動揺した楯無を自分の顔の方に引き寄せ目線を合わせた。  
そんなことをされた楯無本人はというと・・・

「うう・・・ ううううううう」

顔を赤くし目を潤ませ泣き出す寸前だった。

流石にやり過ぎたコウは楯無に謝ろうとするが、楯無はコウの目線を外し下を向いた。

「フフ、フフフフフツ」

「た、楯無・・・？」

「明日アリーナに来なさい・・・私をからかった事を後悔させてあげるわ・・・ フフフフフツ」

顔を下に向け笑いながら浴室を出ていった。

こうして楯無に挑戦を挑まれたコウだった。

そしてアリーナにて、2機のISが激しく戦っていた。

1機はコウの試作1号機、もう1機は更識楯無のミスティアス・レイデイである。

しかもアリーナの観客席はほとんどの席が埋まっている。

それもその筈、入学してそんなに日が経っておらず、更に代表候補生を倒し、その次に学園最強に挑む等しているのだ。

だが今回挑む側ではなく挑まれる側なのだ。それは滅多に無いことであり、それを知っているのは今戦っている2人だけである。(しかし原因はコウである)

「楯無！昨日は本当に悪かった！だから・・・」



「だから……何かしら?」

その声はとても冷たく怒りに溢れていた。

「貴方が何を言おうと話す舌は持たないわ!」

蛇腹剣を1号機に振りかざし、攻撃を何度か当てた。今まで無傷で勝利したコウが初めてのダメージを受け観客はざわめいた。

(楯無の奴、どうやって水を操っているんだ?)

楯無のISはナノマシンで構成された水を自由自在に操る事ができその事は当然ではあるが操縦者しか知らないのだ。だがコウの観察力を侮ってはいけない。

(……あれが水を操っているのか?)

コウが見ていたのは楯無の後ろにフワフワしている物が水を操っているのではないかと思えばビームライフルを撃った。

しかし難なく避けられ何度も撃つも当てる事すら出来なかった。

すぐさまビームライフルからサーベルに変え、接近戦をしかけようとするが、よく回りを見渡すと何故か霧に包まれていた。

何かマズイと感じたコウは新装備に換装し、身を守った。そして……

ドゴオオオオオオン

コウがいた場所は大爆発を引き起こし大きな音を立てた。

これで勝敗は決したかとアリーナにいた全員は思っていたが試合終了のブザーが鳴らないのである。

段々と爆発の煙は薄れてそこに立っていたのは……

「ふう〜危なかった……。『チョバム・アーマー』が無ければ俺負けてたぞ……」

そう言いながらチョコバム形態から通常形態に戻った。

「は……はあ!?ちよつとそれズルくない!？」

「悪いな楯無。俺の機体は応用が利きやすいんだ。というか楯無は人の事は言えないじゃないか！」

「なんですつて!?貴方だつて……」

そこからは2人による口喧嘩であつたがその喧嘩も埒が明かず、再び試合に戻った。

コウはバルカンで牽制しつつ接近し、ビームサーベルを展開して楯無のシールドエネルギーを減らし同時にナノマシンを構成するクリスタルを突き刺そうとするが、空中に逃げられた。

前回コウはセシリアのBT兵器を踏み台にして接近していたが、それは今回ない。スラスターを使ったとしても落とされるのがオチである。

なら試作1号機の最後の形態を使うしかなかった。

最後の形態は本来宇宙でしか使えなかったのが、時制限で使える事が可能になつたが制限時間は3分である。

コウは迷わず最後の形態に移行しスラスター全開で空を飛び楯無に食らいつこうとする。

対する楯無は飛んできた試作1号機を落とそうとするが動きが速く中々落とせなかつたのだ。

「まるでバツタみたい……っね!!」

近づいてきた試作1号機をナノマシンで覆われたランスで突こうとするが、ビームジュツテで防がれランス先端は蒸発しかけていた。

ガトリングガンを撃とうとするが既に1号機の姿はなかった。

楯無は背後を振り向こうとするが既に遅く、体を締め付けられ、一気に下に急降下した。

(……私の負けか……)

そして地面に激突し楯無の絶対防御が発動した。

『試合終了。勝者、コウ・ウラキ』

今ここに学園最強を倒した人間が現れたのだつた。

## 18話

試合終了のブザーが鳴り終えた後、コウは楯無の方に駆けた。

「楯無・・・」

「なにかしら?」

「昨日は本当に・・・」

そう言うコウに楯無は声をあげて笑った。

「まだそんなこと言っているの? 貴方ったら責任感強い人ね」

「本当の事を言うよ」キツカケ「が欲しかったの。貴方に挑む為のキツカケをね」

「ん? ということは・・・すべて演技だったのか!？」

「そうゆうことよ」

全ては楯無の演技だったのである。

コウが楯無にあのような行動をしたのは想定内であり、全ては楯無の手の内だったのである。

「はあ・・・俺はまんまと騙された訳か・・・」

そう言うコウに楯無はあることを言うのを忘れていた。

「あ、そうそう貴方に言わなければならない事があったわ」

「なんだ?」

「貴方を生徒会長に任命しますよ」

「・・・え?」

学園最強の楯無はコウに破れた。

学園最強はその名の通り学園の中で最強でなければならぬ。

最強を渡すとの同時に生徒会長の座も渡さなければならぬのがこの学園の掟なのである。

これを聞いたコウは大きく頭を悩ます事になったのであった。

次の日、コウが教室に入ると大きなざわめきを広げた。

男でありながらIS（ガンダム）を起動でき、更には学園最強を倒

し、その名の引き継いでいるのだ。

しかしコウ本人は、そんなものには一切興味がない。

コウは宇宙世紀で後に「幻の撃墜王」と呼ばれるが、ただ1人の男を撃墜することはかなわなかったが

(しかし、入学してから更に視線が強くなったような気がするが……) 席に座り周囲を見渡すと、外はそんなに居なかった筈が段々集まっている。

教室の外は、コウに興味を持った人間が集まっている。

教室の中では、コウに対する畏怖の視線や怯えた視線が多かった。

その中にはコウにプライドを粉々に打ち砕かれトラウマを持った人間がいる。

それはセシリアだ。

あの時の威勢は一体どこにいったか分からない状態で、さらに、コウの視線を合わせただけで小さい悲鳴をあげ視線を逸らす位に酷い状態でもあり、さらに言えばガンダムを見ただけで戦意が喪失するぐらい酷いトラウマを持ってしまったのだ。

日が経てば多少マシにはなると思うが、あの状態はしばらく続くだろう。

(やり過ぎてしまったな……)

そんなことを考えていると、ある会話が耳に入った。

それは二組の代表が変わり、中国から転校してきた人間が新しい代表になった話である。

二組の前代表は専用機持ちであり、手も足も出せない人物だとほんの少しだけ聞いていたのだが、それを越える人間が現れたのか。

(時間は……ギリギリだな。パッと見て戻るか……)

コウは立ち上がり二組の教室に行こうとするが、何者かに前を防がれた。しかも何故か腕組みをし目を瞑りながらドヤ顔をしていた。

「フッフッフッ」

(な、なんだ?いきなり笑って……)

「その情報古い……ってうわ!アンタなによ!!」

「いきなり失礼な奴だな・・・すまないがそこをどいてくれないか？」  
「へえ、私にどけと・・・いい根性してるじゃない・・・ってアンタどつかで見た顔ね・・・」

思い出そうとする彼女に、一夏が遅れて来た。一夏は彼女を見て驚いた。

「あ！お前、鈴か!?てか何でカツコつけてるんだ？全く似合わないぞ」

「い、一夏・・・久しぶりに会ったと思えばいきなり失礼ねえ！」

「一夏、この子は？」

「このチンチクリンは凰鈴音で、俺の幼馴染みなんです」

「チンチクリンは余計ね！言っとくけど、私は中国代表候補生で、二組のクラス代表なの！わかった!?!」

そう自慢げに話す鈴とそれを聞いている2人に頭部から強い衝撃を食らった。

「痛ったあ・・・なにんすの・・・よ・・・」

鈴が後ろを振り向くと、眉間にシワを寄せた千冬と大きな丸眼鏡をかけた女子がいた。

「ち、千冬さん!?!なんでここに!?!」

驚く鈴であったが、間髪入れず丸眼鏡の女子が頭を掴み持ち上げた。

「ちよつとなんて握力なの!?!」

「うるさい。早く戻るぞ」

そう言いながら二組のクラスに戻っていった。

「嵐が来た感じだな・・・」

そう言い自分の席に戻るコウであった。

## 19話

昼休みにA E社の定期連絡を終えたコウは教室に戻ろうと呑気に欠伸をしながら歩いていると誰かにぶつかった。

「す、すまない！・・・ん？君は鈴音か？」

ぶつかった人物は鈴だった。しかしよく見ると何故か顔を赤くし、目を潤わせていた。

「ごめん・・・先急いでいるから・・・」

そう言いどこかに行ってしまった。

(あの様子だと何かあったみたいだな・・・)

それを気になったコウであったが、他人のプライベートを聞くのは不本意だと思い、鈴の後を追いかける事はしなかったが、後日、一夏が鈴との約束を思いだし、その場にいたコウが知るのはまだ先の話である。

日が経ち、クラス対抗戦の日がやってきた。

アリーナ会場は大きな盛り上がりを見せていた。

初戦の第一回戦は鈴が駆る専用機甲龍と一夏の駆る白式であった。

試合開始のブザーが鳴り両者は動き出した。

鈴が攻撃するが一夏は攻撃を避けながら後退していった。

本来なら、相手の懐に飛び込み一気に勝負を決めるのが一夏の戦い方なのだが、コウとの戦いを経て初見殺しにならないように相手の癖や戦い方などを観察し、すべて分かれば勝負を決めるようにしているのだ。

そして勝負は一気に動き出した。

すべて見切った一夏は、懐に飛び込み一気に勝負をつけようとし、自身のスラスターでアリーナ会場の土を使い土煙を引き起こした。

これに驚いた鈴は土煙から逃れるべく上空に逃げ、土煙が収まるまで待ち続けた。

これが収まると既に一夏の姿はなかった。

そして反応は上を指していた。

2人の距離は離れており、甲龍は龍咆を発射し白式に直撃を食らわすが、それに耐え試合中展開しなかつた雪片式型を展開させ一気に突っ込んだ。

対する甲龍は双天牙月を展開し、雪片式型を防ぐが、白式はスラスターを全開に押し切ろうとする。

そしてパワー負けした甲龍は一気に押しされ、白式とともに地面に激突した。しかし甲龍は激突する前に龍咆を使い衝撃を和らげるもダメージは受けてしまい体勢を立て直すのが遅れてしまった。

つまりそれは一夏とつて大きなチャンスでもあつた。

その小さな隙も逃さない一夏は一気に勝負を決めるべく、大きく飛び上がり甲龍の頭上を強襲した。

やつと体勢を立て直す事ができた甲龍は、周囲を見渡すと白式が甲龍の頭上に飛んだ後であり、これもまた反応が遅れてしまうが一か八かの勘で龍咆を撃った。

普通は見えない物は斬れない筈だが、一夏は難なく龍咆の空気弾を真つ二つに斬り、そのまま甲龍を真つ二つに斬ろうとする。

そして白式の雪片式型が甲龍を真つ二つにしようとする……

パ  
リ  
イ  
イ  
イ  
イ  
イ  
イ  
ン

この音は甲龍のエネルギーシールドが割れた音なのかアリーナ会場にいた全員は思った。

しかし雪片式型は甲龍の頭上にとどまり斬れてすらいなかった。

「なら何が割れた音か？」

「システム破損！アリーナの遮断シールドが破壊されました！」

「何……!？」

割れたのと同時に「何か」が空から降りてきた。

「か、拡大します……」

拡大すると、モニターに映ったのは「緑色の全身装甲I S」であつた。

緑色のI Sは敵を見つけたかのように、そこにいた甲龍と白式に実弾のマシガンを数発撃つた。

呆気にとられた甲龍は反応が遅れたが白式により救助された。

これを見た観客は正体不明の敵に恐怖に陥り大混乱をきたした。しかしコウだけは違った。

恐怖ではない。驚愕しているのだ。

それもその筈、あの緑色の全身装甲I Sはコウにとって見覚えがあるからだ。

宇宙世紀でジオン公国が作り上げた最初のMSであり原点。

その名は……

ザク

ザクは恐怖に陥った観客を見ようともしせずただそこに突っ立っている。まるで門番のように待ち構えているのだ。



コウは試作1号機を展開し、アリーナに降りた。

「鈴音！一夏！今すぐここから離脱しろ!!」

「でも、コウさんは!?」

「俺はコイツの相手をする!!お前達がそんな状態じゃ足手まといだつ!!分かったら早く行け!!」

コウの言葉は一理あるためそのまま離脱した。

2人が離脱した後、上空からザクが2機増え合わせて3機になった。

この3機のザクは一年戦争で量産機として活躍した「ザクII」で、武装を見れば「ザクマシンガン」と「ヒートホーク」だけであった。

3機でも機体性能はガンダムより遥かに劣っているのが、もし、エース級のパイロットが乗っていればコウの実力でも手こずるだろう。

コウが二歩前に進んだ瞬間、ザク3機同時に動き出しマシンガンを撃ちながら弾幕を張った。

スラスターを使い大きく飛び上がった1号機は、3機同時にビームライフルを当て、1機のザクの懐に入り斬りかかろうとする。

しかしそうはさせまいと2機のザクはヒートホークを展開し、1号機に向け振りかざそうとする。それに気付いた1号機は回避し、懐に入り斬りかかろうとしたザクの1機はヒートホークで両腕を切り落とされてしまった。

これに人が乗っていれば両腕からは血という血が大量に溢れ出てこれを見た普通の人間は発狂するだろう。しかし違った。

あのザクの両腕から流れでているのは血ではなく、オイルが流れ出ているのだ。これにはコウも驚いた。

「人間じゃないのか!?!...ということはAI型か!!」

更に驚いたのは、ヒートホークの威力である。

恐らくあのザク達はリミッターというものはないだろう。

そうでなければザクの両腕は斬れないのだから。

(機械相手に遠慮は要らないな！)

コウは1号機のリミッターを解除し、武装は全てあの世界にいた時と同じ威力になった。

まずコウは両腕を切り落とされたザクをビームライフルで両足を撃ち抜き完全に動けなくし

残ったザク2機はマシンガンを撃つが、1号機がビームサーベルを投げ、ザクのコックピットに刺さった。

コックピットにビームサーベルが刺さったザクは動力部に直撃したためそのまま動けなくなった。

最後に残ったザクはヒートホークを展開し、1号機に振りかざそうとするが、ヒートホークを持った手を斬られ、最後に動力部を貫かれそのまま動かなくなり、すべてのザクをコウ1人で倒してしまったのであった。

そしてクラス対抗戦が中止され、事件の収束に向かっていったのであった。

### 事件収束後

このIS学園に新たな転校生が現れたのであった。

## 20話

「今日は「転校生」を紹介します！」

ホームルームにて、山田がそう言った言葉であった。

最近は大トラブルの連続で、入学してから皆の精神は削られ鬱憤していた。しかし、「転校生」という言葉にそれは晴れた。

どんな人物が来るのだろうかとざわざわしていると、教室の扉が開いた。

入ってきたのは、小柄で華奢であり金髪。王子様と思わせるような雰囲気であった。

「シャルル・デュノアです。フランスからやって来ました。皆さん、よろしくお願ひします」

そう笑顔で言い、言葉を続けた。

「此処には、僕と同じ境遇の方々がいると聞いて、本国から転入を……」

「……」

この時一夏はもう一人の男性操縦者が増え心の中で大喜びしていたが、その時のコウの表情はとても硬くシャルルに対して「ある疑念」を持っていた。

(シャルル・デュノア……？男……？男なのか？……)

コウの疑念の目はだんだん強くなっていくが、それ以上強くするとこちらの視線がバレるのでそれ以上は見ることを避けた。

ホームルームが終わり、シャルルは一夏とコウに挨拶を交わしていたが今日は二組合同の実習が行われる。

これに遅れると千冬による制裁が待っているので急いで更衣室に向かった。

しかしその道を遮る者が現れた。

シャルルが来たということもあり、それを見たいと大勢の女子達が集まってきた。

しかしコウが前に出て彼女達少しだけ話すと簡単に道を開けてくれた。

そして更衣室にたどり着いたが、そこでシャルルの様子が変わった。

背中をこちらに向け、突っ立っていたからだ。

「どうしたんだよ？シャルル？着替えないと遅刻するぞ？」

「うん・・・着替えるには着替えたいけど・・・」

まごつくシャルルにコウはあることを思い出した。

「シャルルすまない。俺のメット取りに行ってくれないか？取ったついでにそこで着替えればいいと思うんだが・・・」

偶然にも、この言葉はシャルルとつて助け舟であった。

コウのメットはあの時と同じ物でありそれは大きい物でロッカーの中に入らず別の所に置いてあるのだ。それは「今」のシャルルにとってありがたいものなのだ。

「着替えたよー。ウラキさんのメットつてこれかな？」

「これだな。すまないなシャルル」

「ううん別にいいよ気にしないで。それより早く行かないと！」

「もうこんな時間か・・・早く行かないとな先生にドヤされてしまうな」

3人は更衣室から急いで出て行き、第二グラウンドに駆けた。

「本日から実習を始めるが・・・そうだな。嵐、オルコット前にお前達は2人には戦闘を行ってもらおう」

「めんどいなあ・・・何で私？」

「はあ・・・こういうのは見世物でみたいで、気が進みませんわあ・・・」  
「まあそう言うな。嵐、あいつに良いところを見せれるぞ」

その言葉を聞いた鈴は何故かやる気を出した。

「オルコット。その態度を続けていたら生徒会長を乱入させるつもりなのだが?どうだ?」

「ヒッ!・・・そ、それだけのご勘弁を!!」

「?」

「・・・先生何て言ってるのかな?」

「それは分からないけど、多分2人を鼓舞したんじゃないのか?」

「それで織斑先生?私の相手は鈴さんですか?」

「慌てるなオルコット。どうやら今来たみたいだな」

「え?」

周囲を見渡すがその相手は見えなかった。しかし上から何故か声が聞こえた。

「あああああああああつ!!!どいてくださああああいいいいいい!!!」

「あれって山田先生じゃないのか?」

「・・・ああそうだな。しかしこっちに來てないか?」

「あ、本当だ」

既に男2人の回りは誰もおらず気づいていないのだ。

コウは落下地点がここだと分かりその場から逃げたが一夏は反応が遅れた。

そして一夏がいた場所は大きな激突音が響いた。

土煙が晴れるととんでもないものを見てしまった。

一夏が山田の「アレ」を驚掴みしていたからだ。

それを見たコウは呆れ、彼に惚れていた2名は目のハイライトを消していたのだった。

## 21話

「こ、今回も「転校生」を紹介します」

ホームルームで山田が言った言葉だ。

山田の隣にいる彼女がそうである。

「ドイツから転校した、ラウラ・ボーデヴィツヒさんです……」

昨日のシャルルに続いて今回はドイツから来たラウラである。

まるで作為感を感じさせた人間はごくわずかであったが、それはあり得ないかと思いいその考えは捨てたのだった。

「……皆に挨拶をしろ、ラウラ」

「……はい、教官」

〔教官〕？それって千冬姉がドイツにいたときの事か……？

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

「……」

「ええくと……ラウラさん？それだけですか？」

山田が質問するがラウラはまた口を固くしてしまい、山田はどうすればいいか分からずあたふたしていた。

ラウラは一夏の方に歩みよった。しかしその目は憎悪に溢れ一夏を殺すといわんばかりの目であった。

「貴様が……！」

「え？」

そしてその手を一夏の顔を打とうとする。

しかしそこで質問が飛んだ。

「織斑先生。ラウラは先程先生を「教官」と呼びましたが、彼女は軍人なんですか？」

それはコウからの質問であった。

「ああ、そうだが。それがどうした？」

「その軍人が「一般人」に私怨で手を出そうとしていますますがそれはどうなのですか？」

「……」

コウの言葉は鋭かった。この言葉でラウラは一夏に暴力を振るのをやめたが、それを遮られ憎悪のままにコウを見たが、臆することなくコウは平然とした態度でいた。

「——っ！今日の所は引いてやる……」

打とうとした手を下げ、恨み言葉を吐いた。

「認めるものか……！貴様があの方の弟など私は絶対に認めないっ……！」

こうして2人目の転校生であるラウラはクラスに重い空気を残し席に座った。

射撃訓練の最中一夏は大きな溜め息を吐き続けていた。

「……はあく」

「一夏の奴、まだ気にしているのか？あれでは射撃訓練が身に付かんぞ」

「へえく酷いもんねえ」

「そうですわね。喝を入れなければなりませんわ！」

「3人とも聞こえてるぞ……はあく」

（（また吐いた））

「一夏。ラウラの事が気になるのか？」

「……はい。あの憎悪の目は尋常じゃなかったですよ……」

一夏が溜め息を吐き続けていた理由はこれである。

「彼女に何かしたのか？」

「とんでもない！初対面ですよ!?でも千冬姉とは関係しているかもしれないけど……」

「ラウラが織斑先生を「教官」と呼んだときか？」

「千冬姉は元ドイツの教官で、教官として入った理由は……」

しかしどこともなく砲弾が飛んできて一夏の言葉は遮られた。

「・・・チツ、外したか」

「ラウラ・・・！」

砲弾を放った犯人はラウラであった。しかも一夏だけを狙っていたのだ。

「織斑一夏・・・私と戦え！」

「・・・その前に聞きたいことがある。なんで俺を狙ってくるんだ？」

「っ・・・！貴様が教官に汚点をつけたからだ！」

「汚点？」

「貴様は気がついていない筈だ！自分のせいで教官は2連覇を逃してしまった事を！だから私は貴様を今ここでっ・・・!!」

そう言いながら再びレールカノンを撃ち、一夏に直撃させようとするが、白夜を展開し砲弾を真つ二つにした。

そして真つ二つし破片が飛ぶがコウは難なく切り刻んだ。

そこからラウラと一夏の私闘が始まる寸前だったが思わぬ人物が現れた。

「まったく・・・転校早々に騒ぎを起こすとはどうゆうつもりだ？ボー  
デヴィツヒ」

「ぎよ、教官!？」

「ここでは織斑先生と呼べと言ったんだがな・・・ 2人とも、戦いたいなら来週行われるツーマンセルトーナメント(学年別トーナメント)で戦え。それまで2人に私闘を禁じる。いいな？」

「・・・了解しました」

ラウラは一夏に殺意を向けその場を去ったのであった。

その夜、コウは一夏に呼び出された。なんでもシャルルについて話したいことがあるらしいのである。



「入るぞ」

ノックし、部屋に入ると「シャルル」と似た女子が居た。しかしコウは彼女が誰なのかはすぐに分かった。

「シャルロット・デュノアか？」

「え？何で知って…？」

「君の事は…まあ、社長自ら裏の情報で教えてくれたからな。それで一夏、シャルロット…いや、シャルルの事で連絡を寄越したのか？」

「…はい、その通りです…」

シャルルの本国フランスはIS技術が遅れており、シャルルの父であるデュノア社の社長は自分の娘をこのIS学園に送り込み、男性縦者2人のISデータの収集もしくは、強奪を指示した。これがシャルルがIS学園に転校してきた本当の目的だった。

しかし、運悪く一夏が「彼」ではなく「彼女」を見てしまったので完全にペアとなってしまったのだ。

「そういうことか…そして女だということが本国にバレ、呼び戻され最終的には牢獄行きか…」

「お願いします！浅はかなお願いではあるけど俺はシャルルを助けたんです！どうかっ!!」

一夏は土下座をしコウに必死に迫った。

(治外法権がこの学園に存在するとは言え、フランスがシャルルを呼び戻す口実ら幾らでも作れる…どうすればいい…?)

(いや、一か八かでやってみるしかないな…)

「分かった。なんとかかしてみろ。少し待っている」

コウは部屋を出ていき、ある所に連絡を入れた。

数分後…

「わかりました。ありがとうございます」

再び部屋に入り結果を教えた。

「シャルル。時が来ればまた連絡する。しばらくは男として過ごして

くれないか?」

「え?もしかして・・・」

「ああ、なんとかするそうさ。だが喜ぶのは連絡が来てからだ」

「そうですか・・・コウさん。今日はありがとうございます」

「ああ、それじゃあ。あとシャルル、その格好寒くないか?」

「え?・・・あ!!」

シャルルの格好は世の男共を悩殺するには十分の格好であり、コウが話しているときも注目がそっちにいつてしまいそうだった位なのだ。無論一夏も含めて

「2人のエッチ・・・」

「すみませんでした」

そうしてこの日の夜はこうして過ぎていった。

## 22話

学年別トーナメント当日

この日のアリーナの観客は大勢の偉い人物で溢れていた。

三年はスカウトする人物を選び、二年は一年間の成果を見せ、三年になればスカウトする人物を選ぶという巡り合わせみたいなものがあった。

だがその観客の中にも「俗物」がいるということ忘れてはならない。

「まったく・・・酷いものだね・・・」

A E社の社長トレーズ・クシユリーダは憂やんでいた。

久しぶりにコウと一夏、そしてこの学園に送り込んだマドカの顔を見ようとこの学園に来ていたが、案の定、トレーズに群がる俗物が大勢いた。

（先週、彼からデユノアについて連絡があったが私にとってはありがたいものだ・・・。かの機業と繋がっている情報があるからね・・・）  
そう考えながら歩いていると、前から見覚えのある男が走ってきた。

それは試合の準備に急いでいたコウであった。

「しや、社長!？」

「やあ、久しぶりだね。元気にしているかい？」

「ええ、おかげさまで。社長は何でこの学園に？」

「なに、大した事ではないよ。君と一夏の戦いぶりを久しぶりに見たくてね」

「ああ、それなら一夏が初戦で戦いますよ。ペアは確か・・・デユノアですよ」

「ほお、それは面白い組み合わせだね。ますます見たくなってきましたよ」  
そう笑いながら答えたトレーズであった。

しかし時間を見ていないコウに修羅が迫ってきた。

「へえ〜こんな所で油売ってたんだ〜生徒会長さん？」

「こ、この声は・・・」

「おや？刀奈ではないか。久しぶりだね」

「叔父様…… お久しぶりです。ですがその名はここで呼ぶのは控えてもらえると……」

「おっと失礼……」

「ともかく、この人連れて行かないと試合が始まらないので失礼します」

そう言いコウの耳を引っ張って行った。

勿論コウはおもっいきり叫んでいたという

試合初戦が始まっている中、いきなり千冬にある事を言われた。

「ウラキ。決勝戦はお前1人で戦ってもらおうぞ」

この時のコウは大きく戸惑った。

「どうして俺だけ1人で戦わないといけないんですか!？」

「それはなウラキ。お前がこの学園で一番強いからに決まっているからだ」

「そんな理由ですか!？」

「他に何かある?」

「……はあく、分かりましたよ」

コウはしぶしぶ承諾したのだがその時、試合に異変が起きた。

「織斑先生!ラウラさんの様子が……!」

「なに?」

振り返るとモニターに映っていたのは、悶え苦しむラウラであった。そしてラウラのISから黒いナニカが彼女を包み込んだ。

「……。山田先生、警戒レベルをDに。状況が変われば上げても構わない」

「分かりました!」

そうしている間に黒いナニカは形を成した。

アリーナ初戦、一夏は圧倒的な力をラウラに見せつけた後、彼女に異変が起きた。

いきなり悶え苦しみ、黒いナニカに包み込まれた。

黒いナニカは形を成し、姿をあらわした。

「なっ……！あれってまさか……！」

「どうしたの一夏!?!」

「千冬姉が乗っていたのと同じISじゃないか……!?なんでっ……？」

「確かによく見るとそっくりだけど……なんだろうまるで真似をしているみたい……」

（千冬姉の真似……?……そうか!）

一夏は理解したと言うよりかの教えがあって正体が分かったのだ。

「分かったぞシャルル！アイツのISにVTシステムが組み込まれていたんだ！」

「VTシステム!?!でもそれって全世界で禁止されてた筈じゃあ……?」  
「多分だけど、作られる途中で組み込まれたんだと思う！ならそれだけを破壊してラウラを救いだす！」

一夏は真っ先に飛び出し斬りかかるが難なく防がれたのだが、一夏にとつてその動きはあまりにも単調すぎた。

（動きは千冬姉が活躍したモンド・グロツソの時と同じ……でも今の千冬姉のほうが強い!）

すで見切った一夏は一気に間合いを詰め、一閃。同時にラウラを引つ張りだした。

操縦者がいなくなり苦しみ出すが形はまったく崩れなかった。

「嘘だろ!?!システムは破壊したのにな……!?!……シャルル、ラウラを頼む！」

ラウラをシャルルに引き渡し、形の崩れない機械に目を向けた。

形はぐちゃぐちゃに変形していき、周囲に黒いナニカを撒き散らした。

周囲の黒いナニカはだんだん形を成していく。

「な、なんだよアレ・・・？」

それは一夏が見たことがないものであった。

見た目としては一つ目で、白兵戦に特化した機体に見える右手にはヒート・サーベルを持っていた。

もう一つの黒いナニカが形を成したのは、同じ一つ目でやけに太っている他足はあるがホバーで浮いているのが分かった。

そしてそれを撒き散らした張本人はというと、撒き散らしたせいなのかそのまま消滅し、ISコアだけを残していった。

一夏の目の前に現れた謎の機体。一夏は知らないだろうが、これを見て黙っている訳にはいかない男は違った。

「一夏、無事か？」

「ええ、なんとか・・・。アレは一体・・・？」

一夏が指差したのは、2体の機体であった。コウは軍の教科書で見ることがないが存在を知っている機体なのである。

(アレは確か一年戦争で活躍したグフとドムか?)

ドムは2号機が強奪された際に見た事はあるが、グフの方は教科書でしか見たことがなく実戦経験は無い。

(あのドム・・・教科書で見た黒い三連星が搭乗した機体に似ている・・・。グフは・・・あのランバルが搭乗した機体に似ているな・・・)

そうしていると、ドムは分裂し2体に増えたのだ。

「ぶ、分裂!？」

(・・・もしかして俺が心の中で余計な事を言ったからなのか・・・?)

コウは顔に汗をおもっいきり垂らしやってしまったという顔をしていたが、ガンダムのフルフェイスなので隣にいた一夏に見られることはなかった。

ドムはその一つ目で一夏を見るが襲う気配はなく、逆にコウを見ると一気に襲い掛かってきたのだ。

同時にドムは一列になつて襲い掛かかり、対するコウはは1号機のリミッターを解除し、一夏に離れるよう指示した。

最初のドムは1号機に斬りかかろうとするが1号機は大きくジャンプしてドムを踏み台にし二番目のドムを斬り、そのままジャンプしてきた三番目のドムも斬り落とした。

着地点に先回りしていたグフがおり、サーベルでグフの頭上を突きつけようとするが避けられた。

そして2体のドムがやられ腹を立てたのか、最初のドムが1号機の背後に回り脳天をかち割ろうとするが、1号機は振り返りながら斬り抜き、ドムは跡形もなく消滅した。

またグフはヒート・ロッドで強力な高圧電流を1号機に流そうとするが、1号機のシールドで防がれてしまいそのままシールドを地面に突き刺した。

グフはフィンガーバルカンを撃とうとするが既に遅かった。

「クウ…！たああああああ!!」

バルカンを撃ち同時にサーベルを展開し、グフの胴体を一気に斬った。そしてドムと同様、グフは跡形もなく消滅した。

「はあ…はあ…。終わったのか…？」

念の為索敵し周囲に隠れた敵を探すが見当たらず、そのままラウラのISコアを持っていき、その場を離れたのであった。

これを見ていた人間は、コウの事を「白い悪魔」と恐れられていたのであった。

そしてコウはこの戦いを終え疑念を得た。

ジオンがこの裏で暗躍しているのではないかと…

## 23話

「・・・失敗作はやっぱり失敗作かゴミめ・・・」

コウと一夏の活躍で騒動が収まりかけていた頃、アリーナの人通りの少ない通路に一人の男がいた。

男はドイツでIS開発者をしており、更にラウラを造った張本人である。

(VTシステムと同時に組み込んだあの「システム」・・・奴等から貰ったとはいえ・・・まだまだ改良の余地があるな)

その場から去ろうとするが、男の前にトレーズと丸眼鏡を掛けIS学園の制服を着た女に阻まれた。

「なんだね君達は？」

「失礼。私は君に用があつてね・・・単刀直入に聞こう。『彼等』と繋がっているね？」

男は顔を歪めその場から逃げようとするが、丸眼鏡の女は懐から拳銃を引き抜き、男の足元に引き金を引いた。

「・・・マドカ。学園に拳銃を持ち出すとはいけないね・・・」

「自衛用だ・・・なんならお前に向けて撃つてやろうか？」

怖い怖いと言いヤレヤレという動作をしていたトレーズであつたがその目は男の動きを逃さなかつた。

男は懐から拳銃を引き抜きトレーズに引き金を引こうとする。しかし、トレーズは人間とは思えない速さで間合いに入り、拳銃を奪つた。

「さて、教えてもらうよ。でなければ少々荒っぽい事をさせてもらうが？」

「・・・クククツ！教えるものか!!」

男は笑いながら隠し持っていた暗器を自分の首に突き刺し、二度と息を吹き返す事はなかつた。

「死んでも話さないと言うことか・・・」

トレーズは目を瞑り、男の死んで開いたままの目を閉じたのだっ



た。

その頃、コウはラウラの様子を見るために保健室前に来ていたが、扉を開けようとすると中から千冬が出てきた。

「ウラキ・・・お前には面倒をかけたな」

「いえ問題ありません。・・・先生、ラウラの様子は？」

「問題ない。だが少しアイツは心の整理が必要ではあるが」

「はあ・・・」

ラウラの心の整理については聞くことはしなかったが、逆に千冬からこんな質問が飛んだ。

「あの日、アイツが転校して一夏に手を上げようとした時、何故止めた？」

「何故ってそれはそうでしょう。軍人が一般人の学生殴ったら流石に不味いですよ」

「・・・まるで自分を軍人であるかのような言葉だな？」

「軍人ではありませんよ。俺はただの一般人です」

「ほう？ならその一般人はなぜ学園最強の生徒会長になれるのかな？」

「そ、それは・・・」

「・・・まあいい、とにかく答えは聞いた。今日は遅い。早めに戻るといい」

千冬はその場から去り、コウはラウラの様子をすぐ見て帰った。

その帰える道中にコウはあることを思い出した。

(そっぴや今日、男の大浴場が出来たんだよなあ・・・行ってみるか)

その日、大浴場に入ったのは良かったが、一夏とシャルルと一緒に

入っていたのを見てしまったコウは、情けない声を出したそうなの。  
更に次の日、シャルルはシャルル君ではなくシャルルさんとなり、  
シャルルにとって第二の学園生活が始まった。  
そして、調子が戻ったラウラは一夏のファーストキスを奪い一夏に  
惚れていた人物たちは大騒動を起こしたのであった。

### 臨海学校翌日

一組のバスは目的地に向け走っていた。そしてそのバスの中にコウの姿はなかった。

一夏だけコウに臨海学校の前日に教えられていたが、男仲間が減り少し寂しかった一夏であった。

そしてその頃コウは、A E社の格納庫にいた。

目的は3号機の受領である。

(3号機・・・アレに乗るのは久しぶりだな。前回は強奪みたいなものだったけど、今回はちゃんと受領出来るからな)

そう思い出しながら歩いていると、目の前に緑の球体が転がり込んできた。

「ん？ハロか？・・・なんでこんな所に？」

ハロを持ち上げようとするコウから逃げるように格納庫の方向に行き、気になったコウは格納庫の方にむかったのであった。

格納庫につくと、そこにコウの父・コウスケの姿が見えたのだが、その表情はどこか死んでいた。

「と、父さん？どうしたんだよその顔？」

「コ、コウか？・・・3号機の待機形態どこに行ったか分かるか？」

「待機形態？」

「ああ、形は緑色の球体なんだが・・・」

「・・・え？それなら父さんの足元にいるけど？」

「なに!?!」

コウスケは足元を見るとハロがぐるぐると回っていた。

「コウ、コイツが3号機の待機形態なんだが・・・」

『コイツジャナイ!コイツジャナイ!』

ハロはコイツ呼びををされ腹を立てて、コウの足元に転がった。

「ハロが3号機の待機形態なのか?父さん」

「・・・そして、デンドロビウム形態時の火器管制システムの役割を持っている」

操縦、火器管制システムとパイロットの負担を減らす為にハロが使われたのだが、そのせいなのか3号機の待機形態がハロになってしまったのだ。

念の為にハロを改造し、誰にも奪われないように更なる改良を施した結果このようになってしまったのであった。

「とまあ、このような事があった訳だ。それとこれを渡す」

コウスケから渡されたのは、ステイメン時の武装とデンドロビウム時の武装のデータを渡された。

ステイメン時の武装・・・

ビーム・サーベル

フォールディングバズーカード

ビーム・ライフル改良型

デンドロビウム時の武装・・・

大型メガ・ビーム砲

大型ビーム・サーベル×2

クローアーム×2

マイクロ・ミサイル・コンテナ×2

大型集束ミサイル・コンテナ×2

爆導索×2

Iフィールド・ジェネレーター

と書かれており、もはやISと呼ぶべきなのか分からないものであった。

デンドロビウムは一回り小さくなったとはいえ、今のISと比べる

とやはり大きいものなのだ。

「読んだな？じゃあ明日から試作3号機の最終テストを行う。今日はゆっくりしてゆっくりしてくれ」

「そうさせてもらいます」

なぜかコウは敬礼をしまい、父に奇妙な目で見られたのであった。

そして翌日事件が起きた。

銀の福音暴走事件である……

## 24話

試作3号機最終テスト翌日

コウはハロを連れ格納庫に来ていた。その格納庫は現在ガンダム試作4号機の調整をしており、回りには沢山の従業員がいた。

それを尻目にコウとハロはコウスケが来るまで待ちぼうけを食らい、暇すぎたコウはハロでお手玉をしていた位だったのだ。ようやくコウスケの姿が見えたのだが、その隣にはトレースの姿もあり様子が変だった。

「コウ。3号機最終テストはIS相手にやってもらおう」

「・・・え？」

「今日未明、アメリカとイスラエル共同開発の第三世代型軍事ISが暴走し、日本に向かってる。その目的地は・・・ここだ」

トレースがタブレットで見せると目的地はIS学園が臨海学校で行っている場所だった。

「なので君には、IS「銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）」を破壊してもらおう。それと相手は無人なので容赦はしなくてもいいよ」

「わ、分かりました」

「それではISを装着し、アレイの上に乗りたまえ」

トレースが指差したのは、黒色の「ド・ダイ」であった。

コウは3号機を装着し、ド・ダイの上に乗った。

（このド・ダイ・・・いつ作ったんだ・・・？）

そう考えている内にド・ダイは空に浮き、海の方に向かった。しかもド・ダイは離陸してから約10秒でマツハを超えた。本来ならコウの体にその負荷が掛かるが、負荷が掛からないように特殊な装置がド・ダイに取り付けられていたのだった。

そして海が見えたとの同時にコウスケから通信がかかった。

『高度は・・・十分だな。今からガンダム試作3号機最終テストを行う！コウ！その戦闘機から飛び降りて、デンドロビウムに換装するんだ！』

「りよ、了解！」

3号機はド・ダイから飛び降り、デンドロビウムに換装した。

「換装完了！換装完了！」

「こちらウラキ。デンドロビウムに換装完了した！」

『そのまま目標地点に向かい、銀の福音を破壊をするんだ。そしてデンドロビウム形態は最大で1時間しかない！それを超えたらESが大きく減っていく！それまでに決着をつけるんだ！』

「了解！ガンダム試作3号機デンドロビウム！行きます！」

デンドロビウムのバーニアを吹かし目標地点に向かっていったのであった。

時を同じくして、一夏と箒は銀の福音の暴走を止める為に目標地点に向かっていたが、一夏には心配している事があった。それは箒の事である。

昨日篠ノ之束がいきなり現れ、箒に新しい専用機を渡したのだ。その時の箒の表情はとても嬉しそうであったが、一夏から見ればとても不安でしかなかったのだ。

しかも専用機を貰ったからか、自分の力を過信し過ぎているのだ。まるで新しいオモチャをもらったかのように

だが一夏はそれを口にする事は無かった。

そうしていると目の前にISの反応が現れた。

銀の福音である。

一夏と箒は銀の福音と交戦、一夏はいつも通りにの戦いをしていたが、その隣の箒はいつもより前に行っているのである。これには一夏は下がれと言うが、箒は拒否、それどころか一夏に対し「軟弱者」と言い、一夏を怒らせた。

しかもタイミングが悪く一夏は下に密漁船がいるのを発見し、彼らを守る為に戦おうとする。対す箒は密漁船を犯罪者という理由で見捨てようとする。

そして銀の福音の激しい弾幕を捌いていくうちに白式のESは減少していき、0に近い数字になり一夏は負傷、気絶した。

それに気が付いた箒は、一夏を抱えその場から離脱しようとする。しかしもうひとつのISの反応がこちらに向かって来たのだった。しかもそれは目視出来る位の大きさであった。

(なっ…!?なんだアレは…!?)

そしてそのISモドキから通信が入った。

『箒か！一夏はどうなっている!!』

「ウラキさん！なんでこんな所に…?!」

『そんな事は後にしろ！何故一夏が負傷しているのかはあとで聞かせて貰う！そこに居ては戦闘の邪魔だ!!』

そう言われその場から一夏を抱え離脱した箒であった。

2人が離脱した後、目の前にいる銀の福音を片付ける為に、初手にビームライフルを撃ち、何発か外す。

同時にコンテナからマイクロミサイルと大型ミサイルを射出、絶対に避けられない弾幕を張った。

そしてその弾幕はほとんどが銀の福音に直撃。痛手を負わせた。

だが銀の福音は戦意を失っておらず、3号機に凄まじい数のビームで反撃しようとする。

だがそれはデンドロビウムには無意味である。

IFフィールド・ジェネレーターを既に起動しており、銀の福音の放ったビームは完全に無力化された。

これに驚いたのか動きが硬直し、その隙を逃さなかったコウは大型ビームサーベルをクロウ・アームから展開、銀の福音の翼を斬り落とし、同時にもう一つの大型ビームサーベルを展開し、銀の福音をおも

いきり空に打ち上げた。

そして大型メガ・ビーム砲の持つ手を取り出し機体と砲身を上にし、銀の福音を串刺しにした。

「零距离射撃!!・・・沈めえ!!」

大型メガ・ビーム砲から大出力のビームが放出され、銀の福音は破壊されたのだった。

しかしそれでも生きており銀の福音は最後の力を振り絞り、自身の翼から極大の質量を持ったビームを放ち、デンドロビウムに直撃を食らわした。

「クツ・・・まだこんな力が！ハロ!!イーフィールドは持つか!?!」

「マダ持ツ!!マダ持ツ!!」

「そうか・・・なら!!」

いまだ生にしがみつくと銀の福音に再び、大出力のメガ・ビームを撃ち、ISコアすら残さず完全に消滅させたのだった。



## 25話

「銀の福音破壊完了。これより帰還します」

『了解した。今から回収する』

銀の福音を破壊成功したのは良かったがデンドロビウムが到着前に、一夏が負傷する事態になった。もう少し早めに来ていれば負傷することはなかっただろう。

(そういえば箒の奴、ISが変わっていたな・・・アイツの専用機が作られたのか？それにしても高性能なISだったな・・・。あ、箒に一夏が負傷した理由聞くの忘れてた・・・)

そんなことを考えていると、3号機を回収するためのド・ダイが目の前に現れた。それに乗り移りそのままAE社に帰還したのだった。

だがそれを見ていた人間がいた。それはクロエ・クロニクルである。

彼女は束の元で忠義を尽くし共にいるが、その束から一夏と箒の戦いぶりをビデオに納めるよう指示された。しかし肝心の一夏は負傷してしまいビデオの録画を消そうとする。しかしデンドロビウムの登場でビデオの録画は

続行され戦闘終了後、束に送られたのだった。

だがそれは後にガンダムを巡り世界を巻き込む出来事が起きるのは誰も知らない。

### 臨海学校最終日

3号機の最終テストが終わり、現在の臨海学校の旅館にいるコウは何故か千冬による短い尋問を受けていた。

「ウラキ・・・お前はあの時居たそうだな。しかも新型のISで派手に

登場・・・箒から証言が出ている。」

「何の事を言っているのかさっぱりですが・・・？」

「ほう・・・」

その表情は納得を得ていなかった。

「実はあの日、軍事ISが暴走したまたま近くにいた専用機達が駆り出され一夏と箒が戦っている最中、通信系にハッキングを受けてな・・・なぜだか分かるか？」

「・・・」

「まあいい・・・知らないならそれでも構わんさ」

これ以上尋問は無意味だと思った千冬は部屋を出ていった。

「・・・はあくなんて圧なんだ？」

「コワイ！コワイ！」

「ああ、そうだな・・・え？」

下を見るとハロがコウの足元をぐるぐると周回していた。そしてハロの口から紙が吐き出された。

それは「持っていけ」という文章だけであり、名前は書かれていなかった。

しかしコウは誰が書いたのかは文字の書き方を見て分かったので、思わずニヤついてしまった。

襖が開きコウは顔をそちらに向けると、そこに立っていたのは包帯ぐるぐる巻きの一夏であった。

「その怪我、銀の福音に出来た怪我か？」

「その時、密漁船を見つけて咄嗟に守ってこうなりました・・・」

「そうか・・・」

「んで死にかけて俺が最後に見たのは、試作3号機・・・アレ、コウさんですよね？」

「織斑先生には話してはいないがな」

「・・・そうですか」

「一夏に聞きたい事がある・・・箒の奴、いつ専用機に乗り換えたんだ？」

「えっと確か・・・丁度銀の福音が暴走したその日です。それに箒の専

用機を作ったのは束さんです」

「束さん？ 篠ノ之束の事か？」

「・・・そうっすね」

コウは、束が銀の福音を裏で暴走させ、一夏と箒を利用したとそう解釈したのだ。

しかも、束が箒の為に作った専用機は一夏の白式と相性がいいと本人が言っていたらしい。

暴走を止めるために一夏と箒を出したのだが、一夏が言うには、箒が専用機を貰ったせいaka自身の力を過信しすぎてしまったらしい。

そのせいで一夏は負傷、撤退する羽目になったがそこにコウの3号機が到着し破壊。

この事件で箒は自身の行為で一夏が負傷したのを猛反省。目が覚めると、泣きながら謝ったそうだ。

一度ならず二度邪魔された束はガンダムに対する憎悪が増しているのではないかとコウは内心ビクビクしていた。そして後ろに気配を感じた

「えへへ〜かわいいなあ。それそれえ〜」

「ウアアアアア〜！ ヤメロ〜！」

「束さん!？」

後ろに振り向くとハロをベタベタ触りまくる女がいた。

「いっくん、怪我大丈夫だった？ まあピンピンしてるから大丈夫だろうけど。最近の若者は元気でよろしい！」

一夏に話しかけ上機嫌な束であったが、コウは彼女とは初対面であり、何をされるか分からないのでとても警戒していた。最悪殺される可能性も含めて。

警戒するコウに束は近づき耳元で囁いた。

（私は寛大だから今回も許すけど、次も邪魔したらお前を殺すから）

コウから離れ手を上げた。

「まあなにとまあれ元気そうだしこれにて・・・ドロンツ！」

部屋は煙に包まれ、2人とハロだけ部屋に残されたのだった。

## 26話 前編

「私明日から引越す事になりました」

二学期に入って早々の事であった。いきなり楯無はこの部屋を引越すと言ったのだ。つまりコウ一人の部屋になるのだ。

「いきなりだな・・・どこに引越すんだ？」

「んーと、一夏君の部屋かな？」

「そうか。引越し早々あの時と様に変な事はするんじゃないぞ。したら・・・分かってるな？」

「(ギクツ!) だ、大丈夫よ! そ、そんなことしないわよ!」

またするつもりだったんだなと思いつつも口にはなかつたコウだった。

「それで? なんで一夏の所に引越すんだ? それが気になるんだが・・・」

「トレーズの叔父様からのお願いがあったのよ。一夏君を護衛してくれって」

「護衛?」

「彼等が動き出す頃合いだと言っていたわ。まあ、彼等というのは私も知ってるんだけどね・・・」

「・・・それって亡国機業の事だろ?」

「知ってたの!？」

コウは頷きながら手に持っていたコーヒーを飲んだ。

「知ってるも何も、社長が教えてくれたんだ。それを知ってる人間は限られているけど」

ちなみにそれをAE社で知っているのはウラキ、マドカ、トレーズのみである。

「知ってるなら良いけど・・・それより! 二学期に大イベントがあるのを忘れてはいないわよね?」

そう言われコウの表情は一変した。その表情は嫌いなニンジンを見たときの表情であった。

「いやあく生徒会の仕事が忙しくて忘れていたなあ。ア、ハハハハ……はあ……お願いします手伝って下さい」  
手に持っていたものを置き、まるで神に祈る様に楯無にすがったコウであった。

教室にて学園祭での出し物を何にするか色々話し合っていた。

現在出ている案は、織斑一夏とツイストやポツキーゲーム、ホストクラブ等、一夏の大人気ぶりがよく分かるものであった。

進行役の一夏本人は嫌がり拒絶、出ている全ての案を却下し、案を出した彼女達は反感し暴走した。

肝心の千冬は『時間掛かりそうだから、あとで報告しに来い』と言って教室を後にし、山田に全て任せたのであった。

そして生徒会会長であるコウは目が虚ろになっており、始まってから一言も喋っていないおらず、役に立たっていないかった。原因は多々ある書類との対決をしていたからである。

それを見かねた同クラスで生徒会書記の布仏本音は服の中に隠し持った「ニンジン」を目の虚ろなコウの目の前に見せた。

「おいウラツキー。早く起きないと食わせるぞ」

「食わ……せる……？や、やめろ……」

「だったらちやんとクラスの皆に説明しないと収まりがつかないよコレ？ホラホラ早くする」

脅しが効いたのか目の虚ろさ消え、いつものコウに戻ったのであった。

「……ということがあり1組は喫茶店を出すことにしました」

「ええと・・・ただの喫茶店ではなく執事& a m p ;メイド・・・簡単に言えばコスプレ喫茶みたいなものです・・・」

一夏とコウは出す物が決まり千冬に報告をしていた。

「ほう、それはまた無難なものを選んだな？それで、誰が立案したんだ？まああの辺の騒ぎたい連中が出したんだろうがなあ・・・？」

ニヤケ顔で言っているが一夏の答えで消し飛んだ。

「ら、ラウラです・・・」

一夏はそう答えると千冬はニヤケ顔は消え意外そうな顔をし、壮大に吹き出した。それはコウが学園で初めて見た顔であった。

「クハハハ!!あいつがメイド喫茶を立案？ハハハハツ!!よくもまあ、そこまで変わったものだな」

「その時クラス全員驚いていましたからね・・・」

「そうだろうな。ボーデヴィツヒがメイド喫茶を立案するのは誰も想像していなかった事だ。では1組は喫茶店で決定でいいな？」

2人は頷き、職員室を出た。

職員室を出るとそこに楯無が待っていた。

「ウラキ君ちよつと来てくれるかな？」

一夏と別れ、楯無に着いていくとそこは生徒会室だった。

「なあ楯無、なんで生徒会室に連れて来たんだ？」

「大切な話があるに決まっていますよ?・・・学園祭当日、彼等が来るわ」

「・・・本当か？」

「ええ、嚴重に警備をしたとしても簡単に潜り抜けるでしょうね。そして目的は一夏君と貴方のIS。本命は一夏君だろうけど、貴方もターゲットの一人・・・」

「へえ〜」

「へえ〜って・・・!貴方は強いだろうけど彼等も相当強いわよ!?!どんな手を使ってでも奪い取る連中なんだから!!」

「だからといって負けないさ。なぜなら俺はガ・・・いや、学園最強だ

「からな」

「呆れた… 天狗にも程があるわ…」

呆れた表現で楯無は部屋を出ていったのだった。

## 27話 後編

学園祭当日

執事&amp;mp;メイド喫茶で一人だけ浮いている人物がいた。それは黒いサングラスをかけたコウであった。

コウが着けているサングラスはただのサングラスでは無く、AE社から送られた超高性能の機能を持った機械である。

大繁盛の中、コウは一人だけ気になる女性を見つけた。

なにやら一夏と話しているが、話されている本人は困った表情を浮かべている。

コウは遠い所にいるのでサングラスに搭載されている盗聴機能使い、何を話しているのかを聴いた。

『・・・是非我が社の装備を使っていただきたいかなと思ひまして』

『は、はぁ・・・』

(装備・・・?白式の事か?)

『・・・そして彼方の方も同様なのですが・・・どうでしょうか?』

『そ、それは・・・』

一夏は戸惑っているが、この会話でコウは警戒した。

(狙っているな・・・俺達を)

一夏の場合は別だが、コウの乗るガンダムの装備はAE社だけしか作れることは出来ず、装備の素材も全然違うのだ。

作られたとしても、他社の物を絶対に使わないのがAE社の方針でもあるからだ。

コウの視線に気が付いたのか、一夏は一言謝りその場を後にした。だが盗聴はまだ続けられていた。

『・・・チッ』

コウは警戒から確信を得た。彼女は亡国機業の構成員だと。



第四アリーナにて、一夏は王子の服を着てステージの上に立っていた。

会長であるコウだけがこの先何が起きるか分かっていた。

「コウさん……一体何が始まるんですか？」

「……無事を祈る」

「え？ちよ、どういう……」

一夏の言葉は遮られるように楯無のアナウンスが入った。

シンデレラとか言っているが今からすることはそんなものではない。

一夏の同室する権利を奪い合うものであった。奪われる本人はそのような事は伝わっていないが。

学園祭前日、会長のコウは勿論これを認めなかったが楯無の押しが勝り仕方無く認めたのが主な原因である。

そして偽シンデレラが開幕し一夏に惚れている5名のシンデレラが彼の王冠を奪おうと血眼になって武力を持って襲いかかってきた。

「「それを寄越せえ！一夏あ!!」」

「う、うおおおお!!」

逃げる一夏。しかし楯無は容赦なく更なる増援を追加した。それはフリーで参加できるというものであり、つまり全生徒であった。

一夏はそれに巻き込まれてしまい、姿を見失ってしまった。

だがこれはコウにとっては都合がよかった。あの服にはGPSを付けていてどこに行つたのかを探す物である。

そしてGPSが指し示した場所は第四アリーナの更衣室。すぐさまISSを装着し急いで向かったのであった。

---

あの場所から落ちた先にいたのは喫茶店にいたセールスマンの巻

紙礼子であった。しかしその表情は恐ろしく感じさせた。

「・・・どうして礼子さんがここに？」

「この機会に貴方の白式を頂きたいと思ひまして・・・」

「白式を・・・頂く？」

この時一夏は思考の海に飲まれてしまい動きが固まってしまった。それに苛ついたのか礼子は本性を表した。

「いいーからそれを渡せって言ってるんだよポケェ!!」

喫茶店に居たときの穏やかな口調は乱暴なものに変わりその口調とギャップに驚いた一夏だが、すぐさま白式を装着、攻撃を避けた。対する敵はクモのような全身装甲のISに変わっていった。

「つぶねえー！一体何のつもりだよアンタ！てかなんだよそのクモみたいなIS・・・気持ち悪！」

一夏の言葉が効いたのか礼子から血管が切れる音がした。

「・・・ぶっ殺す!!」

だがその言葉との同時に轟音が響き渡り礼子・・・オータムは吹き飛ばされてしまった。

「ああ!?このシステムは全ロックしてたんだぞ!?なんで分かったんだ!?!」

「教える義理はない」

「そうかいそうかい・・・なら死ねよ!」

オータムはIS「アラクネ」の脚からエネルギー弾を連発し狭い室内ながら厚い弾幕を張ろうとする。

しかし1号機はリミッターを解除しオータムの足以外アラクネの脚を全て斬り捨て、再びリミッターをかけた。

「はやっ・・・!」

オータムの言葉は続く事無く、その顔面にガンダムの拳がめり込んだ。

「ガッ!!テツ・・・ テメエ・・・ガハッ!!」

次は腹に拳を一発入れ、オータムはその痛みに耐えきれず地面にへたり込んだ。

しかし1号機はそんなことはお構い無しにオータムの顎を蹴り上

げ、その勢いで体は浮き上がりオータムの足を掴みおもしろい外に投げ捨てた。

「これ以上の追撃は無理だな・・・大丈夫か？」

「ア、ハイ、大丈夫です・・・」

コウの容赦ない攻撃を見て唾然とした一夏であった。

だからといって、狭い室内の中でブンブンとビームサーベルを振り回したら、更衣室がとんでもないことになるため、拳でやるしかなかったのだ。

そんな中、A E社からコウに通信が入った。

『コウ、大変だ！ガンダム2号機と4号機が強奪された！』

2号機と4号機が強奪されたという報告を受けたコウはFbに換装し急いでAE社に向かった。

到着するとそこで見たのは火と黒煙が本社や格納庫に燃え盛り、それを必死に火を消そうとする作業員達や怪我人の救助など行われていた。

(何処だ? 何処にいる?)

Fbを換装し地に足を着けたその時、3号機が目の前にいた。

「コッチ! コッチ!」

「ハロか!? 何で3号機の姿に・・・?」

「オレガ操縦! オレガ操縦!」

これはハロに新機能として3号機ステイメンの操縦機能を持たせているからである。

そしてハロに案内をしてもらおうとそこで見たのは、全身血まみれで横に伏しているトレーズと顔に擦り傷や煤が目立つコウスケであった。

「父さん・・・社長は・・・?」

コウの声に反応したのか、トレーズはムクリと起き上がり胡座をかいた。

「見て驚いただろう? だがこれは『返り血』だよ。私の血ではないから安心したまえ」

「安心できないのがありますけどね」

トレーズはそう言われると返り血が付着した上着を脱ぎながら言った。

「コウスケが通信で送ったとおり、ガンダム試作2号機と4号機が亡国機業により強奪された・・・どこからか情報が漏れたのだろうね・・・そして同時にIS学園にも襲撃。織斑一夏の白式に用があったのだろう。コウ、あの『サンングラス』は持っているかい?」

「これですか?」

コウが学園祭で身に付けていたサングラスをトレーズに渡すとそれを装着し、データを見ながら呟いた。

「ほう、懐かしい顔ではないか。変わらないなオータム・・・」

「オータム・・・？学園祭を襲撃してきた亡国機業の構成員ですか？」

「そうだね。短気で凶暴としか言い様がない女だよ」

そう言いながらサングラスを外し、立ち上がった。

「敵は亡国機業以外にも居るかもしれないな」

「亡国機業以外にもですか？」

コウの言葉にトレーズは頷いた。

「私は・・・亡国機業の全員の顔、名前を覚えている。なぜなら彼等とは何度も裏で衝突したことがあるからね」

トレーズは懐からタブレットを出し、モニターを見せた。

それはA E社の格納庫の監視カメラの映像であった。

そこに写し出されていたのは、長身で豊かな金髪を持ち、抜群な美貌を誇る女と長身で白髪のポニーテールが目立つ男が写し出されていた。そして女は4号機を奪い、男は2号機を奪った。そこで監視カメラの映像は途切れた。

「彼女はスコール・ミューゼル・・・なのだが隣の男は誰なのかが分からない。なにせ彼処は女性しかいないのだからね」

そう言うトレーズ、しかしコウだけは違った。

なぜなら2号機を奪った男の顔は「奴」と瓜二つだったからだ。

(なぜだ？・・・なぜそこにいるんだ・・・ガトー!?)

## 29話

学園祭は亡国機業により大きな傷痕を残したものの、最終日には、大きな盛り上がりを見せた。

開店前、喫茶店でレジ係を担ることになったコウはあの監視カメラの映像から頭が離れずにいた。

ガトーと瓜二つの人物はガンダム試作2号機を強奪し、姿を消した。

もしコウがそこにいればトリントン基地と同様2号機と4号機を取り戻す為に行動していただろう。

そんなしなめつ面をしていたコウに顔に包帯を巻きハロを携えたコウスケが訪れてきた。

「昨日のせいでコイツを渡すのが出来なかった。受け取ってくれ」

コウスケからハロを受け取り、今日も大忙しだなあと言いながら学園を後にした。

受け取るのはいいがハロをどうしようかと悩んでいたコウ。

それを考えていると、目の前に何故かメイド服を着た千冬がいた。

それを見たコウは、そのメイド服とギャップに思わず吹き出してしまいそうになりかけたが、ギリギリの所で耐え、何故そこに居るのかを聞いた。

「何故って?・・・一夏に頼まれたからだ。しかもこの服を着る事になるとは・・・私はそういう歳ではないのだがな」

(弟の頼みだから嬉しいクセだろうに:..)

「ほう?私が一夏の頼みでメイド服を着て嬉しそうに見えるか?ウラキ、また変なことを考えたら冥土に送ってやるぞ」

「別に変なことは考えていませんよ。本当ですって!」

「・・・まあいい。そんなことよりそれはなんだ?あの男から貰っていたが不審物ではないよな?」

「不審物じゃない!不審物じゃない!」

ハロはコウの手元から離れ千冬の周囲をピョンピョンと跳ね回り

ながら「不審物ジャナイ！」と同じ事を言い続けた。

「はあ……分かったからこれ以上私の回りを跳ね回るのはやめてくれ。私が悪かった」

ハロに根負けした千冬は、ハロは不審物ではないことを認めたのだった。

オータムは夢を見ていた。

それは地平線すらなく、とても暗かった。しかし辺りを見渡せば見慣れない機体の残骸が浮いていた。

さらに後ろを振り向けばそこに「巨大な物体」が地球に墜ちていくのが確認できた。

「宇宙」だと理解したオータムは外装を大幅に換えた機体「ガラベラ・テトラ」でこの場から離れようとする。

だが「ソイツ」は現れた。

所々、破損しているが巨大な銃身を持ち、しかもその巨体に似合わず速く宇宙を駆けていた。さらに真ん中にはオータムにとって忌々しいあの「白い奴」がいた。

激情したオータムはビームマシンガンを上から下に移動するように連射し、ビームを直撃させた。だがそれはいけなかった。

白い奴……いやデンドロビウムは機体ごと上に向け、銃身でガラベラ・テトラを串刺しにし、メガ・ビーム砲を撃ったのだった。

暗闇に包まれた室内で目が覚めたオータムは、修復の終わっていない

不完全なアラクネを使い、雄叫び上げながら回りの物を破壊していった。

「クソクソクソツッ！クソツタレエ!!」

室内で暴れ回るオータム。しかしそこに一人の男が現れた。

「・・・荒れているな」

「ああ!?誰だテメエ!!」

「同盟を組んだにも関わらず顔を覚えていないとは・・・仕方ない。所詮貴様達とは価値観が違うのだからな」

「同盟と価値観」その言葉が気に入らなかったオータムは己の感情で男を殺そうとする。

「・・・甘い!!」

男はIS・・・ではなくガンダム試作2号機を装着し足蹴をかまし、オータムはその衝撃で壁に激突、気絶した。

「暫くはそこで頭を冷やすといい」

男は2号機を外し部屋を出た。そして目の前にいたのは完全にキレているスコールだった。しかし男はそんな彼女を無視しその場から去った。

「・・・っ!!ただで済むと思わない事ね・・・」

アナベル・ガトー・・・!」

あのソロモンの悪夢と同じ名を持つ男と幻の撃墜王の異名を持つ男の邂逅はもう近い・・・



### 30話

学園祭の熱は燃え尽き今まで通りの学園生活が始まった。しかしまだ行事は続く。

「専用機限定タッグマッチ？」

「そう、その通り！専用機だけの2人1組の模擬戦を開催するのよ！」

「へえ〜」

「へえ〜、ってあなたねえ！」

生徒会室で生徒会主催の専用機限定タッグマッチを開催の話があった。

「2人1組模擬戦のといっても、俺だけ1人1組だろ？」

「どういう言葉を掛ければ良いか悩んだ楯無だったがこれに関してはハツキリ言うしかなかった。」

「・・・貴方は異常に強すぎるのよ。私が駆けつける前にテロリストを1人で倒すんだから」

楯無が駆けつけた時、そこで見たのはガンダムが蜘蛛をボコボコにしている最中で、楯無はどこで出るか迷ったぐらいなのだ。

「でもまあ俺1人だけでも丁度いいハンデだしな」

その言葉にもう呆れるしかなかった楯無であった。

タッグマッチ戦翌日

コウだけは1人1組という異例なものだった。ちなみに今回使うガンダムは試作3号機である。

そしてコウの第1回戦の対戦相手はセシリアと鈴であった。

「そういえばセシリア。ウラキにボコボコにされたって本当なの？」

「・・・ええ、思い出すだけでも嫌なものですわ。ですがこちらは数で勝っているのです。油断は絶対にしませんわ」

「と言いつつも私達山田先生1人にやられたからね・・・」

苦い顔をする鈴とその事を思い出したセシリアだった。そして試合開始のブザーは鳴り響いた。

先に動いたのはブルーティアーズを駆るセシリア。

上空でスターライトMkⅢを3号機に向け狙撃。同時にブルーティアーズをフルに稼働するという技を見せた。

その勢いで甲龍を駆る鈴は双天牙月を投擲し、龍咆を撃った。

「遠距離で戦うつもりか？だが・・・」

試作3号機が展開したのは大型メガ・ビーム砲。もちろん威力は低威力に調整されているが、直撃すればシールドエネルギーは半分消える代物である。

3号機は遠慮なくメガ・ビーム砲を撃ち2人が放った物は消滅した。

更に追撃としてミサイルコンテナを展開。マイクロミサイルと大型ミサイルという初見殺しの弾幕を作り上げた。

2人はミサイルの嵐に飲まれシールドエネルギーをガリガリと減らしていった。

そしてその弾幕からフォールディングバズーカの弾が追加として飛んできて外れた弾は地面に着弾し土煙を作るため鬱陶しいものではない。

「ああーもうー！どこのよ!!」

弾幕と土煙に鬱陶しいと感じ頭に血が上った鈴は下手に身動きがとれずにいた。

「セシリアー！あんたの方はどうなの!?!・・・セシリアー！聞こえてる!?!」  
しかしよく見るとブルーティアーズの反応は後ろを示していた。  
後ろを振り返った鈴。しかしそれはブルーティアーズではなかった。

「悪いなー！これで終わりにさせてもらおう！」

そこにいたのは3号機であり、ビームサーベルを振りかざしていた所だった。

「クッ！」

ギリギリ双天牙月で防いだが3号機の足蹴が鈴の脇腹に入り痛み

を耐えようとするがガード態勢は崩れ、ビームサーベルのラツシユによりシールドエネルギーは切れ、絶対防御が発動。

『試合終了。勝者、コウ・ウラキ』

### 31話

アリーナ会場は啞然としていた。

ミサイルの嵐と土煙の中で何が起こったのか理解する事が出来なかったからだ。

何が起こったのか説明をするならこんな感じである。

まずミサイルコンテナから放たれた弾幕の一部は地面にに着弾し、土煙を引き起こした。

そしてコウは上空にいるセシリアに背後から近づき叩き落とした。この時、セシリアのレーダーは甲龍を示していたからだ。

しかしそれは甲龍ではなく3号機だったのだ。

何故反応は甲龍になっていたのか？それは3号機の本体であるハ口が活躍していたからだ。

ハ口は火器管制システムの役割を持っている他、偽装伝達装置やステルス等々、電子通信の妨害系といった役割を持っているので煙幕や狭い場所や2対1といった数の戦いでも役に立つのである。

それを知らないセシリアと鈴は、ハ口の偽装伝達により踊らされていたのだった。

そしてその2人かというと、二度とウラキとは戦いたくないと怯えながら言ったそうさ。

コウは第2回戦に備え休憩をとっていたコウ。次の対戦相手はシャルルとラウラであった。

これはコウにとって厄介なチームで、もしラウラのAICに捕まればシャルルのパイルバンカーがコウのシールドエネルギーを食い破るだろう。

だから今回は1回戦と同じような戦い方はするがその中にアレンジを加えるといった感じで戦うのだ。

「そろそろ試合が始まるか・・・」

コウは控え室から出ていきハロと共にアリーナに向かっていったのであった。

それを後ろで観察していた男女に見られているのに気付かずに：

アリーナにてコウが出てくるまで待っていたシャルルとラウラはちよつとした対策を練っていた。

「さっきのウラキさんの戦い方を見ると隙がまったくない・・・どうしよう・・・」

「そうだな。恐らく私がA I Cを初手で発動するのはウラキ中尉も分かっているだろうな」

「うん・・・ん？そのウラキ中尉って呼び方はどうしたの？」

「あ、いや、もしあの人軍人だったら中尉ってイメージが浮き上がったきたんだ」

「そ、そうなんだ・・・。あ、来た！」

シャルルの声と共にアリーナの発進口から3号機が出て来た。

そして試合開始のブザーが鳴り響いた。

初手を取ったのは3号機。まずミサイルコンテナからマイクロミサイルや大型ミサイルが放ち、同時にフォールディングバズーカを連続で撃った。

(動きが止まった・・・！)

ラウラはミサイルの嵐に被弾しながらもある程度近づき、A I Cを発動させ3号機の動きを止めた。

「クッ！機体が動かない・・・！?ハロ！A I Cの解除間に合うか!？」

「ギリギリ！ギリギリ！」

そしてラウラと同様に被弾していたが一気に勝負をつける為にパイルバンカーを出した。

「これで決める・・・!!」

ハロの解除が間に合うかそれともパイルバンカーが3号機を貫くか、どちらが速いのか。

速かったのは・・・どちらも同じであった。

解除は間に合ったがパイルバンカーは3号機の腹を貫こうとしていたが盾がそれを受け止めその衝撃で3号機の盾は使えなくなった。

「シ、シールドが・・・!」

そしてシャルルの背後からラウラが追撃するようにプラズマ手刀を展開し3号機に斬りかかるが、3号機の携帯武装のビームライフルからビームジユツテを展開させた。

そしてラウラにサマーソルトを食らわせ、さらに追撃として大型ビームサーベルを展開しラウラをおもいつき右側に斬り飛ばした。

そのラウラはアリーナの壁に激突。行動不能となった。残ったのはシャルルだけとなった。

右に斬り飛ばしたせいか大型ビームサーベルはその勢いで3号機の手から離れ回転。大型ビームサーベルの超広範囲の回転斬りが誕生した。

その回転斬りを避けながら近づくシャルル。しかし回転していた大型ビームサーベルは消え、同時に3号機の姿も見失った。

3号機の反応は上空を示していた。

最後にシャルルが見たのは3号機が大型メガビーム砲を構え大質量のビームを放っている所だった。

『試合終了。勝者、コウ・ウラキ』

## 32話

他チームが試合をしている中、コウはある2人組に注目をした。

それは一夏と楯無の妹の簪が圧倒している所であり、しかもその相手はマドカと本音で連携が取れているのにも関わらず、やはり一夏と簪が圧倒しているのだ。

だが第3回戦の試合がもうすぐの為その試合は最後まで見ることは出来なかった。その3回戦の相手は楯無と箒である。

(もしかしたら決勝戦はあの2人と戦う事になるかもな)

試合を最後まで見る事は叶わなかったがそう思ったコウだった。

3回戦の相手、楯無はのんびりとしており箒はどうすればいいか悩んでいた。

「さてさてどうやって戦おうかしら・・・」

「練っていないかったですか!？」

「練るものにも彼にはそんなものは通用しないわよ。彼は2試合しているけど規格外なのよね・・・まだ彼には『切り札』が残っている感じがしてね」

(まあ・・・その前に勝負を決めれば勝ちは同然ね)

そう考えていた楯無を尻目にアリーナの発進口から3号機が出てきた。

「来たわね・・・。リベンジさせてもらおうよ!」

楯無の声と共に試合開始のブザーが鳴り響いた。

戦況ではコウの方が少し分が悪い。なぜなら第四世代IS紅椿を駆る箒の存在があったからだ。

たとえコウの腕が箒より勝っていても機体性能が勝っていないことが現状である。

ならここで『切り札』を使うか? いや取っておくべきだろう。

ここで使ってしまったえば勝った後の対戦相手が一夏と簪なのだ。しかも試合開始時間は多くあるため対策を練られたら戦いづらいのである。

だから今回はハロに頼る戦い方になるだろう。

「頼むぞハロ……！お前が頼みの綱だからな」

「任せろ！任せろ！」

コウはミサイルコンテナを展開し弾幕を張り、更にバズーカでアリーナの地面に向けて撃ち土煙を引き起こした。

(1回戦と同じ戦い方……でも……)

「……この事は忘れていないのかしら？」

箒を土煙に包まれた場所から避難させ、楯無がいた場所は水蒸気爆発が起こり辺り一面を粉々にした。

しかしそこに粉々になる筈の3号機はいなかった。

楯無は3号機がどこにいるか探すとすぐに目視で確認できた。

箒の上空のさらに上に大型ビームサーベルを箒に向け振りかざす3号機がいたのだ。

コウは楯無がナノマシンで水蒸気爆発をするのを予測していたため瞬時加速を使い箒の上を取ったのだ。

「貰ったあ!!」

「……！」

大振りで振りかざした為難なく防がれたがコウはダメ押しの大形ビームサーベルを展開、さらに瞬時加速を発動させた。

下から楯無が迫ってきているがそんな事はコウには関係なかった。

「うああああああ!!」

コウの雄叫びと共に落下していく箒。大型ビームサーベルは紅椿のシールドエネルギーをガリガリと削っていった。しかしそれを黙って食らう箒ではない。

箒は紅椿の両肩の展開装甲をクロスボウ状に変形させ2門のブラスターライフルを3号機に向け発射した。

ライフルは3号機の両肩に直撃。3号機のシールドエネルギーが減った瞬間であった。



「当たった…!?」

この時の筈は無我夢中だったのでまさか当たるとは思ってもいなかった。

そして3号機は横から楯無の蛇腹剣が当たり吹き飛んだ。しかし吹き飛んだ際、3号機は手首に巻いた“ヒモ”を引っ張った。

そしてそのヒモは楯無と筈を吸い寄せ2人のIS同士が衝突した。

「ハロ！今だ！」

「起爆！起爆！」

ヒモ・・・爆導索は緑色に光り爆発した。その爆発に巻き込まれた2人は絶対防御が発動したため敗北が決定した。

『試合終了。勝者、コウ・ウラキ』

### 33話

「ハロ・・・決勝戦までの時間は？」

「アト10分！アト10分！」

楯無&amp;mp;箒ペアの試合を制したコウ。決勝戦に赴くべく椅子から立ち上がろうとする。

しかし急激なめまいに襲われ立ち上がる事が出来ず、椅子から滑り落ちた。

コウは袖を捲りポケットから栄養剤を取り出し腕に自ら注射した。

「はあ・・・はあ・・・見られてないよな・・・？」

「大丈夫か？大丈夫か？」

今はハロとコウだけだが、もし他の人間に見られたらたまつたもんではない。

ハロはコウに簡易バイタルを行い身体と健康の結果をモニターに出した。

結果は・・・「シバラク休メ」と出た。

「そうだな・・・試合が終わったらそうさせてもらうさ」

めまいは引いたが体力の限界に近いコウ。

決勝戦の為に残して置いた「切り札」を使う時が来た。

#### 決勝戦

アリーナの観客が見守る中、一夏と簪の間に微妙な空気が流れていた。原因は一夏が決勝前に今回ペアとして組んだ理由を話したからだ。

だがその空気を讀まない物がアリーナの発進口から現れた。

4基のブースターから放出された荷電粒子の残光は妖精の飛翔を感じさせ、槍（メガ・ビーム砲）と盾（Iフィールド）を構えは中世の騎士の様に思わせた。

それを見たアリーナの観客の中には口を大きく開く者や、その残光や姿に見惚れた者もいた。

(G P O 3 & a m p ; ウエポンシステム・・・デンドロビウムからの分離機動形態・・・)

コウがウエポンシステムを使うのはこれが初めてである。

しかもA E社からこのウエポンシステムが存在すると聞かされたのはタツグマツチ前日の事であった。

(コイツの推進方式はミノフスキー粒子を媒体にしたイオン・ドライブか・・・。でもステイメンの出力だとイオン・ドライブとIフィールドの同時稼働は出来ない・・・。それが悟られたら劣勢になるだろうな・・・)

ウエポンシステムの弱点はステイメンの2,000kwの出力ではイオン・ドライブとIフィールドの同時稼働が不可能・悟られたら劣勢になることが唯一の弱点だということである。

アリーナの地面に着地し10秒経過すると試合開始のブザーが鳴り響いた。

先手はコウのウエポンシステムである。

同時稼働出来ないと悟られたら不利な状況に陥るのは目に見えているので長期戦は避け短期戦で挑まなければならない。

コウは低出力のメガ・ビーム砲を2人の間に撃ち分断させマイクロミサイルを発射し弾幕を作った。

しかしそれに対抗するように打鉄式式を駆る簪は「山嵐」を展開し、独立稼働型誘導ミサイルを撃った。

それによりマイクロミサイルと誘導ミサイルがぶつかり合い爆発が大きくなった。

その隙にウエポンシステムの背後に回った一夏は零落白夜を展開し斬ろうとする。しかしウエポンシステムにそんなものは通用しなかった。

白式が背後から近付いていることに気が付いたコウは機動力で機体ごと後ろに振り向きメガ・ビーム砲でバットの様に吹き飛ばした。

態勢を立て直そうとする白式を絶対防御が発動する位の威力をメガ・ビーム砲を放った。

「なんて機動力なんだ!?!速すぎ・・・!?!」

一夏は回避しようとするが間に合わずビーム砲の餌食になってしまった。

残るは簪だけである。

白式という火力を失った簪だが諦めることはしなかった。その頭をフルに回転しウエポンシステムの弱点を探った。

(そういえばあの時・・・)

マイクロミサイルと誘導ミサイルによる爆発の際、簪はどさくさに紛れ2門から連射型荷電粒子砲を放った時、ウエポンシステムに当てるもののIフィールドによる防御があったがその時、ウエポンシステムは動いておらず逆に落下していたのだ。

(もしかしてジェネレーターみたいなのとブースターの同時稼働が出来ていないの・・・?)

そう思った簪は移動しながら連射型荷電粒子を撃った。

高速移動しているウエポンシステムに当てようとするがやはりその時は動きが止まっていたのだ。

(もしかしたら勝てるかも・・・)

簪は確信を得るがそう問屋は卸さなかった。

コウはミサイルを全弾撃ち凄まじい弾幕を張った。これでは迂闊に近づけないと感じた簪。

「はあ・・・はあ・・・。クツ!!沈めええええ!!」

集中力がギリギリ途切れかけているコウはメガ・ビーム砲を簪に向けて撃った。

しかし当たるところか簪を掠め、アリーナの壁に当たった。

(不味い・・・集中力が・・・!)

ウエポンシステムの動きは一瞬だが硬直した。簪はそれを逃さず瞬時加速を使い急接近。

「はあああああ!!」

「っ!うあああああ!!」

簪は薙刀で3号機を突こうとする。対するコウは全開で横に避けるように動かしした。

だが薙刀は3号機に直撃し更に横に避けようとしたコウは運悪くIフィールドも引き裂かれてしまった。

コウは機動力を生かし後退するが上空から打鉄式式とは違う反応が現れた。

「こんなときにまた彼奴らか…!?」

この学園を襲うのは大抵ジオンか亡国機業だけである。

そしてソイツはアリーナの地に足をつけた。ザクと同じ一つ目ではあるが赤く塗装されており更にビーム・ナギナタを展開し、その刃を簪に向けた。

ソイツの名は…ゲルググ

### 34話

ゲルググが上空から登場したとき観客は慌てる事はなかった。何故ならもう慣れてきているからだ。

「また来たか」と思う程度になり逆に乱戦を歓迎する様になった。

（赤いゲルググ・・・「赤い彗星」シャア・アズナブルが搭乗した機体に似ている・・・）

そして連なる様にまた上空から2つの反応が現れた。

それは緑と青を基調としたカラーリングのゲルググと胴体が紫で四股はカーキのカラーリングのゲルググである。

しかもそれはコウにとつて因縁深い相手ばかりだった。

緑と青のゲルググは、ガトーが「ソロモンの悪夢」と言われたキツカケとなった機体であり、紫とカーキのゲルググは、シーマ・ガラハウの搭乗機でコウが重力下の1号機に乗りあえなく落とされてしまった相手である。

赤い彗星・ソロモンの悪夢・宇宙の蜚蜮というジオンのエースパイロットの勢揃いである。ただし機体だけで操縦はAIが行っているが。

（恐らくあの3機はリミッターがついていない・・・やるしかないか・・・！）

ウエポンシステムのリミッターを解除し、制限が掛かっていたイオン・ドライブの推進力が跳ね上がった。

頼みのフィールドは簪により破壊され残ったウエポンシステムの武装はメガ・ビーム砲・ビームライフル・バズーカのみとなっていた。

もちろんパーズをすればサーベル等は使えるが、無闇にパーズをすれば時間が掛かるためそこを狙われたら間違いなく死ぬだろう。

コウはイオン・ドライブのスピードを活かし3機のゲルググを翻弄した。

その最中、楯無から通信が入った。

『サポートするわ』

「楯無?」

『あの3機同時に撃破する方法はある。だから、アイツ、らをアリーナの中心に貴方が集めてちょうだい。そこで敵の動きを止めるから貴方の一撃で決めて』

「・・・分かった。アリーナの中心に集めればいいんだな?」

コウは楯無の言う通りにゲルググ3機をアリーナの中心に引き付けようと行動する。

まずシャゲルをアリーナの中央に誘き寄せるべく、ビームライフルでシャゲルの周囲を撃ち中央に引き寄せた。

そのウエポンシステムの背後からゲルM指揮が奇襲するも、後ろに振り向いた時にメガ・ビーム砲の串刺しになった。

「後ろから来るからこうなる!」

そしてゲルM指揮はメガ・ビーム砲により機体は消し飛んだ。

残ったのはシャゲルとガトゲルのみのなった。

ガトゲルは狙撃用ビームライフルを撃ちウエポンシステムに当てようとする。

(正確な狙撃・・・!当たればこっちがやられる!)

イオン・ドライブを活かしそのスピードでガトゲルに急接近し、後ろに下がったガトゲルはウエポンシステムを追いかけていたシャゲルにぶつかり転倒した。

楯無は「ミステリアス・レイディ」の単一使用能力を使いシャゲルとガトゲルは沈んだ空間に拘束された。

そしてウエポンシステムはメガ・ビーム砲を下に向け最大出力で発射した。

「沈めええええ!!」

空間に拘束された2機はメガ・ビーム砲を食らい消滅したのだった。

### 35話

バン!!

コウは自身の持つ拳銃で無抵抗のガトーを撃った。しかしガトーは力を振り絞りレバーを引いた。

そのレバーは地球に落とす為のものでありジオン残党の頭領、デラーズフリートの悲願が達成されるものだった。

『ガトー!?!しっかりして!』

ニナはガトーの元に近付き涙ながらにコウを見た。対するコウはニナに銃口を向けた。

『ニナ……!?!』

『止めてコウ!もう戦う理由はない筈よ!』

『退いてくれ!コイツが何をしたか知っているだろ!!』

『私は貴方達の対決を見届けなければならなかった……どちらか倒れるまで……。だからこうならないように祈っていたのにつ……。!』

『ニナ!俺への気持ちは嘘だったのか!?!言ってくれ!!』

『そ、そんな……。』

ニナは頑なにガトーから離れることはなかった。

ガトーはニナを吹き飛ばして立ち上がり、コウに撃たれた傷に耐えながらコウを一点に見続けた。対するコウは再びガトーの銃口を向け撃とうと構え、2人の間に長い沈黙が生まれた。

そしてそれを遮るように、ニナは自身の持つ拳銃をコウに向けた。

『コウ……。止めて』

『ニナ……!?!う、嘘だろ……。?分かっているのか!?!ソイツはコロニーやガンダム2号機を……。!!』

コウの言葉は遮られた。何故ならニナがコウに向け威嚇射撃をしたからだ。

『コウ……。そうゆうことじゃないのよ……。』

コウの表情は怒りに燃えていた。そしてニナはガトーを連れ、コロニーの制御室から出ようとする。



『二、二ナ・・・も、戻れ！来てくれえ！』

二ナは振り向こうとはせず制御室から出て扉にロックが掛かった。まるでコウを拒絶するかのようには。

『くうあああ・・・ あああああああ!!!』

## 保健室

「うあつ?!はあ・・・またあの夢か」

ベッドから飛び上がる様に起きたコウ。

決勝戦で乱入したゲルググ3機をすべて撃墜した後、段々と瞼が重くなり最終的には暗闇に包まれてしまった。コウが最後に見たのはそこまでであった。

(俺は何年この夢を見続けなければならないんだ・・・)

コウが見た夢は忌々しい位のものであり、落ち着いたかと思えばガンダム2号機を強奪され更にガトーの瓜二つの顔を見てから最近再び同じ夢を見る事になってしまった。はつきり言えばトラウマである。

このような夢を二度と見たくないと思ったコウはベッドから出ようとするがめまいが襲い体を動かす事ができなかった。

「・・・10分寝るか」

目を閉じようとするコウ。そこに楯無が入ってきた。

「起きてるわね?目を閉じたままでもいいから聞いてちょうだい」

「なんだ？」

「今年は京都で修学旅行をするのだけど、ちょうどそこは亡国機業の本拠地がある所なの。つまり亡国機業との直接対決よ」

「・・・そうか」

そう答えたコウ。しかし睡魔が襲いかかりコウの意識は飛んでしまったのだった。

対する楯無はそのスピードに驚いたそうなの。

ソロモンの悪夢と幻の撃墜王との決戦はもうすぐである

# IS 紹介? いいえガンダムと登場人物の紹介です。 その1ガンダム編

RX-78-2 ガンダム

搭乗者???

AE社の地下深くに保管されていたものであり、いつ・どこで作られたか不明の機体。

コウスケ曰く、数千年前、宇宙開発かガンダム同様の兵器と戦うのが目的で作られたのではないかと予想。

ガンダムを動かすにしても長年整備すらされておらず、地下深くから出すことは出来なかった。

そしてこのガンダムのコンセプトを引き継ぎ、「ガンダム開発計画」が立案され今も地下深くに保管されている。

ガンダム試作0号機 (ブロッサム)

搭乗者 コウ・ウラキ

ガンダムの「汎用多目的」MS、つまり「万能」として開発されていることが判明。

ガンダムの「万能」を再検討した結果、オプションによって機体の機能を特化させる「汎用多用途」というコンセプトを得て、更に本機は高機動化・人体と同じ動きを目指し最初が開発され完成した機体。

ちなみに開発途中で操縦系・サイズ・装甲はどうするのかと疑問が出たがガンダムの操縦系を引き継ぐ事になり、サイズはISより一回り大きめに調整され、装甲は超貴重なガンダリウム合金を採用し、ESも同様に調整され試作シリーズにも採用された。

待機形態は無し

武装・装備

長距離ビーム・ライフル

バルカン砲

ビーム・スプレーガン

ビーム・サーベル

M P I W S

劇中での活躍

白騎士事件発生時

その時偶然いた当時9歳のコウ・ウラキがガンダム試作0号機に搭乗。白騎士と共にミサイル迎撃に当たった。

しかしミサイルを全て撃墜した後、突然白騎士は0号機に攻撃を仕掛けるが相討ちとなった。

事件収束後、0号機は凍結。

ガンダムの異常な火力を開発者は危険視し、試作シリーズの全武装にリミッターを掛ける事になり、一部武装はガンダム試作1号機に渡った。

ガンダム試作1号機 (ゼフィランサス)

搭乗者 コウ・ウラキ

RX-78-2 ガンダムの純粋な発展型として開発された本機。性能はガンダムの3割近く向上したが環境適応能力が若干低下している。しかしそれは宇宙世紀の話である。

本機の大きな特徴は「換装装備」で、戦況に応じて換装が可能なので環境適応能力は向上した。

ちなみに原作ではAパーツ分離攻撃が可能だったがこの世界だと色々不味いためAパーツ分離攻撃は不可能となっている。

待機形態はゼフィランサスという花の形を模した指輪

武装・装備

ビーム・ライフル (ビーム・ジユツテ付き)

バルカン砲

ビーム・サーベル

長距離ビーム・ライフル (Fb時)

「チョバム・アーマー装備」

ありとあらゆるものに耐えうるものであるが重量があり素早く動く事が出来ないのが欠点。

「フルバーニア形態」

本来は宇宙専用ではあるが重力下でも換装出来る様になっている。更に本機は制限時間が「3分」と欠点だったが改善され、より戦闘の自由度が増えた。

#### 劇中での活躍

コウが織斑一夏に続く第2のIS男性操縦者としてIS学園で専用機で搭乗した機体であり、本当の目的は各国の専用機達が集うIS学園で戦闘データを得る事によりAE社独自の対IS武装・装備を開発する事である。

操縦技術が更に向上したコウと1号機の相性は抜群であり学園最強である楯無や亡国機業の構成員オータムを圧倒し、コウと1号機に異名がつけられる程であった。

#### ガンダム試作2号機 (サイサリス)

搭乗者 織斑一夏↓アナベル・ガトー

核攻撃を想定した物で強固な装甲と強力な火力を備えた「強襲・攻撃型MS」の機体。

MS同士による格闘戦を想定しており試作1号機より試作2号機の方が本命とされ、更に核攻撃を想定した本機は全ての装甲に耐熱・耐衝撃処理が施されている。

試作2号機の開発途中でアトミック・バズーカを作ろうとする開発者は存在していたが社長命令によりそれは廃止され、代わりにビームバズーカが装備された。

待機形態はサイサリスという花の形を模した指輪

#### 武装・装備

ビーム・サーベル×2

バルカン砲×2

ビームバズーカ

MLRS (マルチプルロケットランチャーシステム)

ラジエーターシールド

#### 劇中での活躍

当初は一夏が試作2号機に乗ることに決定が決まっていたが白式の登場により2号機の搭乗者は不在となった。

そして学園祭でテロが起こりそれと同時にアナベル・ガトーは試作2号機を強奪。

機体と共に行方不明となった。

ガンダム試作3号機 (デンドロビウム・ステイメン)

搭乗者 コウ・ウラキ

本来は宇宙空間の拠点防衛として開発されたが、重力下でも運用できるとなった機体。

ステイメンは問題なく重力下でも運用は出来るが、本命のデンドロビウムのオーキスが大きな問題となった。しかし開発者達の汗と涙の結晶の末、制限時間は一時間という欠点はどうにもできなかったものの完成した。

そしてデンドロビウム & amp; ステイメンの最大の特徴は「ウエポンシステム」の存在で簡単に言えば簡易デンドロビウムであり分離すればその姿は西洋の騎士を思わせ、4基のイオン・ドライブからは荷電粒子が放出され妖精の飛翔を思わせる形態である。

更にデンドロビウムの火器管制システムの補助役としてハロを付けた結果、待機形態がハロになってしまふ事件が発生したがハロ自体に悪意は無いため事なきを得た。

待機形態はハロ

武装・装備

(デンドロビウム形態)

メガ・ビーム砲

Iフィールドジェネレータ

クロー・アーム／大型ビーム・サーベル

ビーム・ライフル

フォールディング・シールド

武装コンテナ

・マイクロミサイル

・大型ミサイル

・爆導索

・ハイパー・バズーカ & amp; フォールディング・バズーカ

(ステイメン形態)

ビーム・サーベル／大型ビーム・サーベル

ビーム・ライフル／メガ・ビーム砲

フォールディング・シールド

武装コンテナ

・マイクロミサイル／大型ミサイル

・爆導索

・フォールディング・バズーカ

(ウエポンシステム形態)

ビーム・ライフル／メガ・ビーム砲

Ｉフィールドジェネレータ

フォールディング・バズーカ

マイクロミサイル×４

劇中での活躍

最終テスト日に銀の福音が暴走。それを好都合と思ったトレーズはコウにデンドロビウムで撃墜しよう命令し、デンドロビウムにより銀の福音はＩＳコアごと消滅した。

タッグマッチ編では武装不足を補う為にコウが独自にデンドロビウムの武装の一部をステイメンに移し更にウエポンシステムでコウとハロと共に戦うがゲルググの乱入により優勝は不明となった。

ガンダム試作４号機(ガーベラ)／ガーベラ・テトラ

搭乗者 オータム

計画初期の段階で格闘・白兵・突撃・強襲といった戦術に対応する機体が提案され開発が開始した。

試作１号機のコンセプトは一部重複しているが試作４号機は「白兵」戦を主眼に置いている。

そしてFb以上の機動力等向上させる為にシュツルム・ブースター3基が装備可能となっている。

待機形態はガーベラという花の形を模した指輪

武装・装備

ロング・レンジ・ライフル(ジユツテ付き)

ガーベラ専用ビーム・ライフル

ビーム・サーベル

ガーベラ専用シールド

劇中での活躍

試作3号機が最終テスト日に完成した機体。

本来なら試作4号機の搭乗はマドカになる予定だったが、ガトーと共に強奪したスコール・ミューゼルはアラクネが完全に修復出来ないオータムに譲り渡す際、スコールは試作4号機の外装を大幅に換えガンダムとは大きく離れたものとなった。



## IS 紹介? いいえガンダムと登場人物の紹介です。 その2 人物編

コウ・ウラキ

宇宙世紀0083年デラーズ紛争の「星の屑」作戦が完遂され、ガトールとの因縁に決着を着けるため一騎討ちの最中、バスクのソーラーシステムの光に飲まれたのが最後の光景であり、暗闇から目が覚めると赤ちやんスタートでオギャった人。

白騎士事件発生時、当時9歳にして高性能のガンダム試作0号機に搭乗し白騎士が落とし損ねたミサイルを全て落とした。落とした後、突然白騎士が攻撃をしてきて相討ち寸前になりかけたものの生還した。

10年後19歳になったコウはISの戦闘データを得るためにIS学園に転入。

そこで様々な出来事が起こるが、コウにとって大きな出来事はガトールがISの世界にいる事である。

(コウ本人はガトールが自分の存在を知っているのでは?と思っているがこの世界のガトールは別人だということとは知らない)

ちなみにISの世界に来て操縦技術に磨きが掛かったコウの強さは宇宙世紀で言うならオールドタイプ最強のヤザンを上回りIS世界なら千冬の上である。

さらに肉弾戦では原作のケリイ・レズナーの一発のパンチでやられる程に弱かったがIS世界に来てからは楯無と張り合える位の力を持っている。

アナベル・ガトール

連載当初、ガトールではなく「ソロモン」と違う名前を付けたかったけどやっぱりガトールでいいやとなったのは秘密。

宇宙世紀のガトールと顔が瓜二つではあるが、コウの名前は知っているその本人の顔だけが知らない状態である。

原作のガトールはガンダム試作2号機を強奪し「星の屑作戦」を決行。

地球の穀倉地域にコロニー落としを行った。

この世界のガトーも同様に2号機を強奪しその後何を仕出かすかは後々に判明する。

ちなみにガトーの強さはこの世界に来たコウと同等である。

コウスケ・ウラキ・ジュンコ・ウラキ

原作のコウは両親がコロニー落としで亡くなったが、ISの世界では平和に過ごしておりコウにとって大切な存在。

コウスケは篠ノ之束の同等の頭脳を持っている人物で、ガンダム開発計画の責任者でもある。

そんな夫を影で一生懸命に支えているのがジュンコである。

白騎士事件発生時、0号機をハッキングしようとした束をプログラム戦を圧倒的に抑え影ながらにして勝利を納めた。

その頭脳は10年経っても変わらないがコウスケにはちよつとした悩みがある。

それはパソコンの入力が年々と遅くなっている事である。

トレーズ・クシュリーダ

その姿はWガンダムにそっくりであるが「ナ」が付いていないだけである。

当初は腹が黒くない&amp;性格がめちやくちやいいオサバリンを出そうと思ったけど気付けばエレガント&amp;お節介の性格を持つトレーズを書いてしまいました。悔いはない。

トレーズがAE社に入社する前は大が付くブラック企業だったが入社してからは社長クラスまで登り詰めホワイト企業に変革。

そしてガンダム開発計画を立案した人物でもある。

社長になってからはAE社が織斑計画に一枚噛んでいた事を知ったトレーズはその計画を破棄。

さらに織斑計画で産まれた失敗作達を保護し、その1人である織斑マドカの「織斑」という名を捨て、「マドカ・クシュリーダ」に名を改めさせた。

トレーズの過去は友人であるコウスケだけが知っており、噂では

「トレーズは男で唯一の元亡国機業の幹部では？」と囁かれているが真相は定かではない。

ちなみにトレーズは原作の束と同様生身でISと戦えるスペックを持っている。

さらに剣を持てば鬼に金棒である。

マドカ・クシュリーダ（織斑マドカ）

当初は原作通りに亡国機業の仲間入り。その最後はデンドロビウムの零距离射撃で出番は終了と決めていた。

しかしその前にトレーズに会わせればもしかしたら？となり書いた結果、トレーズのせいで強制的にクシュリーダの2人目の娘として救済される形となった。

トレーズは成功作の一夏を殺す条件として自分を殺さなければ彼を殺させないと言い真つ先に殺ろうとするが悉く失敗。

様々な手を打ったとしても殺すことは出来ず諦めかけるがトレーズが煽る様に挑発してくるためマドカは良いように乗せられてしまいう点があり制御しやすいのである。

搭乗ISはトレーズの計らいでイギリスから第3世代型IS「サイレント・ゼフィルス」を受領している。

（セシリアはその事は知らないが後に知ることになる）

IS学園では素顔を隠す様に大きな丸眼鏡を着けており外から見ればガリ勉の女子である。

しかしその実力は本物であり二組のクラス代表に立つほどであったが鈴が学園に来たその時にその座を譲った。

譲った理由は「あまり目立ちたくない」との事だった。

ちなみにマドカは本来ガンダム試作4号機のパイロットになる予定だったが4号機が強奪され、その予定は無くなった。本人は内心楽しみにしていたが強奪を受け、悲しむどころか逆にマドカの逆鱗に触れてしまった。

原作の主人公。男でISを起動させた世界初の男性起動者であり織斑計画の2人目の成功作。

原作では軟禁に近い物となっているが、トレーズが一夏の身柄をA社社の預かりとした。

そこで一夏は様々な体験・出来事をしたり見たりした。

一夏にとって大きな出来事はガンダム試作2号機に搭乗したことだろう。その時の一夏は操作は覚えただてなのにも関わらずガトーと似たような戦い振りをコウに見せ驚かせた。

これについてはトレーズ曰く「織斑計画のお陰」との事。

模擬戦を終えガンダムのパイロットに相応しいと2号機のパイロットは一夏の予定だったが倉持技研が一夏の専用機となる第3・5世代型IS「白式」が開発されたのが原因でパイロットの予定から外された。

そしてIS学園入学して最初の頃は肩身が狭い思いをコウと共に抱えるが幼馴染みである箒の再会や歳が近い事と苦楽を共にするコウの存在によってその悩みは消えた。

ちなみに白式の第二形態である「雪羅」は原作同様発現しているが燃費が第一形態よりさらに燃費が悪いと一夏自身が分かっている。なので第一と第二形態の際の戦い方は相手がどんな攻撃をしてくるのかを観察し、一気に勝負を着ける戦い方となっている。

### 篠ノ之箒

原作のヒロイン。一夏曰く「ファースト幼馴染み」

最初の頃は一夏に対して照れ隠しとして暴力的なモノが見え隠れしているが現在は改善されている。そして一夏に近づく女性達に対する嫉妬は無くなっている。

一夏と久しぶりに剣道をして勝ったのは箒であった。その時に一夏は「3年帰宅部」と発言しており3年のブランクがあるにも関わらず幼少期と変わらない強さを見せた。

搭乗ISは訓練機の「打鉄」から束が直々に開発した第4世代型IS「紅椿」を受け取る。

さらにタイミング良く銀の福音暴走事件が発生。一夏と共に銀の福音を止めようとするが一夏が偶然通りかかった密漁船を庇い負傷した。

その時の筈は自身とISの力に溺れたのが原因であり目が覚めた一夏に大泣きしながら謝り猛反省をした。

それ以降は力に溺れる事をせず自身の心体共にを鍛え、更に一夏の監視役である楯無の助言を得るなど少しづつだが成長している。

セシリア・オルコット

原作のヒロイン1人でイギリス代表候補生。ガンダムのトラウマ第一犠牲者

最初は高飛車の性格を持っており、IS学園に来た一夏とコウを完全に見下していた。

しかしクラス代表を決める戦いでコウが駆る1号機の圧倒的な力を見せつけられ、最後には飯綱落として決められ敗北。

そのせいでセシリアはガンダムのトラウマを植えつけられた。

敗北したセシリアはコウの顔すら見る事が出来ずガンダムの姿を見れば気絶するなどの症状が出たが治まりトラウマに真つ正面から立ち向かう姿が見られた。

搭乗ISは第3世代型IS「ブルー・ティアーズ」

原作ではマドカの駆る「サイレント・ゼフィルス」との戦闘を経て偏向射撃を習得する。こちらではマドカとの戦闘はなかったものの己の努力で偏向射撃を習得した。

ちなみにセシリアは原作同様料理下手ではあるが何故かキャロットケーキだけが上手く作れる。

セシリア曰く「幼少期によく作ってもらった」とのこと。

凰 鈴音

原作のヒロインの1人で中国代表候補生。コウが鈴との初対面時には「子供か?」と思ったほど小柄な少女

IS学園には当初軍部から入学の誘いはあったものの他国に興味

が無いため拒否。しかし一夏が入学した事を聞くと一転して軍部を脅し編入してきた。

そして編入して一組に行き最初に出会ったのが一夏でなくコウだった。

鈴はコウが第二のIS起動者だということは知っていたもののみ興味は無かった。しかしザクの襲撃戦の際にはコウがザクに圧倒的な強さを魅せたため鈴は興味を持ち心の中で「アイツと戦ってみたい」と思った程だった。

搭乗ISは第3世代型IS「甲龍」

シャルロット・デユノア

原作のヒロインの1人でフランス代表候補生。中性的な顔立ちで服装次第で男にも女なれる美少女。

IS学園に編入してきた際、「シャルル・デユノア」という名で男に扮して一夏とコウに近づいた。

一夏との学園生活を続けていく中、運悪く一夏のラツキースケベが発動してしまい男子では無く「女子」だという事が判明した。

目的は「白式」のデータと「ガンダム」のデータを盗むか強奪しろとデユノア社の社長から命令を受けたものだった。一夏に真相を話し学園から去ろうとするがコウの手助けによりシャルロットはしばらくの間だが男子として過ごすことになり、学年別トーナメントが終了して日が経つ頃に女子としてクラスの表に出たのだった。

搭乗ISは第2世代型IS「ラファール・リヴァイヴ・カスタムII」

ラウラ・ボーデヴィツヒ

原作のヒロインの1人でドイツ代表候補生。ドイツのIS配備特殊部隊「シユヴェルツェ・ハーゼ」隊長。階級は少佐。

IS学園唯一の正規の軍人で元々は生体兵器に近い試験体ベビーとして生まれた。(織斑計画の一部がドイツに渡った)

転もともとは冷酷な性格の持ち主で転入当初は一夏に対し、千冬がモンド・グロツソ二連覇を逃した遠因を作ったことから「教官の汚点

の残した張本人」として毛嫌っており、（しかしこの出来事が無ければラウラは千冬とは出会わず軍に処分されていた）他人を見下していた。

しかしトーナメント戦でVTシステムにより自身のISが暴走した際は一夏により助けられ、その際に一夏のとある一言により彼に惚れ、他のヒロインよりも早くファーストキスを奪った。

搭乗ISは「シユヴェルツェア・レーゲン」

ちなみにタッグマッチ編でコウの事を中尉と呼んでいた理由は軍人の勘だそうだ。

#### 更識楯無

原作のヒロインの1人でロシア代表候補生。裏工作を専門とする暗部「更識家」の当主であり、本名は更識刀奈。

コウが部屋に入るとそこに変態がいた。しかしその正体はIS学園の生徒会長で「IS学園最強」と言われていた。しかしコウと戦いたいと気持ちが強くなり、コウが風呂に入っているにも関わらず過激な水着で入ろうとするなど変態的行動が見られた。最終的にはコウが勝利した事により最強の座はコウの物となったが楯無はいつかりベンジしたいと思っている。

妹の簪との関係はギシシヤクしていたがタッグマッチ編でコウが気絶してる間に一夏の尽力もあり互いの本心をさらし出し、簪と和解することが出来た。

搭乗ISは「ミステリアス・レイディ」

ちなみにトレーズと更識家との関係は根深く、幼少期の刀奈はトレーズによく遊んでもらっていた。

#### 更識簪

原作のヒロインの1人で日本代表候補生。

優秀な姉とは違うとコンプレックスを持ち、自分を卑下するがそれでも代表候補生であり、演算処理能力や情報分析力、空間認識能力、整備能力が非常に高くハツキリ言えばコウを上回っており、AE社に入

社してもいいぐらいの能力の持ち主。

タッグマッチ編ではウェポンシステムの弱点を戦闘から数分で悟り、さらにIフィールドを破壊するなどをしていった。

タッグマッチ編で一夏が簪と組んだ理由を決勝戦前に話してしまい落ち込む。しかしウェポンシステムと戦う際は切り替え戦闘に集中した。

そしてタッグマッチ終了後、楯無と同じく和解することが出来た。

搭乗ISは「打鉄式式」

織斑千冬

一夏の姉でIS学園の教師。

ISに開発当初から関わっていたため、ISに関する知識は豊富で、操縦技術は他のパイロットより遥かに高い。

そのため、公式試合など負ける事がなく大会を総合優勝を果たしたことからも世界最強のIS操縦者となった。その美貌と敬意を表して「ブリュンヒルデ」と呼ばれているが本人はその異名を嫌っている。その身体能力と戦闘技術が非常に高い千冬は大会を総合優勝している。しかし過去に一度だけ相討ち寸前に近い戦闘をしており、その証として肩に火傷の痕が今も残っている。もしあの時続けていれば死んでいたのは自分だと親友の束に言った位のもの。

千冬は一夏と同じく織斑計画の第一成功作であり、トレーズが保護しなければならぬ人物だったが計画を破棄との同時に一夏と共に姿を眩ましていた。

籐ノ之束

籐の姉でISを開発し自他共に認められている天才。

ISは本来なら宇宙開発用として束が開発していたが、突如ISを使い「白騎士事件」というテロを起こした。その時の束は他人がどうなるかどうでもいいと考えを持っていた。しかし白騎士事件に予想外のイレギュラー（ガンダム）が現れ、ハッキングして妨害しようとするが逆に妨害されてしまうなど、プライドの高い束にとって大きな敗北であり、自分の計画を邪魔したガンダムを激しく憎み、時は経



ちI Sコアを製作後、姿を眩ました。

姿を現したのは臨海学校編で銀の福音を暴走させたが最終テスト当日だったガンダム試作3号機デンドロビウムの登場により、また邪魔を食らってしまった。

そしてコウとの初対面の際、「もう邪魔をすればお前を殺す」と言い残した。

姿を眩ましている間にパイロットであるコウとガンダムを開発したA E社を特定し、学園祭編でスコールとガトーが2号機と4号機を強奪しやすいように頼んでもいないのに裏で手引きした。ただし亡国機業には与していない。

ちなみに原作同様に「細胞がオーバースペック」だが実力はトレーズの下。

### 36話

——旧ソロモン宙域——その宇宙に破滅の光を降らす機体が艦隊に向け発射しようとしていた。

——そして男は呟く様に喋っていたがノイズが掛かって一部しか聞き取れなかった。

——待ちに——時が来た——多くの——が無駄死にで無かった——証の為に——ジオ——の理想を掲げる為に——！——星——屑——の為に——ソロモン——私は——！

夢は途切れ目が覚めたガトーはゆっくりと布団から体を起き上がらせた。

「——なんと面妖な夢か・・・しかし久しぶりに夢を見た気がする」  
そう言いながら障子窓を開き早朝からの太陽の光を浴びた。

「初めて京都に来たが、ここが過去の日ノ本の中心だとはな。些かこの京都という土地で戦闘行為をするのは気が引けるが我々には目的があるのだ。ここで足を止める訳にはいかぬ」

そう呟くガトーに自身の端末からメールが届いた。  
メールの内容を確認したガトーだがその表情は険しく内容に対する嫌悪の表情を浮かべていたのだった。

季節は夏から秋となった。

そして今日、IS学園の一年生の修学旅行日を迎えていた。  
場所は京都。季節が季節なので紅葉が美しい所は多くある。

そこに向かう為、新幹線に乗っていた生徒達の姿の中にコウの姿もあった。車窓から高速で流れる風景を見ているコウ。しかし表情に曇りが混ざっていた。

亡国機業やガトーの件もそうだが、それとは関係なく、キョウトという場所にあまり良い思い出がなかった。

コウが前世で幼い頃、家族と共に旅行に行く予定だったがキョウトはジオンのコロニー落としの攻撃により旅行の予定が無くなってしまった。

それでもコウ自身は京都に行きたかったので内心は少しだけ嬉しかったのだ。

風景を見ているコウに一夏が声を掛けてきた。

「コウさんちよつと会わせたい人が居るんですけど…いいですか？」

「…?」

そうすると楯無の妹である簪が一夏の隣に立った。そしてコウは2人に座るよう促したがコウは回りの異変に気付く。

(そういえば一夏の回りに見覚えの顔が多いような気がするが…:…なんだ?)

2人は気が付いていないが回りには、見覚えの顔のある人物達が目を光らせながら、一夏と簪の動きをみていたのだ。しかも奥の方では二年生であるはずの楯無が血眼になって此方をずっと見ていた。簪と和解して以来、楯無は彼女に対する過剰なシスコンぶりを遺憾なく発揮していたのだった。

コウの視線に気が付いたのか一瞬だけ回りを見渡し今の状況を把握した。

「そ、それよりも簪さん?俺に用があるって…?」

「知りたいんです…」

「知りたい?」

「はい。是非ともウラキさんの駆る専用機をもっとよく知って理解したいんです!どうして巨大なISを扱えるだとかどうしてあのような機動力が可能だとか!」

「え、ええ?」

あの暗かった簪とは思えない程、好奇心の迫力と探求心に押され困惑の声しか出なかった。

コウはそんな彼女にあの時の自分と思い重ねた。

しかしコウの駆る専用機を詳しく教えたら企業秘密案件になりか

ねないので案件になる所は教えず、ならない所を簪と一夏に教えたの  
だった。

### 37話

電話相手はガトーに対し怒りをぶつけていたがそれに対抗しガトーもまた静かな声で怒りをぶつけていた。それもその筈、ガトーはあのメールの内容に対し異議を申し立てたため電話相手である亡国機業の人間は内容を実行しろとガトーに命令した。

そして電話は一方的に切られ続く事はなかった。

(ここまで根が腐っていたとはな．．．亡霊の看板が無ければ何も出来ぬ奴等が．．．我等と組んでいることすら忘れていているらしい)

ガトーは忌々しそうに眉間に皺を寄せながら心中に呟いた。しかしブツブツ呟いても今の状況は変わらないと思っただいたガトーに通信が入った。

『——此方アイランド。バルフィツシユ聴こえるか?』

『此方バルフィツシユ。どうした?』

『——もうすぐ京都に到着する。今のところ亡国機業らしき人物は確認出来ていない』

『そうかご苦労、引き続き警戒を頼む。』

『了解』

アイランドからの通信は途切れ、ガトーは人だかりが少ない場所に移動し、自分のリーダーの男に通信を入れた。

『——ガトーか』

『はっ．．．今しがた報告したい事が』

『——織斑一夏の抹殺と「白式」の名を持つISの事であろう?』

『——ご存知でしたか』

『うむ．．．「白式」の件に関しては認知しておつてが．．．抹殺の件に関しては先程ではあったが彼奴から知る事ができた』

『．．．．．』

『故にガトー、貴殿には任を下す。亡国機業による織斑一夏抹殺を妨害し、織斑一夏の身柄を確保せよ。抵抗があつた場合は殺さず気絶さ』

せるのだ』

「はっ——」

『武運を祈る』

通信は途切れ、この場に残ったのは静寂であった。

ガトーは髪を束ねた紐を外し、束ねた髪がさらされて今のガトーの姿は建築関係に近い姿をしていた。

しかも丁度付近には高層ビルを建てている最中であり、そこに関わっている者は全てガトーと同じ組織にいる人間達だけであり、限定的ではあるが隠れアジトとしても使われている。

そして大通りに出ようとすると画像専用の着信音が端末から響いた。開くとそこにはＩＳ学園修学旅行の予定表が書かれていたものだった。それに目をひととおり読んだガトーは大通りに出て歩きながら思考を張り巡らせた。

（——亡国機業が織斑一夏を抹殺と白式を強奪するのは恐らく旅行で自由行動ができる最終日だろうな・・・最終日が訪れる時がくるまではないアイランドには苦労ばかり掛けるが尾行させるしかあるまい）  
そして建設現場に到着し一時思考を中断し、安全ヘルメットを被り作業に取りかかるガトーであった。

そしてその日の夜。

京都の繁華街飲食店。しかしそこは庶民が金が無ければ到底入れない超が付く高級飲食店に3人の女性がそこにいた。

1人は天災と呼ばれる人物、篠ノ之束。

1人は亡国機業の幹部、スコール・ミューゼル。

最後に亡国機業の構成員、オータム。

東は目の前にいる2人を気にもせずガツガツと食事を進めており、どこかの野菜人にも劣らず皿は段々と積み重っている。

スコールは天災が本当に来るとは思ってもおらず驚きを隠しきれず、隣のオータムは東の食いつぶりを気持ち悪がっており吐き気すら感じていた。

「ああ、久しぶり食べたあ……。で？こんなところまで呼んで何の用？まあ大体の検討はつくけどさ」

そう言いつつ目の前にいる2人に殺気を飛ばした。理由は分かっているだろ？と天才は顔に出していたがスコールはその殺気を受け流し、話を出した。

「……これを」

スコールは東の前に1つの写真を渡した。それはガンダム試作4号機であった。

「まあどっかでパクったかは天才である私は聞かないけど早い話コイツを改造してほしいのかな？」

「え、ええ、そうです」

「うん。いいよしてやる。その変わり私の依頼を受けてくれるかな？」

スコールとオータムは目の前にある天災の顔を見た。

東の表情はまるで凶悪な悪魔の様に笑顔を浮かべていたのだった。

## 38話

宇宙・火星周辺宙域

その何もない空間からこの世界には存在しない筈の物体が突如として現れた。

名はステルス・スペースコロニー「イーズ・ブレイド」

ステルスが解除され制御していた人間達は驚きと動揺を隠せなかった。

『ステルスが解除されているぞ!? どうした!?』

『わ、わかりません!! いきなりステルスが解除されて・・・』

コロニー内ではステルスが解除されたことを知らない住民にも異変は起きていた。

『なあおい・・・なんであんな所にたくさんザクがいるんだ?』

『さあ? 訓練か何かなんかじゃないか?』

至る所に大量のザクに何らかの疑問を持たなかったコロニーの住民達。

そしてザク達はその手にもったバズーカを都市の上空に何発も放った。

行き場を失った砲弾は爆発——しなかった。

だが爆発の代わりに砲弾から緑色の煙が一気に噴出。

別の場所でも同様に発射された砲弾から緑色の煙が噴出し、コロニー内全体を覆い尽くした。



そしてそれを吸ったコロニーの住民達はドミノのように倒れ、もがき苦しむ様に死んでいったのだった

「………?」

ガトーは曇天に広がる空を見た。何故自分は空を見たのだろうか？と考えてしまった。

しかし考えてる以前にこの曇天の空を見ていると嫌な胸騒ぎをガトーに感じさせた。

そんなガトー事を感じていると端末から通信が入った。

『此方アイランド。バルフィツシュ、奴等が動いた』

「———そうか奴等が動くとなれば此方も動かねばなるまい……。アイランド———」

『ああ、敵のリーダーを見つけたら連絡する』

ガトーが最後まで言う前に察したアイランドは先に発言し、そのまま通信を切った。

これはいつもの事であると頭では分かっているつもりなのだが、元軍人のガトーにとっては少し落ち着かないものであった。

アイランドは元々有名な探偵だったせいで周囲の人間から恨まれていた。

アイランドは名を変え、顔を隠し、そしてガトーに属する組織に元探偵としての知識等を使い、組織に情報を与える人物となった。

勿論、アイランドの過去を知っているのは、頭領とガトーを含めたほんの一握りの人間達だけであるが。

「さて、私は私で行動しなければならぬな……む？」

その矢先、遠くから爆発音が鳴り響いた。

恐らく一夏を抹殺するために亡国機業が派手に動いたのだろう。

だがそうさせないためにガトーという男が存在しているのだ。

ガトーはガンダム試作2号機を装着し、スラスターを吹かし、爆発音がした所まで一気に飛ばしていくのだった。

## 39話

### 爆発発生前

修学旅行最終日を迎えていたこの日は、自由行動となっていた。コウ達は様々な物を見て体験し、時刻は終わりの時を迎えていた。

「……………」

集合場所である京都駅に向かう途中、コウは立ち止まり空を見た。見えるのは太陽が隠された曇天の空であった。

奇しくもそれは、ガトーと同じタイミングで曇天を見ていた。

そこに広がるのは曇天。しかしコウにとっては嫌な胸騒ぎを覚えさせた。

——次の瞬間、近くで爆発が発生し、激しい爆音が鳴り響いた。さらに白いISが此方側に吹っ飛んできた。

「——白式？一夏か!?!……………クツ!」

コウは1号機を装着し、一夏を此方側に引き込みシールドで実弾であろう攻撃を防いだ。

そして一夏が吹っ飛んできた方向から人影がうつすらと此方側に向かって歩いてきた。

「おいおいどうしたあ、テメエの実力はこんなもんかあ?」

「っ、強い……………」

現れたのは赤色の全身装甲のISを纏ったオータムだった。

「学園祭以来だなあ?コウ・ウラキ」

「その声、あの時蜘蛛みたいなISを操縦していた奴か!?!」

「ああ、そうだよお?だからさあ、あの時の借りをキツチり返してやる

——よッ!!」

ビームマシンガンを2人に向けて乱射。同時に時限式爆弾を投げたので大爆発を引き起こし分断させ、ビームサーベルを展開した。狙いは一夏一点である。

「——ツ・させるか!!」

コウはFb形態に移行し、強力な推力を得た1号機はその勢いのままオータムに体当たりをぶちかます。

一夏だけを狙っていたオータムはコウの事を見ていなかった。案の定、体当たりを食らい民家に激突。

オータムは衝撃で気絶しかけるが、歯を食いしばり、意識が飛ばないようにした。

「——つてえだろうがあ!!」

「なに!?!」

オータムは目の前にいるコウに目掛けてスラスター全開で鋼の拳によるストレートをかました。

鋼鉄の音が響くと共にコウは見事に直撃。体勢が崩れ、後ろにヨロヨロと下がってしまった。

「死ねえコウ・ウラキ!」

オータムはビームサーベルを展開し、スラスター全開で突きを食らわそうとする。

対するコウはその攻撃から防御するために盾を構えようとするが、突きが速く防御が間に合いそうになかった。

その神速の突きは……

ガンツ!!

届くことはなかった

何故なら何者かがオータムを右から蹴飛ばし、大きく吹っ飛んだからだ

「に、2号機・・・なんでこんな所に!？」

一夏は驚くような声を上げた。

それもその筈、2号機が強奪されたという事件は一夏には教えられていなかったのだから。

(ガトール・・・ッ!!)

コウは2号機に乗っているだろう人物、ガトール対し、険しい表情で見っていた。

右から蹴り飛ばされたオータムは衝撃に耐えきれずISを装着したまま気絶していた。

そしてオータムを蹴飛ばした張本人であるガトールは一夏の方に顔を向けた。

「織斑一夏だな？私と共に来てもらおうか」

「——ッ！」

一夏は立ち上がり白夜を2号機に対し構えた。だが白夜の刀身は微かに震えていた。

(武者震いでもない、怯えている訳でもない。。。俺の勘がいつている。。。この2号機を操っている人間はコウさんと同格——いやそれ以上かもしれないって)

一夏は瞬間加速イグニッション・ブーストを発動させ、一気に間合いを詰め2号機の胴体を切り裂こうとする。

「——青いな」

ガトーは一直線に向かってくる一夏を拳でハエのように叩き落とし、叩き伏せた。

しかしそれでも闘志を消さなかった一夏は、知っていたのかそれとも偶然だったのか2号機の要であるラジエーター・シールドの冷却装置を白夜で貫き破壊した。

——それが一夏が最後に見た光景だった。

「——腕はひよっ子だが、その心意気は見事」

破壊されたラジエーターシールドを見て敢えて捨てなった。

そしてガトーは倒れ伏した一夏を回収……しなかった。

何故ならコウがビームサーベルを展開しガトー目掛けて振りかざしていたからだ。

「ガトーオオオオオオオオ!!」

「甘いっ!!」

ガトーは腰からビームサーベルを居合いの様に抜き、攻撃を防いだ。

両者のビームサーベルは反発し、鏝迫り合いが発生した。

「——フンッ!」

ガトーは、もう一本のビームサーベルを引き抜き、コウの胴体目掛

けて素早く振った。

しかし腰から抜く動作に気が付いていたコウは後ろに回避した。

「逃がさんー！」

機体に負荷の掛かるラジエーターシールドをパージし、シールドをぶん投げた。

(一夏と同じ事をして！)

上空へと避ける。しかし予想していたぞと言わんばかりに二刀ビームサーベルを振り下ろす2号機の姿があった。

「落ちろお！」

「落ちるかあ！」

振り下ろす前にスラスター全開でタツクルを食らわせ、一瞬でよけた所をハイキックをかまし、鋼鉄の音が周囲に鳴り響いた。

「コイツでえ!!」

コウはトドメを刺そうとビームライフルを発射しようとするが体勢を立て直したガトーがビームサーベルを思いっきり投げビームライフルを破壊し、誘爆を引き起こした。

ガトーは残り1本のビームサーベルで誘爆の煙ごとコウを横薙ぎで切り払う。しかしそこにコウの姿はなかった。

「.....!」

ガトーは2号機のフレキシブル・スラスターを後ろに向け噴射した。

「何ッ!？」

後ろに回りこんでいたコウは突然の噴射により防御が出来ず、噴射の熱を浴びてしまった。

一応耐熱性コーティングと制服の下に着込んでいた万能パイロツトスーツの性能で防がれているが何時間も耐えられる訳ではない。

その隙にガトーは噴射を止め防御が間に合わなかったコウを地面へと叩き落とそうとする。しかしそれは出来なかった。

何故ならコウがああ噴射を食らったのが嘘の様だに素早く2号機の

背後に回り腰回りを掴んだ。

「な、なんだとお!?!」

「しいいずううめええ!!」

激しい空中戦を繰り広げたせいかわ飯綱落としての落下地点は硬い地面ではなく、水面へと叩きつけられたのだった。



## 40話

コウとガトーが戦闘を繰り広げている中、IS形態のまま気絶している一夏に近づく1人の人間がいた。そうアイルランドであった。

手には剥離剤リムーバーの入ったケースを持っていた。

元々は学園祭襲撃の際、白式に使用する予定だったが、コウの邪魔が入り使用する事が出来なかった。

手際よく素早くロツクを解除し、剥離剤を取り出す。

だがアイルランドは何者かに見られているのを察知。腰から手榴弾を引き抜きそこにいるだろうと言わんばかりで物陰に投げた。

手榴弾は爆発……しなかった。

しかし手榴弾から発する爆発に近い音が大音量で流れていた。

相手はそれに爆発せず音だけに驚いたのか物陰から物音がアイルランドにも聞こえるように響いていた。

「……………出てきたらどうだ?……………更織」

観念したかのように出てきたのは楯無であった。

しかし楯無の目はまるで仇を見るような眼差しであった。

「更織の当主自ら出てくるとは……………これは驚いた」

「……………警告するわ。彼から離れなさい」

「断る……………と言ったら?」

「強引でも離れて貰うわ」

「……………ふん」

下らんと言わんばかりの表情のアイルランドは銃を引き抜き楯無の頭に標準を向け躊躇なく引き金を引いた。

水面に墜ちた2人。

数分立つと水柱を立てながら空へと上がった。

陸上・空中・水中戦を3つを繰り返して、2人の体は既に満身創痍であり、機体もそうであった。普通なら戦える状態ではない。

そう普通なら。

(バルカンの弾は尽きた。残ったのはコイツだけ……早く決着をつけないとこつちがやられる……！)

(ヌウ……この私がかここまで手こずるとは……！早急に決着を着なければ大事にさわる!!)

ガトーはビームサーベル最大出力に切り替え、対するコウはサーベルをすぐさま振れるよう構えた。

そして両者は推力全開で真っ正面から突っ込んだ。

「たあああああ!!」

「せえええええい!!」

2号機の刃は1号機のブースターを突き、対する1号機は2号機のスラスターを突いた。

2号機のサーベルはブースターから胴体に袈裟斬りをする。

そうはさせまいと1号機は2号機に密着。更に胸部の姿勢制御用スラスターを近距離で使用した。

「ヌウウウウツ……!!」

怯んだガトーをコウは手からビームサーベルを抜き、再び2号機のスラスターを突き、小さな爆発が発生した。

ビームサーベルを手離し、マニユピレーターで思い切り2号機の顔  
面目掛けて右ストレートを食らわした。

その反動でビームサーベルから手離してしまった2号機。

しかし反動を利用しミリのスラストター推力を全て使い、強力なサ  
マールソルトを1号機の顎に食らわした。

そして今度は衝撃をカバーしてくれる物は水面ではなく土の上へ  
と墜ちたのだった。

弾道は外れ、楯無の頬を掠めて赤い線が出来た。そして後ろから何  
かが倒れる音が出た。

楯無は後ろを振り向くとナイフを持った亡国機業の構成員である  
う者から眉間から大量の血が流れ出ており二度と起き上がる事はな  
かった。

「ハイエナ共が……」

既に自分達の回りに隠れていることに気付いたアイランドは嫌悪  
な表情を浮かべつつ煙幕玉を取り出し、地面に投げつけた。色の黒い  
煙は広範囲に広がり、回りを包み込む。

アイランドはその隙に剥離剤を取り出し白式の強制解除を急いで  
行う。

そして数秒もかからない内に解除。素早く白式の待機形態を剥離  
剤の入っていたケースの中に突っ込み、一夏を肩に背負いこの場から  
脱出する。

煙幕から脱し近くの物陰に隠れ、味方に通信を送ろうとするがジャ  
ミングのせいで一向に繋がらなかった。

(更織の奴。この辺りの電波をジャックしていたのか……抜け目のない)

後ろから爆発が響き覗き見ると、蒼いISと赤い全身装甲のISによる対決が勃発していた。しかし、それをずっと見ている訳にはいかない。ここから離れ回収地点に向かうアイランド。だが一歩前に進むことは出来なかった。

何故なら目の前に木刀を持った修羅がいたからであつた。修羅の表情は、弟や生徒に見せられないものだ。

修羅はアイランドを一閃。これが本物であつたなら、確実に絶命していただろう。

木刀は反動に耐えきれず粉々になり、一閃を浴びたアイランドはギリギリ耐えた。しかし自分は捕まる為にはいけない。そう思いわざと倒れ、気絶するフリをしたのだつた。

## 41話

目が覚めると知らない天井……ではなく、地面に這いつくばっていた。カメラにはノイズが入り、ほとんど前が見えず、アラームが鳴り響いていた。

コウは1号機から脱した。

外装はボロボロになっており、最早動かすことが出来ない状態であった。そして2号機の方を見ると、1号機と同じようにボロボロになっており、その横には自分と戦闘を繰り返した男が立っていた。

両者の視線が合い、沈黙が続いた。空から水の小粒が空からポツポツと降り注いだ。

最初に口を開いたのは、ガトーであった。

「貴様。名は？」

「コウ……コウ・ウラキ」

ガトーはそうか……と言い、しばらく目を瞑り、開いた。

「……2度と忘れん」

睨めつきながらそう言いコウに背を向けガトーは立ち去った。

コウには言いたい事が山ほどあり後を追いかけてようとする。しかし急激な雨粒が降り注ぎコウの視界から一瞬で消えた。

そこに残ったのはコウと、大破した2機のガンダムのみであった。

数日後

コウは本社に呼ばれ、社長室前に来ていた。部屋に入ると、そこにいたのはトレーズであった。

空気は石のように重くヒシヒシと感じさせた。

そして最初に口を開いたのはトレーズだ。

「会えずに申し訳ないね……コウ。怪我の方は大丈夫なのかい？」

「は、はい。ですが、2号機を奪還出来ずに大破させてしまつて……申し訳ございませんでした」

「いや、構わない。それで、強奪された2号機と戦つてみてどうだったのだ？」

「……殺意が無かつたです」

「……ほう」

「もし向こうが本気で殺つてくるなら、絶対防御を貫くぐらい2号機なら容易です。ですが、リミッターを解除してるにも関わらず奴は本気では無かつたのです」

「殺さずに気絶を狙つていたと言いたいのかい？」

「……はい」

コウはあの戦闘をよく思い返してみると、ガトーは全力で戦つているフリをしていたのではないかと感じた。しかしそれを否定する自分もいた。

「そうか……。話を換えよう、今回の件はかなり事が大きくなつてしまつた」

そう言いモニターに映し出されたのは、自分とガトーが戦闘行為をしている所を各国のニュースで取り上げられ話題となっているものだった。そこでは各国の有権者があたかもそれを知っているかのような口振りで喋っていた。

真相を知つてる自分達からすれば憤りを越える何かを感じさせた。

モニターを換え、写しだされたのは宇宙であった。

「宇宙開発用として先日上げたばかりなのだが、こんなものが写つて

いた」

拡大し修正を加えるとそこに写っていたのは巨大な物体であった。しかもコウにとっては見覚えがあるものであり、畏怖の対象でもあった。

「今は月に向け周回をしようとしているが……もしこれが地球のどこかに墜ちれば悲惨な事になるだろう。なら、此方から破壊すればいい」

「自分達がですか？」

「そうだ。不安の種は早々に潰しておかないとね……。コウ、頼めるかな？」

「……任せてください」

「では、明日決行するでしょう。今日は休みたまえ」

「失礼します」

コウは退室した。

退室したコウの表情は決意の強いものだった。

(落としてたまるものか……っ！絶対に……！)

2度とあの時のようコロニーを落とさせはしない!!

## 42話

「反応多数……あれがそうか……！」

宇宙そらに上がったコウはデンドロビウムで暗闇の宇宙を駆けていた。

コロニー周辺に辿り着くも、待っていたのは紛争時に戦ったジオンの機体とそれに紛れ込む様に無人のISが数え切れない程存在していた。

『ヤベエ！ヤベエ！』

敵の多さに驚きを隠せないハロ。そして此方が接近しているのが気が付いたのか、群がる様に一斉に襲い掛かってきた。

「ハロ！メガ・ビーム砲発射準備、一気に蹴散らす！」

『リョウカイ！リョウカイ！』

メガ・ビーム砲のコントロールグリップを使用し接近してくる敵に向け発射。直撃した敵は塵となり、傍にいた敵は副次的な被害を受けた。

ビーム弾を回避した敵はデンドロビウムを遠距離から足を止め攻撃する。

しかしそれはデンドロビウムの前では無力であった。

武器コンテナが開き、発射されたのはマイクロミサイルだ。

収納されたミサイルは辺り一面をミサイルの嵐に変え、直撃した敵は爆散、良くて四股が消し飛ぶぐらいだった。

しかしそれでも敵の数は増えていく一方であった。

（これ以上突っ込めばデンドロビウムでも持たない……。時間は惜しいが早く体勢を立て直そう）

機体をバレルロールさせ体勢を立て直すため後退した。追ってきた敵はいたが、その前にフラッシュを使ったため、追いかけてくることはなかった。



正面でデンドロビウムが暴れて体勢を立て直すため後退している中、コロニーの反対側で暴れている機体があった。

そのシルエットは、ジオンの精神の形を表していた。

名は、ノイエ・ジール

そしてそれに搭乗しているのはコウより先に宇宙に上がってガトーであった。その回りには多くの残骸が浮遊しており、すべてガトーが撃墜したのだ。

「邪魔だあ!!」

多数の敵に対し、全く息の切れないガトー。その戦闘の最中、外部からの通信が入った。

『やあやあ!私の可愛いゴーレム達を倒すなんてどうゆうつもりかな?』

「篠ノ之束か…!」

『そうです!私が天才の篠ノ之束です!』

とびっきりの笑顔でダブルピースで天才だとアピールする束。ガトーは束のテンションに苛立ちを覚え、さっさと通信を切ろうとするが束の待ったが入った。

『いいのかなあ?それ切っちゃったら…お前の頭領の頭が吹っ飛ぶけどお?』

「!?貴様あ…!!」

『うんうん!察しが良くて助かるよ!それじゃあ私からのお願いを聞いてくれたら解放してあげるね』

「お願い…だと?」

送られて来たのは、つい先程、コロニー正面で戦っていたデンドロビウムの映像であった

『コイツを跡形もなく消したら解放するから頑張つてねえ』

癪に障る笑顔で一方的に通信を切った東。辺りを見渡すと、先程で戦っていた無人機達はコロニー防衛の為に元の居場所に戻っていた。

「又ウウ……！」

人質を取られたガトーは己に対する怒りで溢れんばかりに肩を震わせたのだった。

## 43話

アナハイム・エレクトロニクス宇宙開発専用ステーション  
他社がIS開発に力を入れている中、AE社は宇宙開発に力を入れており、重要な拠点場所。

ここにはガンダム開発計画で凍結されたものの、ガンダム試作0号機が宇宙開発用として配備されている。

ちなみにガンダム試作0号機のパイロットはコウ曰く、  
「サウス・バニングと同じような顔をしている」とのこと。

体勢を立て直す為ステーションに帰還した後、再び戦場に戻ったコウを待っていたのは未だ数の数え切れない敵であった。

その敵の数の多さに忌々しく見つめるコウ。機体を前進させ、敵を殲滅しようとするコウにある異変に気が付いた。

それは残骸の数と敵の行動であった。

コロニーに近づけば近づく程、残骸の数が増していつているのだ。更に此方が接近しているにも関わらず、敵が仕掛けて来ない。

「ハロ……。熱源反応は？」

『ナシー・ナシー！』

しかしコウはデンドロビウムを前進させる事を止め、全周囲を見渡した。

そして視線の端に緑色のナニカが動いたのをコウは見過ぎさなかつた。

ビームライフルを取り出し、緑色のナニカに向け三発放った。

そして現れたのは既に撃墜されていたザクだった。

『上二熱源反応アリ！上二熱源反応アリ！』

その言葉と同時に、コウはデンドロビウムを急加速させ回避行動に

移った。

「あの機体は……!!?」

回避しながら敵がいる方向に目を向けると、ノイエ・ジールが大量の残骸から姿を現し、偏向メガ粒子砲を撃ちながら急接近してきた。そしてデンドロビウムにビームを直撃させるもＩフィールドにより無効化された。

「ほう……バリアか……!」

粒子砲から回避していたコウはデンドロビウムの射線上に入った事に気付कि、ノイエ・ジールをメガ・ビーム砲で射撃するが、ノイエ・ジールのＩフィールドにより無効化された。

「Ｉフィールドなら……!!」

武器コンテナを開き、ノイエ・ジール目掛けマイクロミサイルを放ち、嵐のような弾幕がノイエ・ジールに襲い掛かる。

しかしガトーはの残骸を盾にしながら回避しつつ、粒子砲を撃ち続けていった。

（残骸が多すぎる……!）

残骸を破壊しながらデンドロビウムを上昇させ、その場所から切り抜けた。

しかし下からノイエ・ジールが有線クロー・アームを駆使してデンドロビウムのＩフィールドジェネレータを破壊しに掛かってきた。「このままだと不味い……!こうなったら!」

機体の向きを変えコンテナから大型ミサイルを放ち、更に機体を素早く下に向け、フォールテイング・バズーカを取り出して急接近してくるノイエ・ジールに対し弾幕を張った。

「……クッ!!」

反応が遅れたガトーは左に避けるも一発のバズーカの弾がノイエ・ジールの右肩に損傷を与えた。

さらに追い打ちをかけるべく、実弾系で攻めようとするが肝心な所で弾切れを起こしてしまった。

その隙にノイエ・ジールはデンドロビウムに迫り掛かってくるが、デンドロビウムは眼前でフラッシュを使い、怯んでいる内に戦場を離

脱したのだった。

「逃がしたか…!!」

そんな中、ガトーにメールが送られてきた。

内容は

次は無이었다。

## 44話

アレ？ I S要素ドコ？ ドコナノ？

「コロニーが月に向かって加速したって!？」

『はい、しかも月には謎の装置が設置されており、破壊しようにも無人機の妨害で破壊出来ないのです』

(謎の装置・・・まさか、推進用レーザーか!?)

勿論だがこの世界の月はフォン・ブラウンの様な都市は存在していない。

しかし、コロニーの落下軌道は奇しくも、あの紛争時と同じ地点であった。

もし正しければ、コロニーの中に推進剤が存在し、推進用レーザーが照射され、コロニーは地球到着軌道に遷移するだろう。

そうなればデラーズ紛争の二の舞となる。それだけは絶対に阻止しなければならぬ。

『それと・・・我々は、あるものを開発しました。それは・・・対宇宙要塞兵器ソーラーシステムです』

映し出されたのは、あの世界のソーラーシステムよりやや小さめの規模の物が映っていた。

『勿論これは急ピッチで考えた物なのであの規模の大きさでは破壊することは完全には出来ないでしょう。そこでデンドロビウムの出番です』

「デンドロビウムの・・・?」

『デンドロビウムの主砲、メガ・ビーム砲に改良を加え、あの規模でも破壊出来るようにしました。』

それを撃つにはリミッターを着けているためその事は忘れないで

ください』

『デメリットはあるのか?』

『はい、威力が威力なので一発しか発射出来ませんので気を付けて下さい』

『そうか・・・』

コロニー落としを阻止するとはいえ、あの質量を持つ物を完全に粉々には出来ないだろう。一部は大気圏で燃え尽きるか、燃え尽きず地球のどこかに落ちるかだ。

「それよりこの装備はなんだ?ステイメンが隠されるようにされているが・・・」

『C(中央)コンテナの事ですか?ステイメンを保護する為に作られた物なんですけど完成したのが今日なんですよ。有線小型ミサイルが数弾詰められていて、全弾発射すれば従来の姿になりますよ』

デンドロビウムの追加武装の説明を受けている内に最後の補給が終了した。

『我々が出る事は全てやりました・・・ご武運を!』

「了解!コウ・ウラキ!ガンダム試作3号機デンドロビウム、出ます!」

コロニー外で一時的な修繕と補給を受けたガトーは、デンドロビウムを待ち構えていた。

(奴との決着を着けなければ、頭領……いや、閣下の命はない。絶対に奴を……落とす！)

そう考えていると前方から見覚えのある反応が現れた。

「来たか……！」

ノイエ・ジールを前進させると周りの無人機も一斉に動き出した。その中には自身が蹴飛ばした赤い全身装甲の機体もいた。

(確か、亡国との共同作戦だったか？もし奴なら後ろから撃たれぬよう気を付けねば……)

此方が見ていることに気が付いたのか、ノイエ・ジールに向け中指を綺麗に立てた。

「もし、というわけではなかったか」

ノイエ・ジールを加速させ、デンドロビウムに接近しようとする。しかし、有線小型ミサイルが既に辺り一面に広がっていた。

直撃し爆散した機体もいれば、手足をもがれジタバタする機体いた。

Cコンテナの弾を撃ちきったデンドロビウムはパージし、従来の姿へと戻った。

(……ッ！コロニーが加速したせいで月への到着が早い……！)

リミッターをつけたままメガ・ビーム砲で、コロニーに少しでも損傷を与えようとする。そうはさせまいと赤い全身装甲のISがサーベルを持ってビーム・マシンガンを撃ちながら急接近してきたせいで撃つことはかなわかった。

(チィ……！あの機体、京都で見たやつか！)

赤い全身装甲のIS……ガーベラ・テトラを駆っていたオータムは苛つきながらもデンドロビウムに対し絶え間なく攻撃を続けた。

そしてそれに続くようにノイエ・ジールも有線クローアームでデンドロビウムのIFフィールドを破壊するために攻撃を仕掛けてきた。

それをずっと回避している内にデンドロビウムはコロニーの側まで回避し続けた。



そしてコウはコロニーに穴が開いていることに気づき、直ぐ様、飛び込んだのだった。

## 45話

そろそろ終わりが近づいていきます

コウはコロニーに開いた穴を通り内部に入った。

身を隠すべく建物の影に隠れ、周囲を警戒した。ウエポンシステムへと移行に移った。その最中、ふと視線の端にあるものが見えた。

「あれは・・・人か？」

気になったコウはよく見るべくメインカメラ拡大をした。

だがそれはコウにとってトラウマとなるものだった

「ああ・・・ うああああ・・・ うっ・・・」

胃から吐きそうになるのを押さえ、耐えた。

『大丈夫か!?大丈夫か!?』

突然の事に慌てたハロ。

しかしハロはコウの事を見ることしか出来なかった。

コウが見たのは毒ガスで息絶え、此方を見つめていた死体であった。

他にもそのような死体がチラホラとあり、見るに堪えないものであった。

平常心を取り戻したコウは死体を見ないようにゆつくりとメインカメラを正面に向けた。

「これが同じ人間に対してすることか・・・!!」

憤怒の表情を浮かべたコウ。

そこに飛び込むようにノイエ・ジールがビームサーベルを振りかざしながら突っ込んで来た。

(奴に聞く事が今できた・・・)

コウはノイエ・ジールに対し、通信を送った。

「聞こえるか、ガトーツ!!聞こえるなら返事をしろお!!」

ガトーは敵と話すつもりは一切無かった。しかし、返答をしなければ同じ事を繰り返すだろう。

「聞いてやる!」

「ああ、よく聞け! 貴様は理想の戦っているのか、それとも誰かの命令で戦っているのか・・・どっちだ!」

「言うまでもない! 私は理想の為、そして頭領... いや閣下の為に・・・」

「理想や閣下とかの為に、ここに住む人間達を皆殺しをしてもやることか!?! 下を見ろ!」

「なに・・・?」

ガトーは攻撃の手を止め、下を見た。

「なっ・・・!?! どうゆう事だ・・・これは!?!」

コウと反応は違い、ガトーは目を見開き驚愕の表情を浮かべていた。

『あくあ、見ちゃったか。出来ればソイツを落とした後に見て貰いたかったなあ』

「なん・・・だど?」

通信を割り込んだ束の表情は笑顔だったが目は笑っていなかった。

その隣にはガトーが閣下と慕う男がクロエによって銃口を頭に突きつけられていた。

「篠ノ之束・・・貴公の望みはなんだ?」

「私の望み？そうだなあ、私の邪魔をするやつを消すとか？」

「それは我々を殺し、地球にコロニーを落としてもか？」

次の瞬間、コロニーは大きく揺れた。推進用レーザーが発射され、推進剤に点火したのだ。

軌道はゆっくりと地球に変えていくのだった。

「時間か……征くのだガトー、私の事はもう良い。急ぎこのコロニーを破壊するのだ」

『はっ……!?!』

「プツハハハハハハハ!!この莫大な質量を持ったコロニーをどうやって破壊するつもりなんだ？ええ？気でも狂ったのかあ!？」

「破壊する手段を持っているのは、アナハイムだ！」

「アナハイム」という単語に真つ先に反応したのは東で笑顔から一転、怒りの表情を浮かべた。

「は？アナハイムごとき何が出来る？なにもできやしない、無駄に戦ってこれが落ちるのを指を咥えて見るしか出来ない連中になんが……」

「それを覆すのが、トレーズという男と、<sup>トレーズ</sup>奴が作り出したガンダム……グウ!？」

東はクロエから拳銃を奪い取り、足に向けて撃つたのだ。

「はあ……クーちゃん、先に戻ってといて」

クロエはその言葉を理解したのか、煙の様にその場から姿を消した。

「あの時に28話のガンダム強奪事件<sup>トレーズ</sup>アイツを消しとくべきだったかなあ……東さん、困ったなあ」

そう言い、足を撃たれ立ち上がれない男の胸ぐらを掴み無理やり立ち上がらせた。

「ねえねえ、コイツの命とコウ・ウラキの命を取るかどっちを選ぶ？コイツを選んだらこの天才である私の力でコロニーを止めてあげるけど?？」

さあ言え閣下を助けると早く言え！言え！言え！

『……言うまでもない。私は……』

コロニーを破壊する。それが閣下の最後の命令……それが私の答えだ』

東にとって予想外の返答だった。

「そう、それでよいのだガトー……」

男は精一杯の笑顔をガトーに見せた。

そして東は自分の思う通りに動かない事に完全に頭に血が上りは声を荒げ勢いのまま男の脳天に鉛弾をぶちこんだ。

さらばガトー…… 後の事…… は任せ…… た

## 46話 駆け抜ける嵐

「閣下……!」

男はガトーに向け精一杯の笑顔を向け散った。

ガトーが感じたのは信頼と謝罪であった。

(必ずや最後の命令、として見せましょう……!)

ガトーはコウに向け通信を送った。

「私は外で亡<sup>フアントム</sup>国を蹴散らしてくる。ウラキ、貴様はどうする?」

『あ、ああ……俺も外で……!?!』

すべて見ていたコウはあの選択で困惑気味をだった。しかしそれは吹き飛ぶ事になった。

突然、3号機の真上からノイエ・ジールにも劣らない程のビームが発射された。しかしIフィールドで難なく防ぐ事が出来た。

『ガトー、先に行け。どうやら俺の先客が来たみたいだ』

「……承知した」

機体を反転させ、穴が開いた所からこの場を後にしたのだった。

ノイエ・ジールを見送り、コウは上を見た。

そこに全身装甲のISが存在していた。黒く禍々しい色、そして黒の翼が生えており開発した本人の強大な憎悪と怒りを表す様なISだった。

そしてコウは誰が乗っているのか直感した。

「篠ノ之束……!」

「気安く呼ばないでくれる?不愉快だから」

「……何故だ?何故、貴様は地球にこんな物を落とそうとする!」

「そんなの言うまでもないじゃん……。邪魔だから」

「それはお前を利用しようとする人間、邪魔をする人間達の事か?それとも貴様は自分の思う通りに進まなかったら全てを破壊するのか、どっちだ!?!」

「プツハハ……ハハハハハッ!!全部に決まってるじゃん!!コイツ<sup>コロニー</sup>を使い、私を利用する人間や邪魔する人間を全部消して、思い通りに

進まなかったら全部！全部！破壊する！！・・・それが何がいけないのかな？」

コウはこの時に理解してしまった。

「篠ノ之束」という偉大な「天才」はいない、目の前にいるのは「篠ノ之束」という皮を被った凶悪な「天災」だということに……

「・・・貴様と対話をした俺がバカだった……。貴様はこの世界に存在してはいけない人物だ……！その憎悪と怒りを振り撒くのならば……」

お前を殺す——！！

コロニーの外で奮闘していたガトー、その回りには最初に戦ったコロニーの背後よりも多くの残骸が存在していた。

「あとは貴様だけだ……オータム」

「クソツタレエがあ！！てめえは一体、どっちの味方だ!?!」

「言うまでもない、私は閣下の味方だ！貴様らのような裏切りを平然と行う者に私が着いていくと思っていたか!?!」

ガトーはノイエ・ジールのコックピットを開き、オータムにもう一つの姿を見せた。

「決着を着けるぞ、オータム！このフルアーマーサイサリスでな……」

!!

そしてガーベラ・テトラから「プチン」と血管が切れる音がどこぞもなく聞こえた。

「同格のサイズで戦ってやろうてかあ……？ふざけているのかあ!!」

ビームマシンガンを向け、遠慮なく引き金を引いたのだった。

「アツハハハハハ!!どうしたどうしたあ？私を殺すんじゃないのか……なあっ!？」

束の駆るIS……破壊の復讐者はコウを追跡しながら片手に持つレーザーライフルで周囲の建物は破壊していく。

「んでハエみたいにちよこまかと動かれると鬱陶しいなあ!!」

破壊の復讐者の翼の羽が2門のキャノン状に変形し、紅い光線が放たれた。

コウは建物を盾に、念の為に張ったIフィールドで防ぐ事が出来た。

しかしその威力を物語るように盾にした建物と周囲の建物は溶解していた。

(なんて威力だ……!もう一度食らえばIフィールドが確実に持たない……!)

「もう鬼ごっこは終わりかなあ？コウ・ウラキ君？」

「チイ!!」

コウはマイクロミサイルを放ち、ミサイルの嵐が束を襲う。

それを回避する束。

さらにコウは追加としてマイクロミサイルをもう一つ放ち、メガビーム砲を撃った。



「鬱陶しいなあ!!消えろ・・・よ?」

キャノン砲を放とうとするが何故か姿を消したウエポンシステム。次の瞬間、束は横腹から長い砲身を食らい、建物にめり込むようにぶつかった。

「があっあ・・・!!いい、いつの間に・・・!!」

「これで終わりだっ・・・!!」

零距离でメガビーム砲を放とうとするコウ。しかし束の手にはビームサーベルがいつの間にか持たれていた。

そして束はメガビーム砲の砲身の根本まで切り落とし、ゆつくりと地面に着地した。

「痛いなあ痛いなあ、まったく・・・乙女には優しくしないと嫌われちゃうよ?てなわけで本気だすね?」

ビームサーベルの刀身は大きく伸び、横に一閃した。

上に回避するコウだが、破壊の復讐者の刀身は横から襲い掛かる。しかしメガビーム砲だった砲身の根本からはビームサーベルが展開され、難なく防いだ。

(は?なんでそこからビームサーベルが!?)

「うああああああっ!!」

驚愕する束を余所に右手でビームサーベルを展開したまま、左手でフォールテイングバズーカを1丁取り出し、弾が尽きるまで連続で放った。

コウの狙いは翼だった。

狙い通り、弾は翼に直撃し片方が無くなってしまい、破壊の復讐者のバランスが一瞬だけ崩れてしまった。

「しまっ・・・!!」

それが束の最後の言葉だった。

ウエポンシステムをパージしたコウはビームサーベルを展開し、抜

刀する様に構えたまま瞬時加速の一つである二連加速ダブルイゲニツシヨウで一気に間合いを詰めた。

「これで・・・終わりだあ!!!」

ビームサーベルの刃は破壊の復讐者の胴を切り裂き、そして絶対防御を貫通したのだった。

#### 同時刻

コウが束との戦いを終えた中、オータムとガトーとの決着は時を同じくして終焉を迎えていた。

「はあ・・・はあ・・・ガトー・・・!」

「・・・どうした？息が上がっているようだが？」

「てめえもだろうか・・・!!」

「否定はせん・・・だがここで幕引きだ。引導を渡してやる!」

ビームサーベルを構えたガトー。そしてオータムは左右大腿部からビームサーベルを2つ取り出し、二刀流を構えた。

「来い!!」

「死ねえ!ガトーオ!!」

互いのビームサーベルがぶつかり合い、激しく光った。

ガトーはゴリ押しでサマーソルトを食らわせ、オータムにダメージを与えた。

しかしオータムは改良したガーベラ・テトラの両手から機関砲を放ち自ら近づいた。

機関砲を瞬時に避けるガトー。しかし連戦続きのせいか、やや動きが鈍っていた。

「どうしたどうしたあ!?!動きが鈍くて、眠ってしまいそうだなあ!!」

追い打ちをかける様にビームサーベルを振り回しながら接近戦を行うオータムとやや防御に徹するガトー。

そして勝負は動いた。

ガトーがシールドからある物を取り出し、オータムに向け投げつけたからだ。

それを反射的に斬ってしまったオータムは煙に包みこまれた。

「クソッ！あの野郎!!」

下手に動く事が出来なかったオータム。

煙は晴れるとガトーの姿は無かった。

次の瞬間、ガトーがオータムの目前に姿を表しビームサーベル最大出力でガーベラ・テトラの胴に目掛け斬り伏せたのだった。

## 47話 MEN OF DESTINY

「はあ……はあ……」

コウの目の前にはビームサーベルで斬った破壊の復讐者が血を流すこともなく地に伏していた。

そして体力を削られたコウに通信が入った。

『ウラキさん！ソーラーシステムがまもなく掃射されます！急いで下さい！』

「了解、今すぐ出る」

DESTROY・アウェンジャー

コウは立ち上がり破壊の復讐者を見ることなくその場を後にしたのだった。

破壊の復讐者の指先がゆつくりと動いたのを知らずに

「ウラキか……」

「ガトー……」

ガトーはコウの方に顔を向けることなく、見ていたのはソーラーシステムとコロニーだった。

次の瞬間、コロニー内部が激しく光った。

「爆発した……？ガトーあれは一体？」

「時限式爆弾だ。恐らく閣下が奴等にバレぬよう設置したのだろうな」

「このタイミングでか……？」

少し不自然に思ったコウだったが突然、目の前が明るくなった。ソーラーシステムが発する光が周囲を照らしているのだ。そしてその光はコロニーを焼く光となるものだった。

順調に破壊出来る。全員がそう思った。

しかし目を疑うような事が起きた。

コロニー内部から巨大なビームが突き破る様に発射され、ソーラーシステムの一部が破壊されたのだ。

ソーラーシステムの出力は下がり、さらに地球の被害を免れない程の規模の大きさが存在しており、遂にはコロニーがソーラーシステムの真ん中をゆっくり突き破ってしまった。

それを見たコウは啞然とし、さらにはステーションから通信が入った。

『ウラキさん！巨大物体から敵対ISの反応あり!!高速でそちらに向かっていきます!!』

「なに!？」

その姿はすぐに確認出来た。

コウが絶対防御を突き破る位ビームサーベルで斬った筈のISが目の前にいたからだ。

(あ……)

啞然、驚愕し続けていたコウの体は動かなかった。

「ボサツとするな!!ウラキイ!!」

ガトーはノイエ・ジールでデンドロビウムを吹き飛ばし、ノイエ・ジールはISの巨大なビームサーベルにより片腕が切り落とされた。  
「ガトー!？」

「何をしているウラキ! 敵は目の前にいるのだぞ!!」  
「す、すまない……」

コウとガトーは目の前にいるISに注目した。それはコウにとって先程戦った破壊の復讐者<sup>デストロイ・アウエンジャー</sup>だった。

しかも片方の翼は破壊した筈が既に元の状態に戻っていた。

「篠ノ之束、生きていたのか……!」

「あのIS、なんと禍々しいものか……。相当天災に憎まれているな?ウラキ」

「そうだな……。あの様子だと俺が生きていたら何回も蘇ってきてそうだった……。な!!」

クローアームからビームサーベルを展開し、破壊の復讐者に向けてサーベルを振りかざした。

しかし負けじと破壊の復讐者もまたビームサーベルを展開、片手で防ぎサーベル同士による鏝迫り合いが始まった。

(隙が多い!!)

ノイエ・ジールの有線クローアームが破壊の復讐者に襲い掛かる。だがデンドロビウムのサーベルを防いだまま、もう一つの手でサーベルを展開し、有線クローアームの有線を叩き斬った。

(片手で防いでいるにも関わらず片手で斬るとは……恐ろしい奴め……!)

そして破壊の復讐者はデンドロビウムのサーベルを凄まじい推力で押し返しクローアームごと切り落とすとした。

「グツウ!?なんて力だ……!」

一太刀入れようとする破壊の復讐者。しかし破壊の復讐者は横蹴

りを食らい大きく吹き飛んだ。

破壊の復讐者に横蹴りを食らわしたのは、ノイエ・ジールから脱していたフルアーマーサイサリスだった。

「2号機だと．．．!?でもあの時大破した筈じゃ．．．!?」

「ウラキ、気になる所悪いが奴が来る。構えろ!」

コウはデンドロビウムのドッキングを解除し、ステイメンへと移行し身軽となった。

そして吹き飛ばされた破壊の復讐者が戻ってきた。そして腰に差していた2つの刀を引き抜いた。

「ウラキ、この戦い早急に終わらせねば．．．」

「ああ、悠長にしている暇は無い．．．ケリをつけてやる!」

二機のガンダムはビームサーベルを展開し、破壊の復讐者一直線で瞬間加速を行った。

防御体勢に入りビームサーベルを抑えた破壊の復讐者。しかしガンダムは止まらない。

ガトーは左腰からビームサーベルを引き抜き胴体を貫こうとするが察知され後退。コウはそれを先読みして背後から切り裂く。

しかし翼は盾の様に変形しビームサーベルを弾かれ、盾からミサイルが放たれた。驚いたコウはシールドを構えながら回避した。誘導するミサイルではなく迎撃用だった為弾道は真っ直ぐに飛んだ。

(行ける!あの時は遠距離だったから分からなかったが接近してコイツの弱点が分かった．．．!)

しかし時間は有限。一発で決めなければ時間は無い。

「ガトー!!攻撃を合わせろ!!」

「応ッ!!」

再び対峙するように構えた。

先に動いたのはコウで瞬間加速を発動。姿勢を低くし二刀の刀を鞘から抜く様に急接近。

同時に破壊の復讐者も瞬間加速を発動し目の前にいるガンダムを破壊するため紅く目を光らせながら急接近した。

二刀のサーベルを抜いたコウは斬り開ける様に空間を斬った。

隙だらけと言わんばかりの腹が丸見えで破壊の復讐者は胴体を真つ二つにしようとする。

しかしコウの攻撃はまだ終わっていないなかった。まだ振り下ろされていなかったビームサーベルは破壊の復讐者の胴体目掛けX字に斬られたのだ。

そして背後に回ったガトーはビームサーベル最大出力で翼が盾に変形する前に素早く突きISコアを破壊した。

『アア……ワタシ……ハ……コンナ……』

蚊のような声と共に破壊の復讐者はISコアを破壊された事によりその機能を停止したのだった。



# STAR DUST MEMORY

デンドロビウムにドッキングしたステイメン。その隣には両手を失ったノイエ・ジールが存在していた。

(ノイエ・ジールのコアを暴走させて自爆。同時にリミッターを解除したメガ・ビーム砲でコロニーを破壊。完全に破壊出来なければ後ろに控えているソーラーシステムが破壊してくれるが同時に俺達にも被害が出る。これは最後の手段だな)

目的地に着き目の前には自分達より大きいコロニーがドンと存在していた。

「自爆に巻き込まれるなよ」

「そんなへまはせぬよ。では行ってくる」

ノイエ・ジールはコロニーに突っ込み一気に距離を詰めた。ガトーは目前でコアを暴走させコックピットから脱し急いでその場から離れた。

次の瞬間、ノイエ・ジールは大爆発を引き起こした。

見届けたコウはメガ・ビーム砲のリミッターを解除し主砲をコロニーに向けた。

「いけえええええええええ!!」

メガ・ビーム砲から極大ビームが放たれコロニーを包み込んだ。

(耐えてくれ・・・!ガンダム!!)

コウの心の声に応える様にステイメンのツインアイは輝きビームは一層激しくなった。

そしてビーム砲は徐々に小さくなっていき目の前の光景が露になった。

「コロニー消滅・・・破片だけが散々に・・・！」

浮遊している破片は様々だがそれら全てがライフルで破壊出来る物や大気圏で燃え付きる物ばかりであった。

つまりコウはコロニー落としを阻止することが出来たのだ。奇しくも時間は午前1時19分とデラーズ紛争の戦闘終結時間と重なっていたがコウはその事を知るよしも無い。

(守れたんだな俺は・・・あの星を・・・)

フォールテイニングシールドとビームライフルを取り出しドッキングを解除した。地球の引力に引っ張られる感じはするが破片を破壊する作業に問題はない。

『ウラキさん巨大物体の破壊ご苦労様でした。後はソーラーシステムで作業をしますその宙域から・・・どうした!?!』

『ソーラーシステムがハッキングされています!対処しようにも相手の動きが速すぎて・・・!!』

『不味い・・・ウラキさん!掃射まで30秒!急いでその場から離れてください!!』

ソーラーシステムはコウ一人焼き殺すような輝きを持ち始めた。

(ソーラーシステムをハッキング出来る奴は奴篠ノ之束しかない・・・!自分が死んだ後に土産を残していったか!!)

ビームライフルを捨てシールドを前に構えた。そしてスラスタ全開で地球に急降下した。

云わば大気圏突入である。

「ぐうっ・・・ああああ!!」

地球の重力に囚われた事を理解したコウはスラスタを止め必死にシールドを前に構えながら突入していく。しかしシールドが熱を

持ち始め凄まじい熱量がコウに襲いかかる。

ハロも同じ必死で冷却作業を行っているがそれでも間に合わない。次の瞬間、シールドの熱が微弱ではあるが徐々に引いていった。

「ツーなんだ!?!」

いきなりセンサーの下から反応した。見るとそれはドダイにそっくりな物に乗っていたサイサリスだった。

「ウラキ! 乗れ!!」

コウはゆつくりとドダイに着地しサイサリスを見た。

「着地点は!?!」

「日本だ! 詳しい着地点は分からん!!」

ガンダム達を乗せたドダイは大気圏を突破。遂には成層圏へと突入した。

「む・・・成層圏か。なら私はここで別れるとしよう」

「・・・行くのか?」

「うむ。いまだ戦火を広げる亡国機業を野放しにするわけにはいかないのでな。貴様とは二度と会うことは無いだろう。もし会うとすれば敵同士となろうな」

「・・・その時はその時で俺がお前を倒す!」

その手を握りガトーに見せた。ガトーは鼻で笑い立ち上がりコウに振り向きもせずドダイから飛び降りた。

(・・・コウ・ウラキ。次会った時は貴様と本気で決着をつけたいものだな・・・)

ガトーは仲間が乗っているドダイに乗りその場を離れたのだった。それを見送ったコウは着地点を確認した。

(場所は・・・IS学園のアリーナ!? なんでバリアが張られている所に落ちるんだ!?!)

運が悪い事に着地点がまさかのIS学園のアリーナだった。

もしそこに落ちれば大変な事になる所か先日の襲撃のせいで緊張状態が続いてるせいなので真つ先に修羅が来るに違いないだろう。

それを避ける為コウはハロにドダイの遠隔操作を任せる事となった。

「成層圏なら着地地点は調整できる……！場所はA E社、出来るか!？」  
「マカセロ！マカセロ！」

成層圏を突破し対流圏へと突入。着地地点の調整はハ口のお陰でギリギリ間に合った。

地上に近づくにつれドダイを安定させてゆつくりと着陸。

コウは足を踏み入れ、ふと空を見上げた。

「……星屑」

ソーラーシステムでも破壊出来なかった一部の破片は地球の重力に囚われ流れ星のように燃え落ち、その背景である夜空は無数の小さな星が点々とし、屑の様に散らばっていたのだった。

戦闘終結時間午前1時19分。

亡国機業・天災篠ノ之束によるコロニー落としては阻止された。

しかし野望・執念・憎悪・長きに渡る因縁が入り交じった戦場は地獄の海と化した。

だが2つの嵐が地獄の海を駆け抜けた。

1つの嵐は再び宇宙に舞い戻り天災の野望と憎悪を叩き潰し何度蘇ろうともう一度叩き潰した。

もう1つの嵐は天災による策謀で一度は執念に囚われてしまった。

しかし己の瞳で真実を知り1つの嵐と共闘し天災の野望を何度も叩き潰した。

IS世界においてガンダムという強力な兵器が生み出されたことによりISに関わった人物達の運命、人生、その最期を大きく変えた。

勝利者などいない。

2つの悪によるコロニー落としては終焉を迎え、誰にも知られる事なく歴史の闇へと葬り去られたのだった……

〈END〉